

第81図 第3環境 5区(環境途切れ部)平面図・土層断面図

- 1 ~ 2 様式のものと思われる。489は口縁端部に 2 条の凹線文を施す壺の口縁部である。III - 2 ~ IV - 1 様式のものと思われる。491~497・499は口縁端部に凹線文を施す壺の口縁部である。491は口縁端部に粘土紐、499は円形浮文を合わせて施している。また、口縁部下に突帯文を施す 494・495や凹線文を施す 497 もみられる。498は大型の壺の頸部～肩部で頸部に凹線文と指頭圧痕文帯、肩部に凹線文を施すものである。以上、IV - 1 様式のものと思われる。500は頸部に突帯文を施す壺の頸部～肩部である。III - 2 様式のものと思われる。501は肩部に羽状文・直線文・円形浮文を施す壺の肩部である。III - 2 ~ IV - 1 様式のものと思われる。502は口縁内面に凹線文・円形浮文・貝殻刺突文を施す壺の口縁部で、503は口縁内面に波状文、口縁端部に凹線文を施す壺の口縁部である。504・505は口縁端部に凹線文を施す壺の口縁部である。504の口縁端部には刻日・円形浮文も施されている。507・508は口縁端部と口縁内面に凹線文を施す壺の口縁部である。以上、IV - 1 様式のものと思われる。506は口縁端部に凹線文と刻日を施す壺の口縁部である。III - 2 ~ IV - 1 様式のものと思われる。509は口縁端部が下に垂れるタイプの壺の口縁部で、口縁端部には凹線文が施されている。510~512は直口壺の口縁部・口縁部～肩部で、510の口縁部と 512 の口縁端部には凹線文が施されている。512は III - 2 ~ IV - 1 様式、510は IV - 1 ~ 2 様式のものと思われる。

壺：513・514は施文がみられない壺の口縁部～肩部である。I - 4 ~ II - 1 様式のものと思われる。515も施文がみられない壺の口縁部～肩部である。III - 1 様式のものと思われる。516・518・520・522は壺の口縁部～肩部であり、516は口縁端部に 2 条の凹線文、518・522は頸部に指頭圧痕文帯、520は口縁端部に 1 条の凹線文と頸部に指頭圧痕文帯を施すものである。以上、III - 2 ~ IV - 1 様式のものと思われる。517・519・521・523~525は口縁端部に凹線文、頸部に指頭圧痕文帯を施す壺の口縁部～頸部付近で、521・524の口縁端部には刻目、523には円形浮文が合わせて施されている。以上、IV - 1 様式のものと思われる。

高坏：526~528は口縁端部が肥厚する高坏の坏部で、532は外に折れ曲がる口縁端部をもつ高坏の坏部である。以上、III - 1 ~ 2 様式のものと思われる。530・531は口縁部外面に凹線文を施す高坏の坏部である。このうち、530は口縁端部にも凹線文が施されている。IV - 1 様式のものと思われる。529は脚部の 5 方向に三角形の透かしが入る高坏の坏部～脚部である。

その他の土器：533は何かの土器に付いていた把手である。山陰地方では把手付きの弥生土器はみられないようであるが、和泉・揖津地域等では把手付鉢がみられる。<sup>[30]</sup>

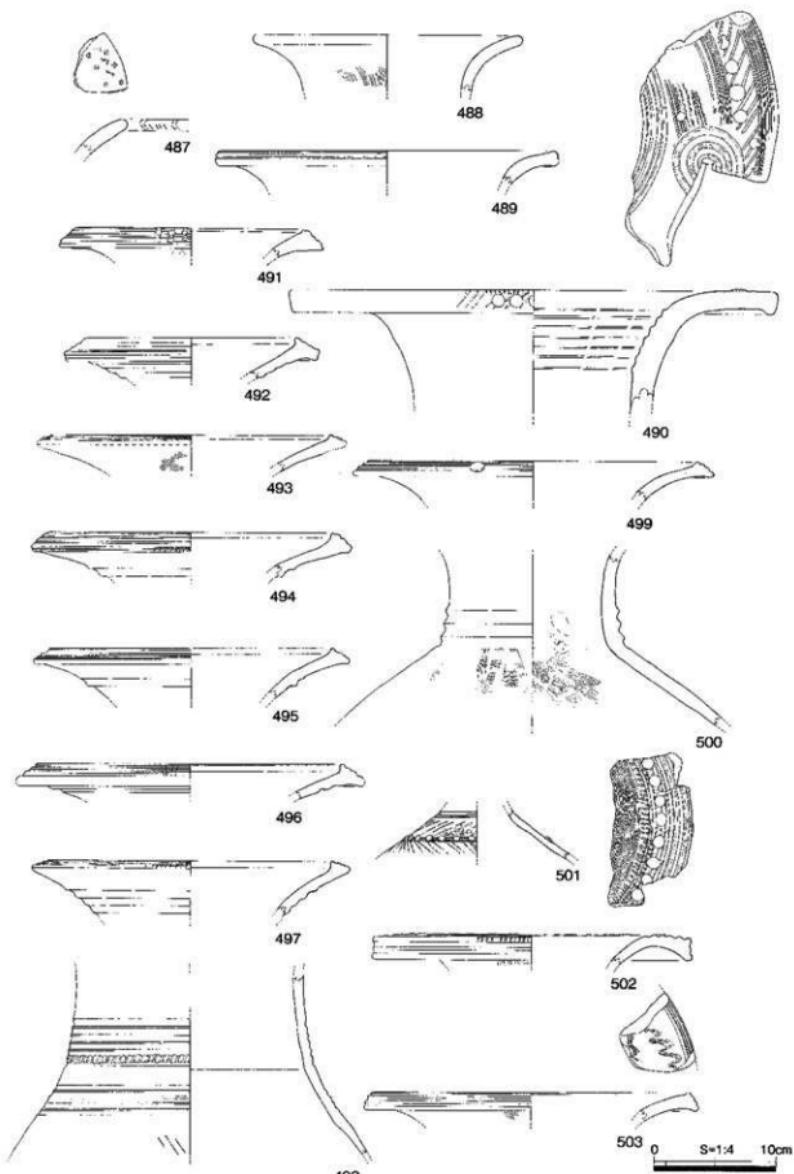
底部：534~546は壺・壺・鉢の底部である。534・535の底部には円孔があけられ、544~546の底部はハの字状に開く、上げ底となっているものである。また、544の外面と 546 の内面には炭化物が付着している。

#### 土製品（第85図）

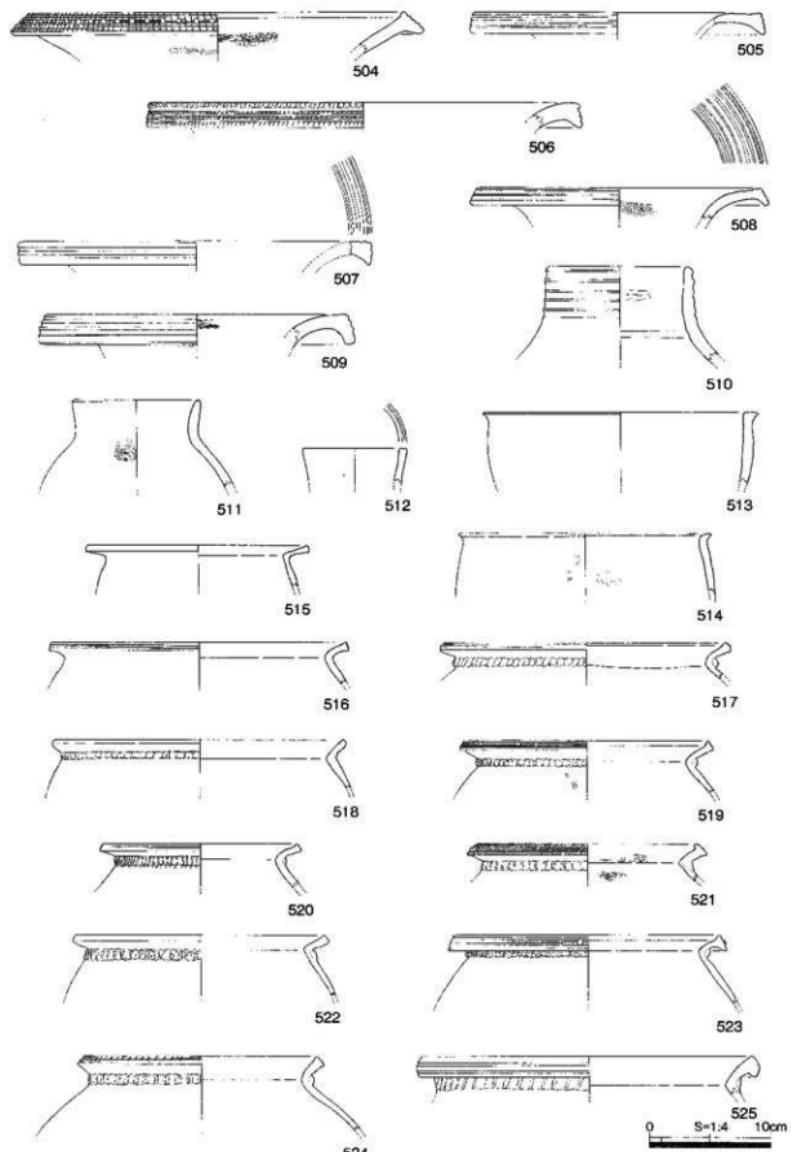
土玉：547は祭祀遺物と考えられている土玉である。形状は歪な球形を呈している。本遺跡内では他に山頂部、1-c環壕、第3環壕、小ビット群1、SL-06、SB-14でも出土している。

#### 石器（第86・87図）

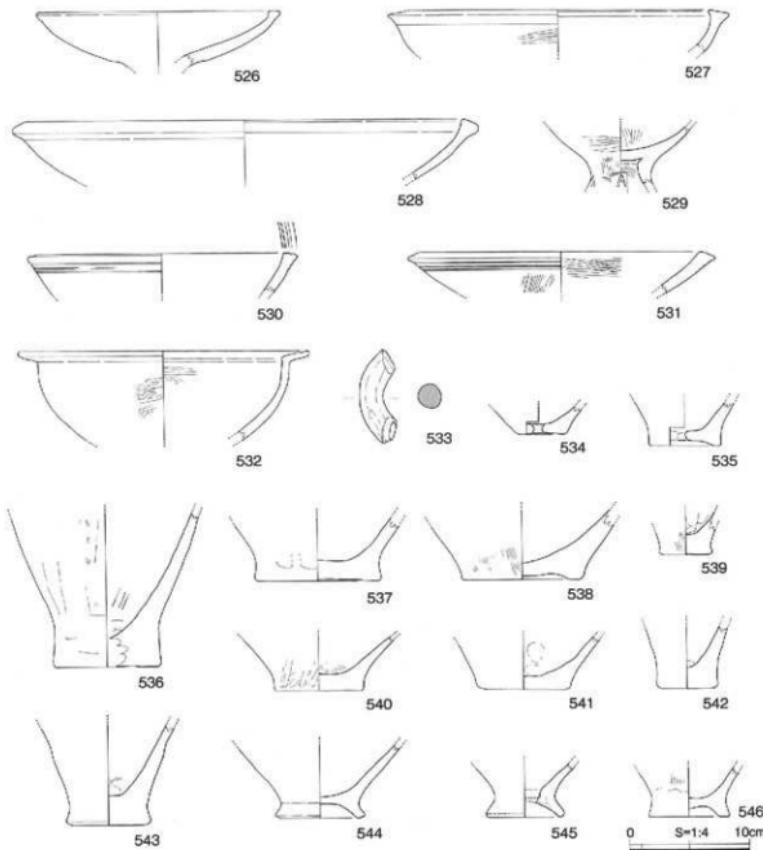
環状石斧：548は民俗例から円孔に木棒を入れ、戰闘指揮棒として使われたとも想定されている環状石斧である。本遺跡では第2環壕、平坦加工面遺構でも出土しており、総数 5 点を数えるが、



第82圖 第2環壕 出土土器 (1)



第83図 第2環境 出土土器（2）

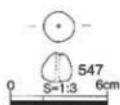


第84図 第2環壕 出土土器（3）

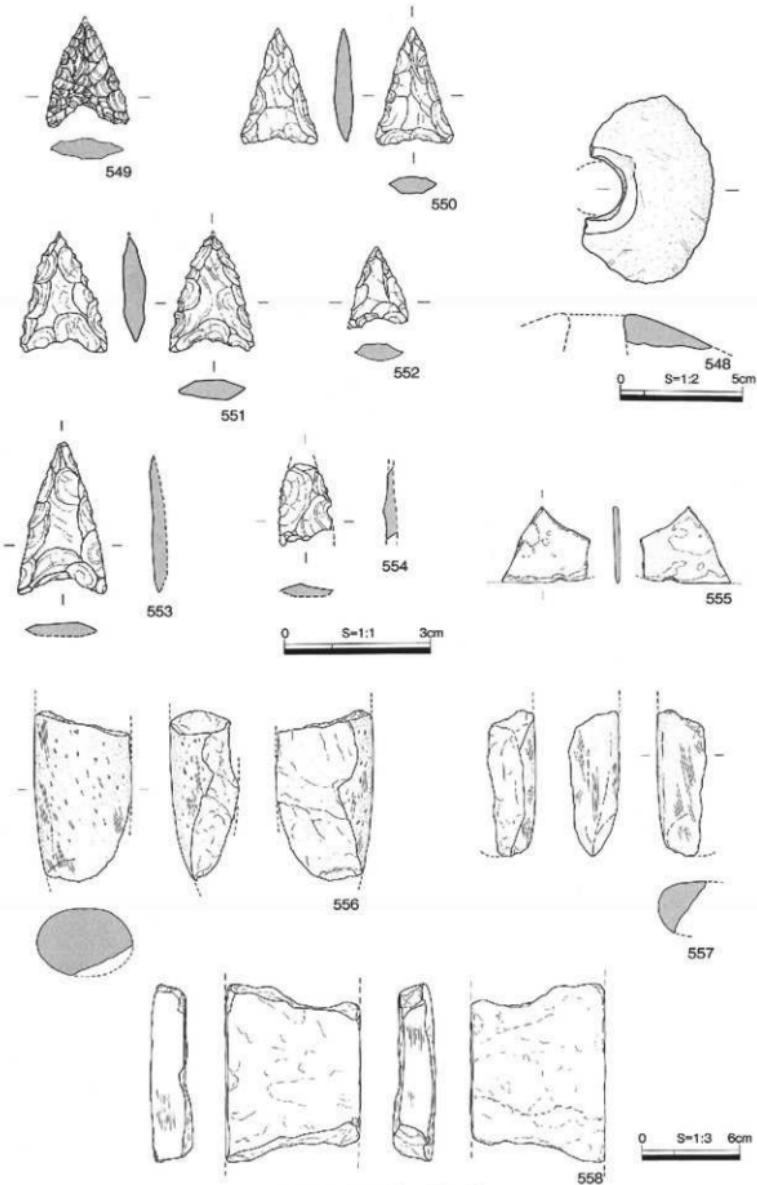
いずれも欠損品である。

石鎚：549～554は黒曜石製1点549、サヌカイト製5点550～554の石鎚で、形態は凹基式・平基式がみられるものである。石鎚自体が小さく且つ欠損品もあったことを加味すると、調査時に見落としてしまった可能性が考えられることから、実際にはこれ以上の量の石鎚が散在していたものと思われる。なお、石鎚は本遺跡内では大量に出土しており、出土総数は200点を超えている。

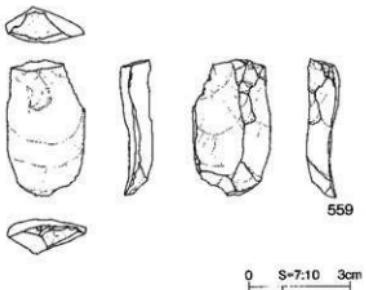
その他の石器：555は石包丁の刃部付近で、556・557は蛤刃石斧の欠損品である。このうち、557は刃部が1/3程度残存している。



第85図 第2環壕 出土土製品  
(土玉)



第86図 第2環境 出土石器



第27図 第2環壕 出土旧石器

558は側面に使用した痕跡が残る砥石である。  
559は旧石器時代のものと思われる碧玉の剥片である。<sup>22</sup>

### 第3環壕 出土遺物（第88～93図）

第3環壕から出土した遺物は、壕底・環壕内堆積土からのものである。このなかでも多くの多くは堆積土からのもので、弥生前期末～中期後葉の壺・甕、弥生中期中葉～中期後葉の鉢・高杯・底部・土玉、黒曜石製の石鎌、石包丁、蛤刃石斧、柱状片刀石斧、敲石、砥石、つぶて石等が出上している。また、北東

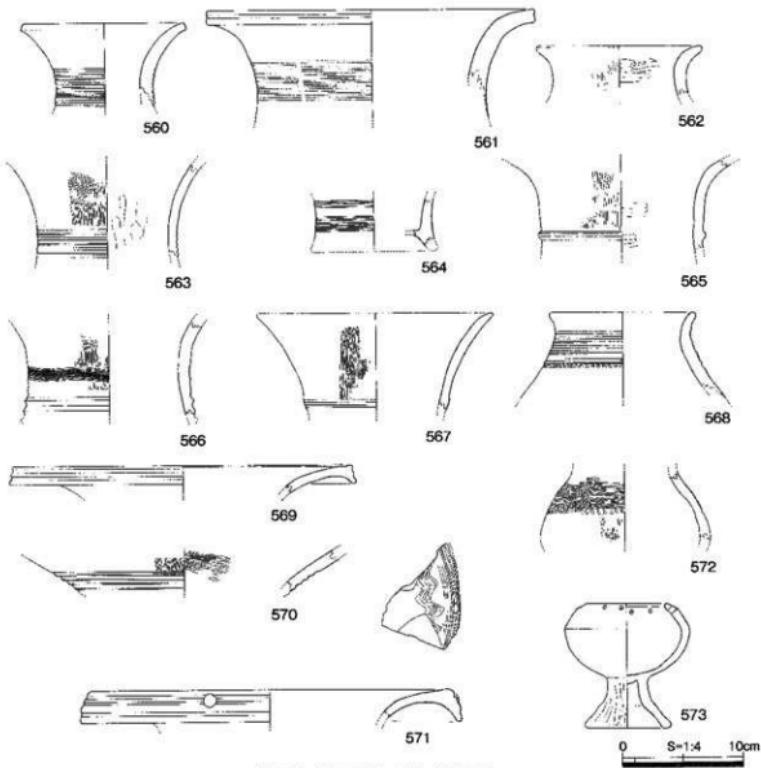
側の第3環壕外の斜面下方において旧石器時代と思われるナイフ形石器を採取している。なお、弥生土器片においては、図化できなかったものが多数あり、実際出上した土器はコンテナ7箱によよんでいる。

以下、簡単に出土遺物について記す。※出土地・寸法等、詳細は遺物観察表を参照。

#### 弥生土器（第88～90図）

**壺**：560は頸部にヘラ描き直線文を施す壺の口縁部～頸部である。564は頸部外面にヘラ描き直線文を施し、頸部内面に突帯文を廻す壺の頸部である。以ヒ、I-4様式のものと思われる。561は頸部に直線文を施す壺の口縁部～頸部で、562は頸部等に施文がみられない壺の口縁部～頸部で、563は頸部に直線文を施す壺の頸部である。以上、I-4～II-1様式のものと思われる。565～567は頸部に突帯を施す壺の頸部・口縁部である。このうち、566には頸部にクシ描き直線文も施されている。568は頸部にクシ描き直線文と三角形の刺突文を施す壺の口縁部～肩部で、口縁部はあまり外斜しないタイプである。572は肩部にクシ描き直線文と刺突文を施す壺の肩部～頸部である。以上、II-1様式のものと思われる。569・571は口縁端部に凹線文を施す壺の口縁部である。571の口縁端部には円形浮文、口縁内面には波状文が合わせて施されている。また、570は頸部に凹線文を施す壺の口縁部である。以上、IV-1様式のものと思われる。573は脚付無頸壺の完形品である。口縁端部に円孔が2孔・1対であけられている。

**甕**：574～577・580は頸部にヘラ描き直線文を施す口縁部～頸部・口縁部～胴部である。このうち、575の口縁端部には刻目が施され、580は口縁部が逆L字状を呈するものである。以上、I-4様式のものと思われる。578・579・581・582は施文がみられない甕の口縁部～肩部である。578の外側には煤が付着している。I-4～II-1様式のものと思われる。583は施文がみられない甕の口縁部～肩部である。III-1～2様式のものと思われる。585は口縁端部に1条の凹線文を施す甕の口縁部～胴部である。III-2様式のものと思われる。584は口縁端部に2条の凹線文を施す甕の口縁部～肩部で、587は施文がみられない甕の口縁部～肩部である。588・590は頸部に指頭圧痕文帯を施す甕の口縁部～頸部付近である。以上、III-2～IV-1様式のものと思われる。589は口縁端部に凹線文と刻目、頸部に指頭圧痕文帯を施す甕の口縁部～肩部である。IV-1様式のものと思われる。591は口縁端部に凹線文と粘土紐の貼り付けがされ、頸部に指頭圧痕文帯が施された甕の口



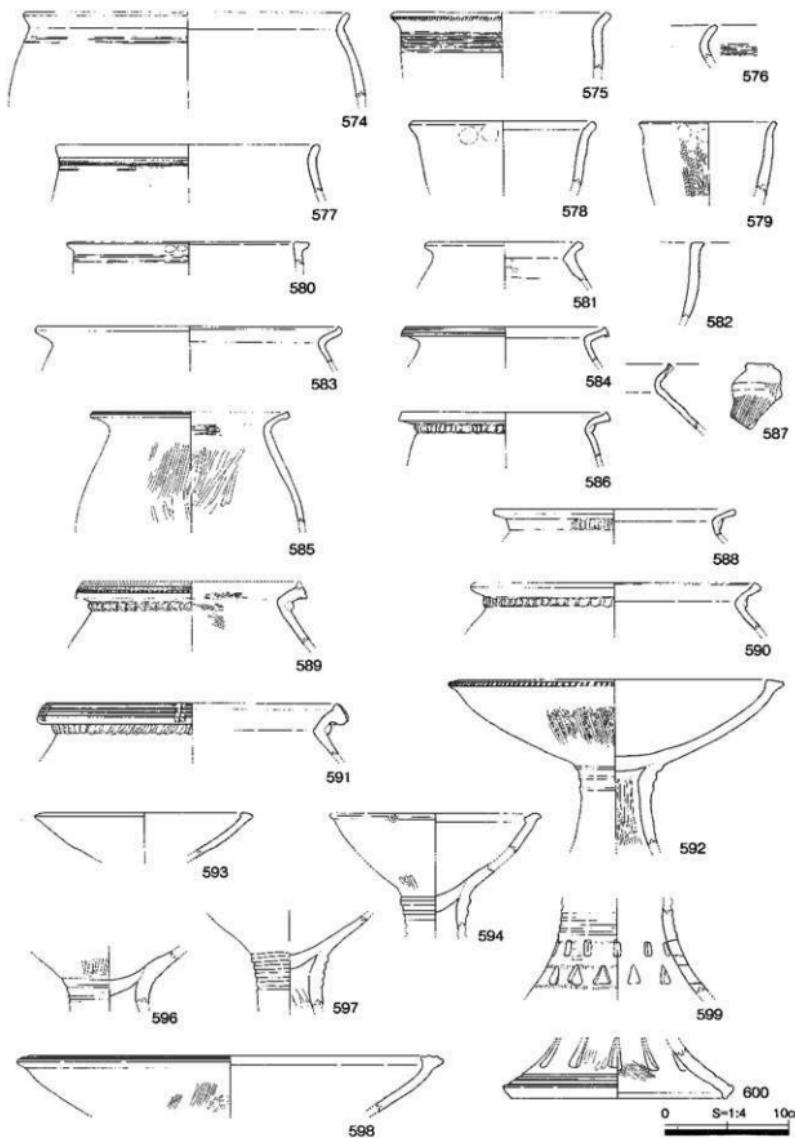
第88図 第3環壕 出土土器（1）

縁部～頸部付近である。IV-1～2様式のものと思われる。

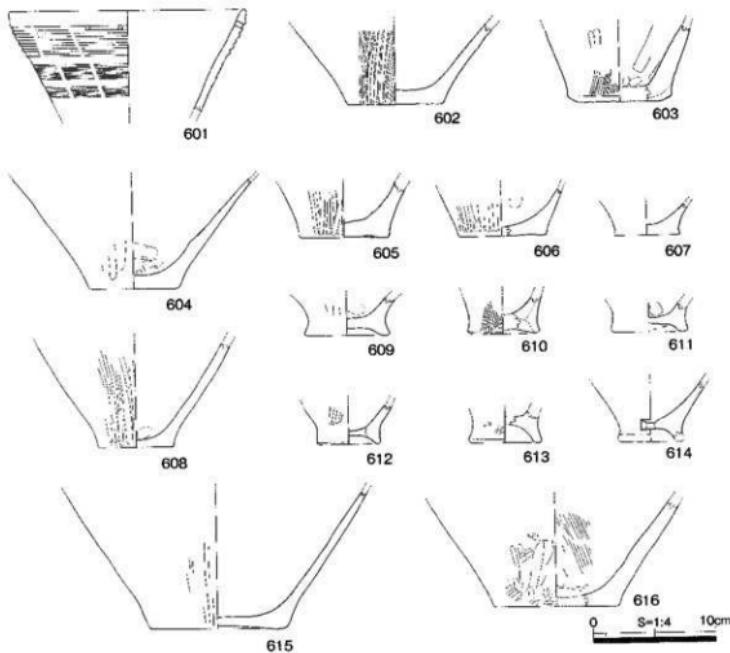
高坏：592・593は口縁端部が肥厚する高坏の坏部・坏部～脚部である。このうち、592の口縁端部外面には刻目が施されている。III-1～2様式のものと思われる。594も口縁端部が肥厚する高坏の坏部～脚部で、脚筒部外面には凹線文が施されている。598は口縁端部が肥厚し、凹線文2条を施した高坏の坏部である。以上、IV-1様式のものと思われる。596・597は脚筒部外面に凹線文を施す高坏の坏部～脚筒部である。IV-1～2様式のものと思われる。599・600は高坏の脚部で、599は凹線文と長方形・三角形の透かしが二段に作られ、600は三角形透かしと脚端上部に3条の凹線文がみえるものである。IV-2様式のものと思われる。

鉢：601は逆ハの字状に聞く鉢と思われるもので、口縁端部下に2孔の円孔と6条の突帯文・直線文が施されている。本遺跡出土のこのタイプの弥生土器は、これ1点のみである。

底部：602～616は壺・甕・鉢の底部である。609～614の底部はハの字状に聞く上げ底となっているものである。また、614の底には円孔があけられ、608の内面には炭化物の付着が認められている。



第89図 第3環境 出土土器（2）



第90図 第3環壕 出土土器（3）

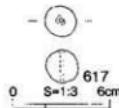
#### 土製品（第91図）

土玉：617は祭祀遺物と考えられている土玉で、球形を呈するものである。本遺跡内では他に山頂部、1-c環壕、第2環壕、小ピット群1、SI-06、SB-14でも出土が認められている。

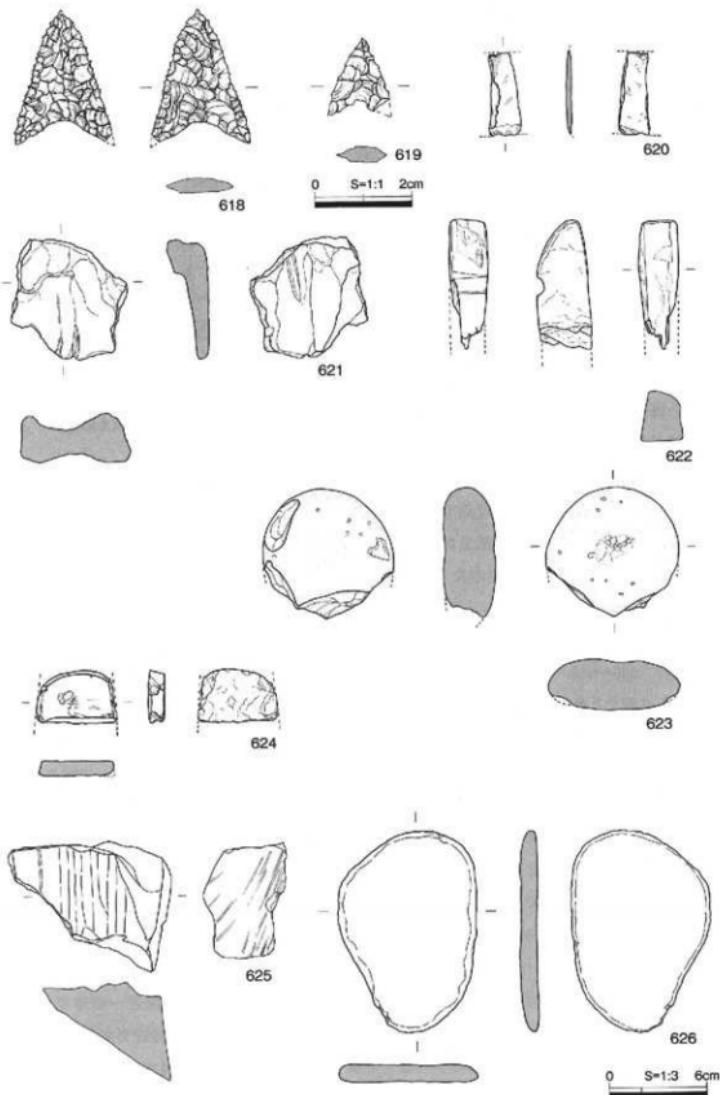
#### 石器（第92・93図）

石鎚：618・619は黒曜石製の石鎚で、形態は円基式を呈するものである。石鎚自体が小さく且つ、欠損品もあったことを加味すると調査時に見落としてしまった可能性が考えられることから、実際にはこれ以上の量の石鎚が散在していたものと思われる。なお、石鎚は本遺跡内では多量に出土しており、出土総数は200点を超える。

その他の石器：620は右包丁の欠損品で、621・624・625は砥石と思われるものである。このうち、625は使用時の痕跡と思われる3条の溝と1条の線がみられる。622は抉入柱状片刃石斧であるが、のちに砥石として転用されたと思われるものである。623は敲石で、中央に潰れた痕が残るものである。626は用途不明の石である。627は旧石器時代のものと思われるナイフ形石器である。<sup>122</sup>



第91図 第3環壕 出土土製品（土玉）



第92図 第3環壕 出土石器

### 環壕周辺 出土遺物（第94～97図）

1-c環壕・第2環壕・第3環壕の周辺からも多く遺物が出土している。そのなかで第2環壕・第3環壕が地滑りで欠落している環壕地滑り部と環壕間・環壕周辺から出土した遺物を記しておく。※出土地・寸法等、詳細は遺物観察表を参照。

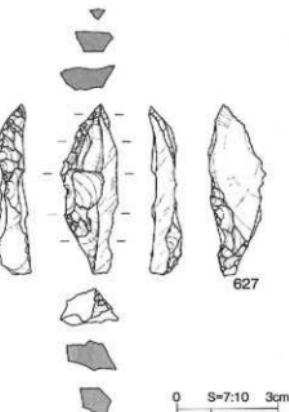
### 環壕地滑り部 出土土器（第94図）

弥生土器：628・630は欠落した第2環壕付近で出土した弥生土器である。628は頸部に4条以上、肩部に3条の突帯文を施した壺の頸部～肩部で、Ⅲ-2様式のものと思われる。630は壺の口縁部～胴部である。629・631・632は欠落した第3環壕付近で出土した弥生土器である。629は壺の口縁部で、631は肥厚した口縁端部上面に四線文、外面に凹線文と刻目を施した高坏の坏部である。Ⅳ-1様式のものと思われる。632は壺、壺等の底部である。

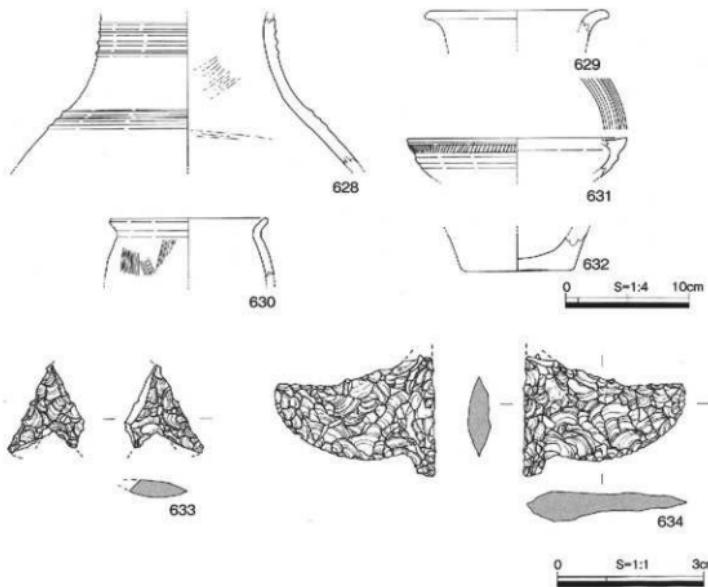
石器：633は欠落した第3環壕付近で出土した黒曜石製の石鏃である。凹基式のもので片側は欠損している。634は地滑り部の攪乱土から出土した黒曜石製の石匙と思われるものである。細かな剥離によってナイフ状に作り出されたもので、基部の上下に「つまみ」がつけられている（上部のつまみは欠損している）。

### 環壕間・環壕周辺 出土土器（第95～97図）

弥生土器：635～640・646・648・654は第2～3環壕間から出土した弥生土器である。635は頸部にクシ書き直線文と刺突文を施す壺の頸部付近で、外面に煤の付着がみられる。Ⅱ-1様式のものと思われる。636はくの字に屈曲する壺の口縁部～頸部付近で、637は頸部に2条のヘラ書き直線文を施すI-4様式の壺の口縁部～胴部である。638・640は壺の口縁部～胴部である。638には口縁端部に刻目があり、外面には煤が付着している。I-4～II-1様式のものと思われる。639は上げ底の壺・壺・鉢の底部である。646は口縁端部に凹線文・刻目・円形浮文、口縁内面に波状文を施した壺の口縁部で、Ⅲ-2様式のものと思われる。648は頸部下にヘラ書き直線文と刺突文を施した壺の口縁部～胴部付近である。I-4様式のものと思われる。654は大形の壺の底部と思われるものである。641～644・647・651～653・655は第1～2環壕間から出土した弥生土器である。643は頸部に1条の突帯文とヘラ書き直線文を施す壺の頸部で、I-4様式のものと思われる。641は口縁端部に刻目、口縁上面に刺突文、頸部にクシ書き直線文を施す壺の口縁部～頸部で、642は頸部～肩部にクシ書き直線文・三角形刺突文・波状文を施す壺の頸部～胴部付近である。以上II-1様式のものと思われる。644は肩部にクシ書き直線文と波状文を施す壺の肩部で、647は施文がみられない壺の口縁部付近である。これらは、Ⅲ-1～2様式のものと思われる。651・652は施文がみられない壺の口縁部～胴部である。I-4～II-1様式のものと思われる。653・655は壺・壺・鉢の底部で、653の底は上げ底状の台（脚）がついている。645は第3環壕外側斜面から出土した壺



第93図 第3環壕 出土旧石器

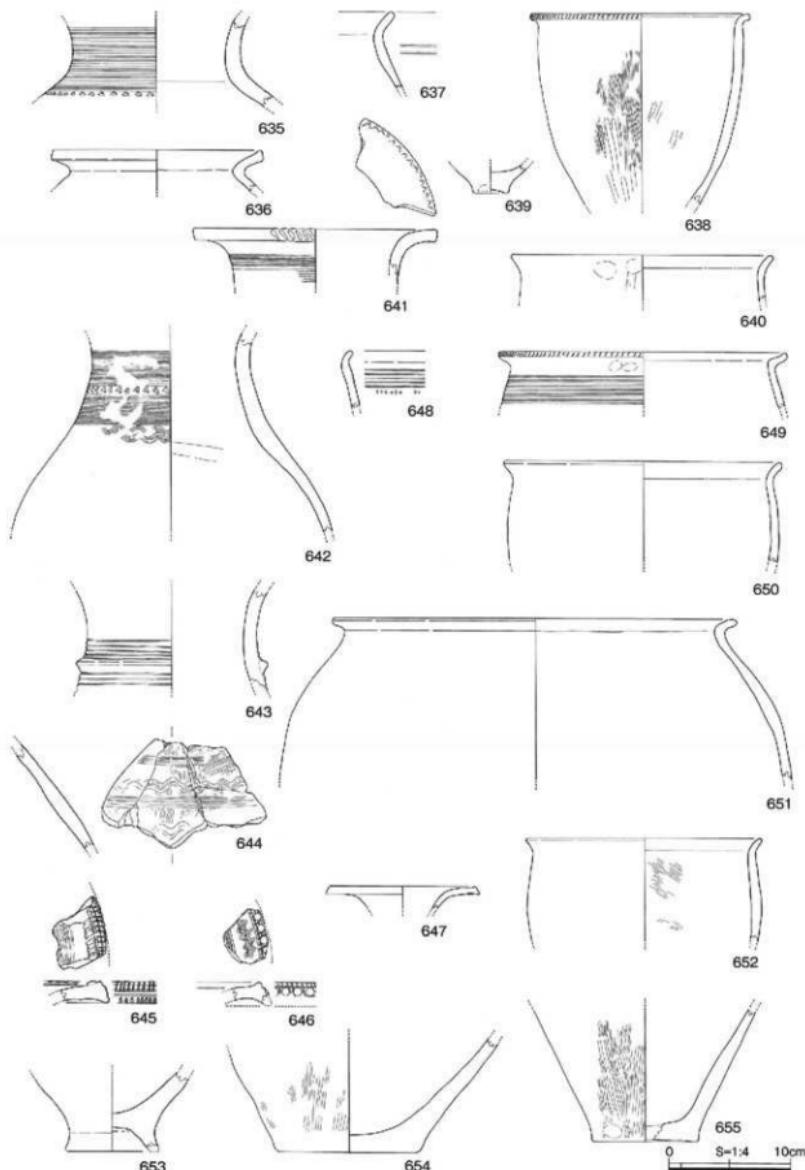


第94図 環壕地滑り部 出土土器・石器

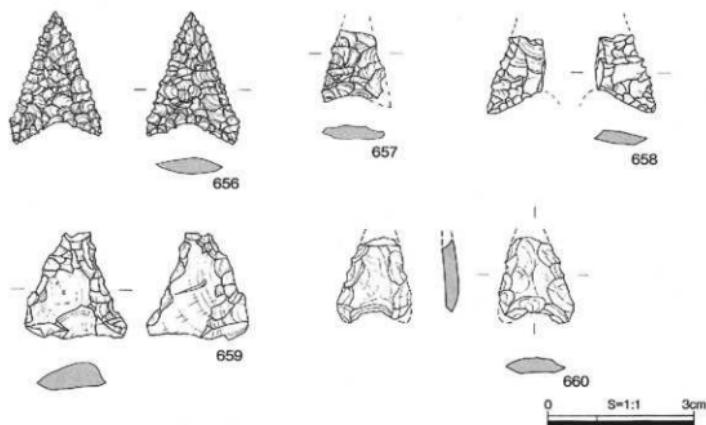
の口縁部で、口縁端部に3条の凹線文・刻目、口縁内面に指頭圧痕文帯が施されている。Ⅲ-2様式のものと思われる。649は1-a環壕外側の堆積土から出土した甕の口縁部～胴部である。口縁端部には刻目、頸部下には多条のヘラ描き直線文が施されている。I-4様式のものと思われる。650は環壕外の堆積土から出土した施文がみられない甕の口縁部～胴部である。I-4～II-1様式のものと思われる。

石器：657・658は第1～2環壕間から出土した黒曜石製の凹基式と思われる石鎚である。657は先端部と片側の基部が欠損、658は基部付近のみ残存している。660も第1～2環壕間から出土したサヌカイト製の凹基式と思われる石鎚で、先端部と片側の基部を欠損している。659は第2～3環壕間から出土した黒曜石製の石鎚未製品で、656は第3環壕外側斜面から出土した黒曜石製の凹基式の石鎚である。656は非常に細かい剥離がおこなわれているもので、側辺は鋸歯状となっている。

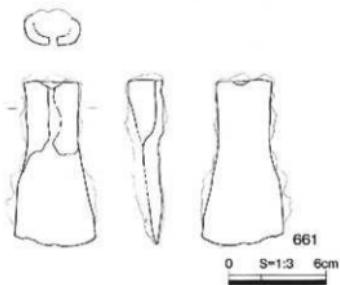
鉄器：661は4区の第1～2環壕間の斜面から出土した袋状鉄斧である。共伴する土器等が分からなかったため、どの時期に属するものか不明なものである。



第95図 環壕間・環壕周辺 出土土器



第96図 環壕間・環壕周辺 出土石器（石器）



第97図 第1・2環壕間 出土鉄製器（鉄斧）

## 小 結

本遺跡で検出した環壕は、弥生前期末～中期後葉に属するもので、この時期内に形態を 1-a 環壕→1-b 環壕→1-c 環壕・第2環壕・第3環壕と変化させ作られたことが分かっている。また、本遺跡出土遺物の7～8割はこれら環壕内からの出土であり、多種多様の遺物が見られる。

以下、出土遺物と環壕の変遷と少々の考察を述べた上で、まとめを記し、小結に代える。

### 出土遺物

#### 1) 1-a 環壕

環壕内から出土する遺物は、基本的に上方に存在する山頂部から転落してきたものと思われ、壕内及びその周辺には他の遺構は存在しない。また、これら遺物の多くは堆積土に含まれ、壕底からの出土はほとんど見られない。遺物の構成は、I-4～II-1 様式の壺・甕が多くを占め、他に石器類と礫石が少々出土している。土器類は、通常見られる弥生期の遺構と変わらない様相を示すが、石器類においては、石鎚の出土が顕著に見られる。石材は、隱岐久見産の黒曜石と香川県金山産のサスカイトが用いられ、サスカイト製が多い傾向を示す。これは、通常、山陰地方の弥生時代石鎚が黒曜石を用いて作られた様相に反するもので、本遺跡の石材流通の特異性を示すものなのかも知れない。その他の武器形石器として、磨製石剣の破片が出土している。この石剣片は、出土地付近に他の部位が見つからなかったことから、壕に入り込む以前に欠損していた可能性が高く、意図的に削られたものとも考え得る。また、特筆する遺物として、石板状石製品(95)が挙げられる。この遺物は、1-a 環壕内埋土中に含まれていたものであるが、同埋土層は 1-c 環壕時に掘り込まれた後の層であることが分かっていることから、弥生中期段階の混入品であることが認められている。この石製品の詳細は、別項(1-a 環壕 出土遺物 石器・第5章 自然科学分析と検討 環壕内出土 石板状石製品について)に委ねるが、楽浪郡の石硯の可能性が指摘されているものであり、仮にそうだとすれば、当該期の山陰地方の流通がより広域的に行われていた可能性を提示させるものである。その他、礫石として使用されたと思われる角ばった石がこれら遺物と混在して出土している。

#### 2) 1-b 環壕

出土遺物は 1-a 環壕同様、山頂部からの転落物で、その多くは壕内堆積土から出土したものである。遺物の構成は、I-4～II-1 様式期の弥生上器の壺・甕が多くを占め、他に石器類と礫石が少々出土している。これら出土遺物は、実際の遺物量としては多くはないが、調査範囲が限定される狭いものであったことを加味すると、1-a 環壕と同量程度の遺物は未発掘地に存在しているものと思われる。

#### 3) 1-c 環壕

出土する遺物の量は、環壕部及び遺跡内において最も多い。これら遺物はこれまでの壕と同様に山頂部からの転落物と思われ、その出土地は、堆積土中からがほとんどを占め、壕底からの出土は少ない。遺物の構成は、III-1～IV-2 様式の弥生土器の壺・甕・鉢・高杯・蓋・台形土器・土製品の上平・石器類の石板状石製品・磨製石剣・環状石斧・石鎚・石包丁・蛤刃石斧・扁平片刃石斧・砥石・匙・楔形石器・礫石・旧石器の楔形石器・剥片素材・鉄器等、多種多様な遺物が見られる。土器類に関しては、壺・甕がその多くを占めるが、高杯の出土も新たに加わる。この内、口縁

部が大きく外斜し、平坦に潰された口縁端部に円形浮文等が施された、壺の口縁部が比較的多く出土している。このような形態をもつ壺は、当山陰地域ではあまり見られず、他地域からの影響を受けたものとも推測される。また、山陰地域では出土が稀な台形土器(277)なども出土している(1-c環壕 出土土器 弥生土器 の項を参照)。その他、須玖式とも思われる壺片(218)が1片確認されている。この土器片は、詳細な検討が成されていないことから現段階では須玖式と確定できていないが、仮に九州からの搬入品となるならば、当該期における九州系土器の最東域の出土と成り得る。土製品においては、土玉が8点(335~341)出土しており、山頂部で祭祀が行われていた可能性を示唆させている。また、石器類では材質は異なるが、1-a環壕埋土内からも出土している楽浪郡の石硯にも似た石板状石製品(343)が出土している。この詳細は、別項(1-c環壕 出土土器 石器・第5章 自然科学分析と検討 環壕内出土 石板状石製品について)に委ねるが、前述のとおり流通の広域性が考えられるものである。その他、特筆するものとしては、磨製石剣と環状石斧が挙げられる。磨製石剣は、銅劍形(344)と鉄劍形(345)の一部が1点づつ出土しており、両者とも他の部位が見つかっていないことから、意図的に欠かれた可能性が高いものと思われる。また、銅劍形石剣は文字通り銅劍を模倣したものと考えられ、形式的にはI式に分類されるが、この形式に通常見られる間の双孔はないものである。環状石斧(346~348)は、円盤状の周囲に鋭利な刃が作り出されており、直接的な武器とも成り得るが、民俗例から木棒にこれを差し込み、戦闘指揮棒として使用されたとも推論されるものである。その他石器では、1-a環壕と同様、石硯の出土が顕著に見られている。その出土数は1-a環壕を遥かに超え、1遺跡の出土としては極めて多い。用いられた石材は、1-a環壕同様、隱岐久見産の黒曜石と香川県金山産のサスカイトの両者で、サスカイト製の方が多い傾向を示す。また、黒曜石製の石硯の中には側刃が鋸歯状で表裏ともに緻密な剥離を施すものも見られ、武器・狩猟に使用するためだけに作られたとは思えない石硯も中には見られる。その緻密さは、見せる為に作られたとも言えるもので、ある種、概念的なものさえ感じられる。また、これら1-c環壕から出土した石硯は、1-a環壕で出土するものより幾分大きくなる傾向も見受けられるが、畿内、瀬戸内地域のような顕著な大型品は見られない。当該期、出雲地域の他の遺跡において出土している石硯も大型品は数少ない様相を示すことから、古代出雲地域においては、対人を意図した石硯の大型化現象は起らなかった可能性も考えられる。その他、これら石硯の元にもなろうサスカイトの板状原材(475)の出上が見られる。この詳細は、別項(1-c環壕 出土土器 石器)を参照してもらいたいが、香川県金山産と同定されているサスカイトが板材そのままで出雲地域に搬入された例は今までなく、金山産サスカイトの流通を考える上で貴重な資料と成り得るものである。その他、礫石として使用されたと思われる角の取れた石がこれら遺物と混在して出土している。なお、この礫石は、壕内から溝渠なく出土しており、極端に集中して出土する箇所は見られない。

#### 4) 第2・3環壕

遺物の出土量は、第2環壕→第3環壕と減少する傾向が窺われる。出土地は、他の環壕と同様に堆積土中からがほとんどを占め、壕底からの出土は少ない。遺物の構成は、Ⅲ-1~Ⅳ-2様式の弥生土器の壺・甕・鉢・高杯・脚坏無頸甕、土製品の土玉、石器類の環状石斧・石硯・石包丁・蛤刃石斧・柱状片刃石斧・砥石・匙・敲石、旧石器の碧玉剥片・ナイフ形石器等、礫石等多種多様な

遺物が見られる。土器類に関しては、壺・甕がその多くを占め、このうち、瀬戸内地域等の影響を受けた可能性が指摘される同心状の渦巻きにも似た突帯が施される壺(490)の出土も見られる。この壺は、第2・3環壕それぞれから出土した破片が接合をみたものもある。また、口縁端部に円孔が2孔・対であけられた脚环無頸壺(573)等、稀少な土器の出土も認められる。土製品においては、祭祀遺物とされる土玉(547・617)が、武器形石器としては、環状石斧(548)・石鎌の出土が1-c環壕同様に見られる。その他、1-c環壕と第2環壕の間の盛上付近から袋状鉄斧(661)を採取している。この鉄斧の詳細な検討は成されてなく、今後の検証が必要なものである。

### 環壕の変遷と考察

#### 1) 1-a環壕

弥生前期末～中期初頭期は、田和山丘陵に明確な人為的遺構が作られた初現期とも言える時である。本丘陵斜面においては、壕が作られ、弥生人の積極的な田和山丘陵活用の始まりをみせる。

本遺跡初現の壕、1-a環壕は当該期に作られる。この1-a環壕は、山頂部外側斜面の谷地形を成す東部・南西部・北西部のみに作られ、本丘陵の四方の尾根は掘り残された形で存在する。これは、言わば尾根部分を開放していたと言えるもので、尾根伝いに容易に山頂部へと入れる状況が窺われる。このようなことから1-a環壕は、本来、環壕が担うべき「人」を強固に遮断・拒絶するものとは相違する目的で作られた感が強いものと考える。また、本丘陵の谷地形のうち、南東側のみこの壕は作られていない。この場所は壕を掘削するのが特別困難な地とはみられないことから、地形的制約のものではなく、他の何らかの要因により作られなかったものとも考えられる。出土した遺物においては、砾石・石鎌・磨製石剣が見られる。これら遺物は、通常、武器用石器と認識されることから、何らかの戦い行為があった可能性を示唆させるが、「人」を強固に遮断する意図が見られない遺構形態と合わせみると、「人」対「人」の戦いのみを想定するのではなく、戦いの儀式といった祭祀的な要素も考慮し想定しておく必要があろう。なお、この1-a環壕は弥生前期末～中期初頭に埋没するが、この壕が自然に埋まったものなのか、人為的に埋められたものなのか、判断し難いもので、この問題については、更なる検討を要するものである。その他、壕の成形状況から、壕外側肩部は上墨状に盛って構築されていることが分かっている。これは、壕が「掘つて作った」と言うより「盛つて作った」と表現した方が適切であろう状況で、弥生前期末～中期初頭期にこのような構築法を用いて壕を作ったものは他にあまり類例を見ないものである。この「盛つて作った」構築状況は、後述する1-b環壕と1-c・第2・3環壕の一部においても認められる。

#### 2) 1-b環壕

この次に現れる1-b環壕は、1-a環壕の位置からやや山頂寄りに移したところに作られている。出土遺物が1-a環壕と同様、I-4～II-1様式の土器が出土する様相を見せることや、断面形態が1-a環壕と類似する箇所が認められることから、1-a環壕に準拠し、これを全面的に作り直したものと考え得るが、その理由・必要性については判然としないものである。仮に、1-a環壕が崩壊したための作為であるならば、その部分だけを直せばよく、事実、一部において1-a環壕の掘り直された形跡が認められていることからもこの行為の妥当性は見つからない。このよう

に一連の塙を改作するといった行為は、構造上による問題ではなく、何か概念的な要素に起因した可能性が高いと判断する。なお、1-a環塙から1-b環塙へと移行する時間的な問題は、前述のとおり、1-a環塙・1-b環塙ともに同時期の遺物を輩出することから、両者の移行にはさほど時間を置かれていたものと推測できる。その他、この1-b環塙の問題の一つとして塙の平面形態が挙げられる。1-a環塙と同様に尾根部分を掘り残す、谷部のみ作られた塙であったのか、尾根部分も掘削した丘陵を一周するものであったのかの問題である。調査の結果では、尾根部付近で後述する1-c環塙に擦り寄る形での痕跡を検出しているが、その先、尾根部分では1-c環塙の痕跡しか確認されていない。この結果からは、1-b環塙が仮に尾根部分を掘削していたとしても後に成形された1-c環塙によってその痕跡自体掘り取られている可能性が考えられることから、明確にすることは不可能なものである。しかし、1-b環塙は1-a環塙が存在する場所においてのみ確認出来た事実や、1-a環塙を準拠し作り直された塙であるとの解釈より、1-a環塙と同様、谷部のみ作られた塙であったと現段階では考えておきたい。なお、1-b環塙は、出土する土器からII-1様式期、弥生中期初頭頃に埋没したものと考えられる。

### 3) 1-c環塙

次に現れる塙、1-c環塙は1-b環塙の位置から山頂寄りに場所を移し、それまで作られたことのなかった尾根部も掘削される。丘陵を一周する途切れのない文字どおりの「環塙」は、この塙で初現する。断面形状は、逆台形状を呈し、以前の塙形状を踏襲しない。また、これまでの塙成形の推移状況から、1-a環塙→1-b環塙→1-c環塙と山頂側に移動し、塙底はこの順にレベルを上げる形で作られた過程がみてとれる。1-c環塙の掘削成形時期は、塙底付近から出土する土器の中で古いと思われるものがIII-1様式であることから、一応、弥生中期中葉頃に作られたものと考える。この環塙は、1-b環塙に変わるものとして作られたと推察できるが、1-b環塙存在期とは時間の幅が生じる可能性も考えられる。1-b環塙は、出土した土器の中で、最も新しいものがII-1様式となることから、埋没時期は弥生中期初頭頃と考えている。これに対し、1-c環塙の塙底付近出土土器の中で古いものは、前述のとおりIII-1様式となっている。仮に1-b環塙が機能していた時と連続して1-c環塙を作り変えたとするならば、1-b環塙の最終期であるII-1様式期の土器が1-c環塙の初の存在期を示す塙底付近から出土するはずであるが、実際には、この期の上器は見当たらない。このような状況から1-c環塙は、1-b環塙の機能が停止したII-1様式期の後、この塙がある程度埋没したIII-1様式期頃に1-b環塙に変わった塙として作られたといった過程を推測することができる。その他、環塙成形状況から、環塙掘削時に1-b環塙埋没上及び外側肩部を削平し、作業ステージ用の平坦面を設け塙底付近を掘削した状況を確認している。このような掘削法は、当時の土木方法が分かるものとして、大変興味深いものである。

### 4) 第2・3環塙

第2環塙は、1-c環塙の外側、水平距離にして8~10m間隔を空けた場所に1-c環塙の平面形態に従う形で作られる。この環塙も1-c環塙同様、山頂部を一周するものである。断面形は、幅広な逆台形状を呈するところや、鋭いV字状を呈するところなどその場所によってまちまちである。また、第3環塙は、第2環塙の外側、水平距離にして約8m間隔を空けた場所に第2環塙の平面形態に従う形で作られる。この環塙は、同時期に作られた1-c・第2環塙が山頂部を一周する

のに対し、南東部の谷部分のみ作られないものである。断面形は、ほぼ例外なくV字状を呈する。この第3環壕は、1-c・第2環壕とは相違する特徴をみて箇所が存在している。一つは、1-c・第2環壕が山頂部を一周するのに対し、第3環壕は南東側の一部は掘り止められた区間が存在することである。この環壕が作られなかった区間は、地滑り地であることが分かっているが、それを理由に壕の掘削が成されなかつたと考え難く、概念的な要因によりこの区間を開放したものと思われる。もう一つの相違点は、1-c・第2環壕及びそれまでの壕が山頂部を頂部とした田和山丘陵の斜面のみに作られたものに対し、第3環壕の南側の一部がこれと対向する南丘陵の斜面に及んで作られているという点である。これは、通常考えられる環壕の目的である「防御」という観点からすると、甚だ無用な行為・掘削であり、この部分の環壕の必要性は感じられ作である。こういった状況から、南側の第3環壕の掘削は、防御といった視点ではなく、その場所に絶対的に必要だった概念的な要因によるものと考えざるを得ないものである。

第2・3環壕は、壕底付近から出土する上器がⅢ-1様式で最も古く、Ⅳ-2様式まで見られることから、1-c環壕同様、Ⅲ-1様式期・弥生中期初頭頃に作られ、Ⅳ-2様式期・弥生中期後葉頃に埋没したものと思われる。正確には、1-c環壕のみ存在する時があった可能性も考えられるが、出土遺物等からするとこれらは、ほぼ連続して作られ、機能していた大半の時期を共有していたものと推察される。なお、出土遺物数は、1-c環壕が圧倒的に多く、この1-c・第2・3環壕が機能していたうち、Ⅲ-2～Ⅳ-1様式期・弥生中期中葉～中期後葉が環壕部においても最盛期を誇ることが認められる。環壕内においては、1-c・第2・3環壕共に、上器・石器と混在する状況で出土する礫石が見られる。この礫石は、1-a・1-b環壕に見られる本丘陵から採取された角ばった石とは異なり、角の取れた石が多数を占めるものである。これは、礫石の採取が本丘陵採取であったのから、丘陵下にある乃白川からの採取に変わった状況を示している。また、この礫石は他の遺物同様、1-c環壕→第2環壕→第3環壕とその出土数が減少していく傾向が認められることから、山頂部から投げられたまたは、落とされたものと推測できる。

### まとめ

弥生前期末～中期初頭期に属する本遺跡初現の壕、1-a環壕と1-b環壕は、前述のとおり、山頂部を頂点とする丘陵斜面の谷地形部のみ作られており、その壕がもつ性格は同様なものであつたと推測できる。両者は、尾根部を解放する形をとることから、人的防衛を目的とした壕でないことは明らかであり、それは、祭祀等を要因とした概念的なものに基づき作られたものと推察する。

その後、弥生中期中葉～中期後葉期には、これに変わって1-c環壕・第2環壕・第3環壕が丘陵をほぼ一周して作られ、本遺跡最盛期にも値するその時には、3重環壕としての機能を有する。それは、これまで開放した尾根部も貫通させ、その外側に新たに2本の壕を加えた、防衛性の強いものへの大きな変貌期を示している。この期の壕はこのように人的防衛を強く意識し作られたことは明確であろうが、前述のとおり、第3環壕が南丘陵にも延び作られ、南東側を開放するといった防衛感の矛盾性から、基本的には弥生前期末～中期初頭期の1-a・1-b環壕と同様、概念的な要素に基づき作られたものでもあったと考える。なお、これら時期変遷における詳細な推論は、本遺跡の全体像にも関わる事から、後述する総括の項にて総じて述べたい。その他、環壕成形にお

ける土堤状の構築や、楽浪郡の石視に類似する石板状石製品の出土等、貴重な資料がこの環境部からは得られている反面、まだ多くの検討課題が出土土器または、遺構に残されている。今後これらの検討・検証をしていく必要性が感じられるものである。

## 註

- ※本道路の環境は、雨水等で一時に溜まった水も短時間で土壤に浸透する状況であったことから、一般的に使用される「滲」といった文字を使わざ「塗」の文字を使用している。
- (1) 本書、第5章 自然化学分析と検討「年代測定結果報告書」加速器分析研究所のTW-3を参照。
- (2) 本書、第5章 自然化学分析と検討「環境内出土 石板状石製品について」岡崎雄一郎を参照。
- (3) 白井克也「朝鮮半島の文化と古代出雲」『田和山遺跡国史跡指定3周年記念講演記録集』2004.8.8 田和山遺跡活用補助事業 田和山サポートクラブ
- (4) 西谷 正「古代出雲の国際化」「北東アジアシリーズ2001 北東アジアのなかの古代出雲 -古代朝鮮三国を中心に-」2002.3 環日本海松江国際交流会議
- (5) 西谷 正「秦漢文化と古代出雲」「北東アジアシリーズ2002 秦漢文化と古代出雲」2002.11.20 環日本海松江国際交流会議
- (6) 曹喜勝「網と視を始めとした秦漢遺物を通じて觀た秦漢文化の性格と出雲地方への伝播」「北東アジアシリーズ2002 秦漢文化と古代出雲」2002.11.20 環日本海松江国際交流会議
- (7) 国立歴史民俗博物館・東京国立博物館にて東京国立博物館所蔵の朝鮮秦漢遺跡出土品（小倉コレクション）、東京大学所蔵の玉野墓出土石板、樂浪十城出土石板を実見した結果。
- (8) 本書、第5章 自然化学分析と検討「年代測定結果報告書」加速器分析研究所のTW-2を参照。
- (9) 「布田遺跡」「一般国道9号線松江道路建設予定地内 墓藏文化財発掘調査報告書Ⅸ」建設省松江国造工事事務所 烏根県教育委員会 1991.3
- (10) 西尾秀道「鳥取県西伯郡中山町出土の器台形土器」「田中義昭先生追悼記念文集 -地域に根ざして-」田中義昭先生追悼記念事業会 1999.3
- (11) 「茶瀬山道遺跡」「名和町埋蔵文化財発掘調査報告書 24」名和町教育委員会 1999
- (12) 「青谷上寺地遺跡 2・3・4」財団法人鳥取県教育文化財团 2000~2002
- (13) 森岡秀人「会下山弥生遺跡緊急調査報告書」「広島市文化財調査報告 第8集」1973
- (14) 「和川原上地点遺跡・小和田横穴墓」「庄原市農業支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」広島県庄原市教育委員会 2004
- (15) 中村唯史のご教示による。
- (16) 種定淳介「銅劍形石劍試論（上）（下）」「考古学研究 第36巻 第4号」1990.3 考古学研究会
- (17) 吉田広氏のご教示による。
- (18) 竹広文明氏のご教示による。
- (19) 竹広明「山陰日本海沿岸地域における弥生時代のサスカイト石器原材-鳥取県青谷上寺地遺跡出土石器類をめぐって-」「考古論集 -河瀬正利先生追悼記念論文集-」2004.3 河瀬正利先生追悼記念事業会
- (20) 「第3節 石器」「青谷上寺地遺跡4」財団法人鳥取県教育文化財团 2002
- (21) 本書、第5章 自然化学分析と検討「田和山遺跡 墓塚中の石塊について」山内清喜を参照。
- (22) 片野裕祐氏に実測・鑑定して頂いた。
- (23) 「古志本郷遺跡VI -K区の調査-」「美伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X-VI」国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所・鳥根県教育委員会 2003.3
- (24) 「馬場遺跡発掘調査報告書」「中國横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14」日本道路公团 中国支社・鳥根県教育委員会 2001.12
- (25) 平成12年4月8日の田和山現地指導会での中村唯史氏の地質的観察による。
- (26) 寺沢 黒・森岡秀人「弥生土器の様式と編年 -近畿編II-」1990 木耳社

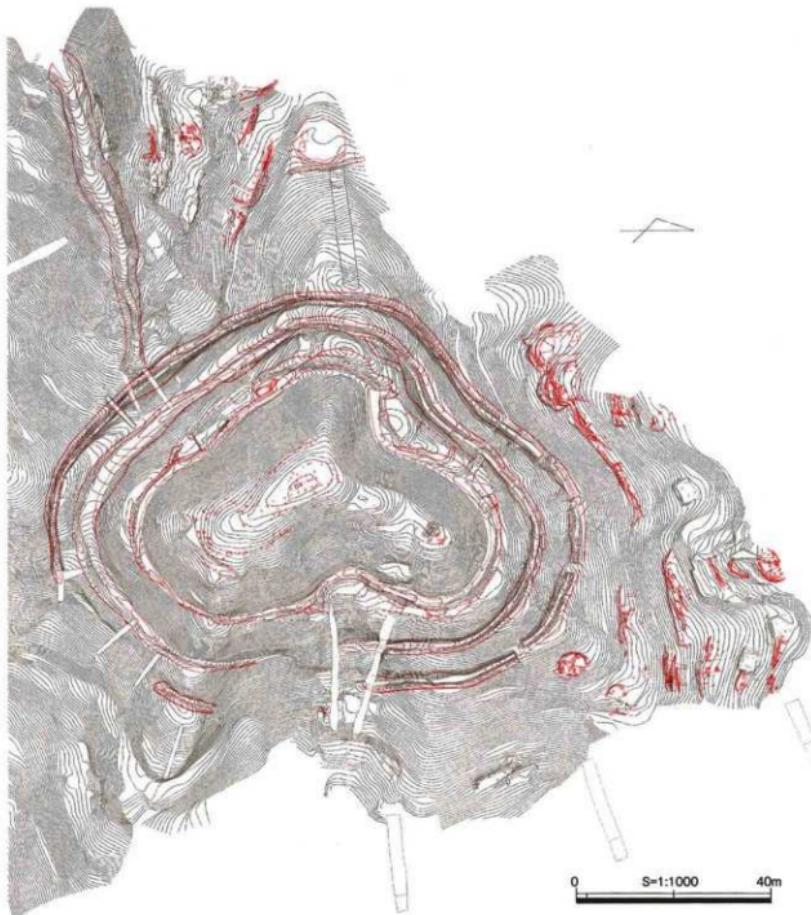
(27) 京都大学原子炉実験所 薩科哲男に墓地同定して頂いた。

## 参考文献

- ・白井克也「朝鮮半島の文化と古代出雲」「田和山遺跡国史跡指定3周年記念講演記録集」2004.8.8 田和山遺跡活用補助事業 田和山サポートクラブ
- ・竹広文明『サヌカイトと先史社会』2003.2 溪水社
- ・種寛淳介「銅剣形石劍試論（上）（下）」「考古学研究 第36卷 第4号」1990.3 考古学研究会
- ・寺前直人「弥生時代の武器形石器」「考古学研究 第45卷 第2号」1998.9 考古学研究会
- ・平井 勝「弥生時代の石器」「考古学ライブラリー64」ニュー・サイエンス社
- ・松木武彦「田和山遺跡鑑定書」2001.1.23
- ・松本岩雄「出雲・隱岐地域」「弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－」木耳社
- ・吉田恵二「長方形板石硯考」「論苑 考古学」1993 天山舎
- ・「北東アジアシリーズ2001 北東アジアのなかの古代出雲－古代朝鮮三国を中心－」2002.3 環日本海松江国際交流会議
- ・「北東アジアシリーズ2002 齋浪文化と古代出雲」2002.11.20 環日本海松江国際交流会議寺前直人「弥生時代の武器形石器」「考古学研究 第45卷 第2号」1998.9 考古学研究会
- ・「弥生時代の磨製石器」「島根県古代文化センター調査研究報告書13」2003.3 島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター

### 3. 環壕外側遺構（住居部）（第98図）

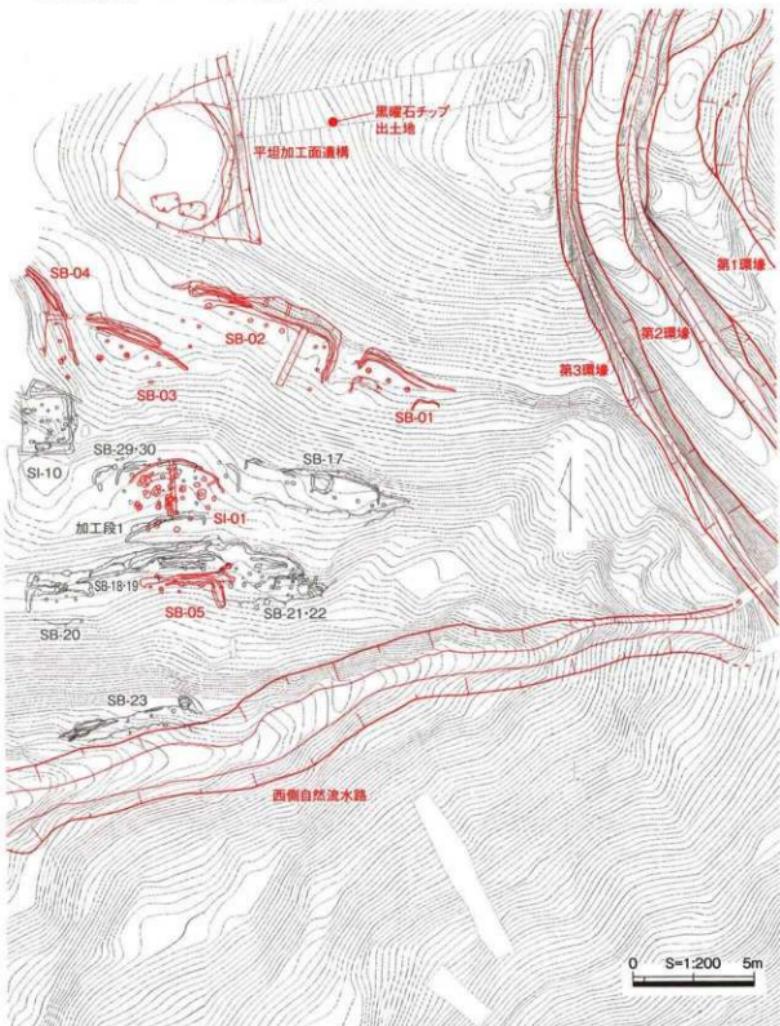
環壕外側遺構は、山頂部を囲繞する3本の環壕（1-c環壕・第2環壕・第3環壕）の外側の緩斜面にて検出した住居関連遺構を主とするものである。このように環壕内側ではなく環壕外側に住居遺構が作られているのは本遺跡の特徴の一つにあげられるものである。検出した弥生時代の遺構は、竪穴住居跡9棟・掘立柱建物跡（その可能性があるものを含む）16棟・平坦加工面遺構・小ピット群2所であり、遺物を包含する自然流水路も確認している。<sup>(1)</sup>また、検出したこれら遺構は、弥生時代中期中葉～中期後葉に属するものであり、弥生時代前期末～中期初頭の遺構は確認されて



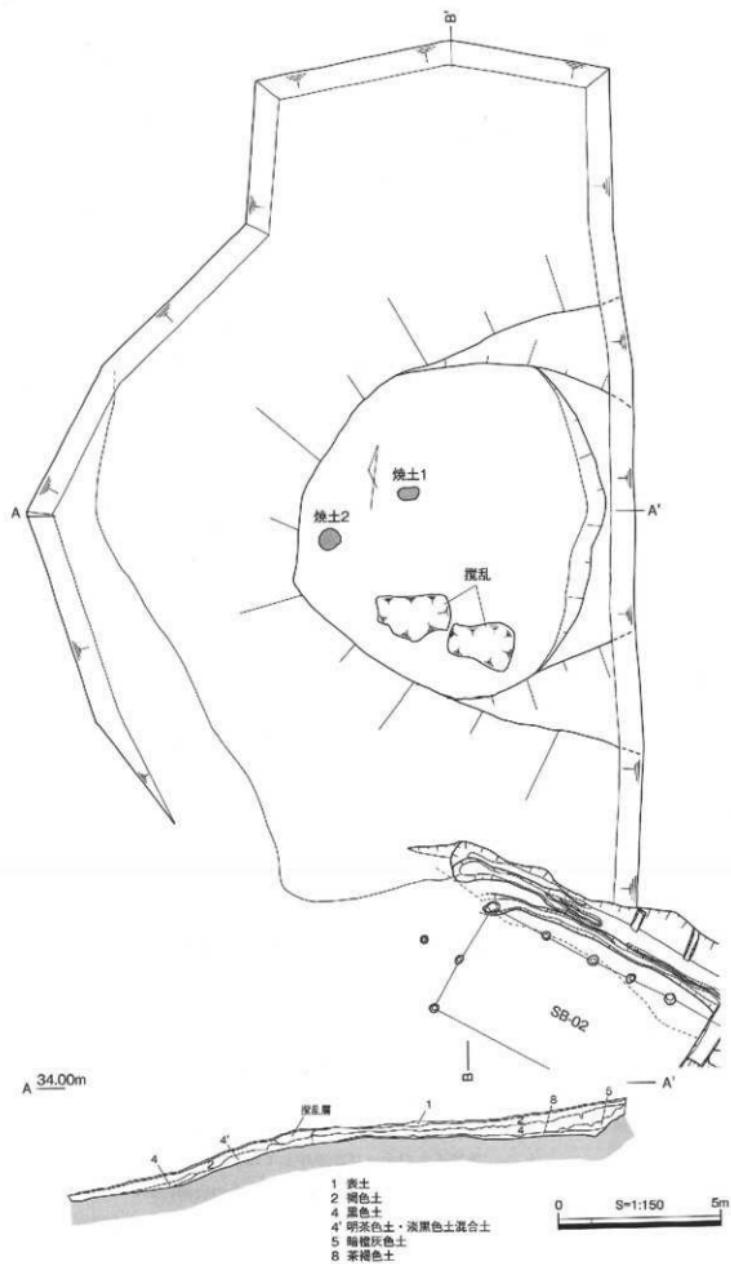
第98図 環壕外側遺構 全体図（弥生時代）

いない。その他に、縄文期と思われる落とし穴土坑を1穴検出している。遺構の存在する位置は、環境外の南西～北側の緩斜面であるが、この間の西側緩斜面は遺構を検出していないことから（調査にて遺構有無を確認している）、遺構は南西側と北側のエリアに別れて存在する様相を示している。

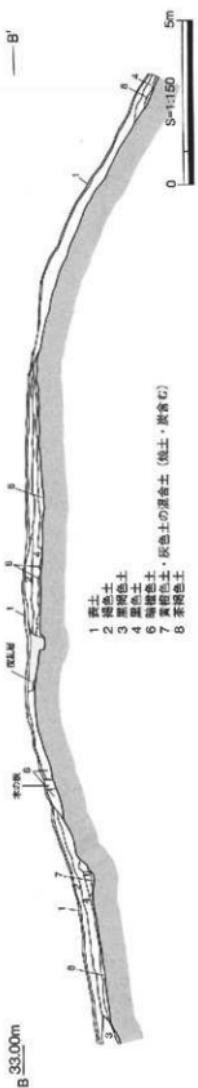
以下、南西側エリアから順に遺構の詳細を述べる。



第99図 南西側環境外側遺構 分布図（弥生時代）



第100図 平坦加工面邊構 平面図・土層断面図



第101図 平坦加工面遺構  
土層断面図

※環壕外側斜面にはこれらの中、古墳時代～平安時代の遺構が点在する。これらの詳細については「2. 古墳時代以降の遺構」の項にて述べるものとする。

#### (1) 南西側環壕外側遺構（第99図）

南西側環壕外側遺構は、山頂部を頂点とする丘陵の南西側の裾部にあたる第3環壕外側の緩斜面に作られた遺構を示す。この南西側エリアでは、平坦加工面遺構・堅穴住居跡1棟（SI-01）・掘立柱建物跡5棟（SB-01～05）の弥生時代遺構と弥生土器等の遺物を包含する西側自然流水路を検出している。また、これら遺構からは、台形土器・分銅形土製品・磨製石器・環状石斧といった稀少な遺物も出土している。

#### 平坦加工面遺構（第100～103図）

山頂部丘陵から派生する西側の尾根の尖端を平坦に加工して作られた遺構で、南西側エリアの遺構では最高所に位置している。平坦に加工された遺構面は、東西8.7m、南北10.2mを測る直角円形を呈し、遺構基盤は地山となっている。この遺構面には、人為的な加工や柱穴等の遺構は検出されなかったが、焼土跡が2ヶ所確認されている。

この平坦面遺構は、後述する特質な性格を有したとも考えられるSB-01・02のすぐ上に位置することから、これらに関連した「広場」のような施設であった可能性も考えられ、焼土跡はそれらに伴ったものとも推察できる。

遺物は、遺構埋土層第4層の平坦面上から弥生土器の壺片664・666・甕片667・鉢片668、同層の平坦面から下りる南側の斜面から弥生土器の底部669・672、同層の南西側斜面から弥生土器の壺665・底部670・671・673・環状石斧662、同層の北側斜面から黒曜石の原石663が出土している。その他、埋土層上層の第2層から須恵器の小形壺（壺の可能性あり）674、高台付の土師質土器の底部675が出土している。

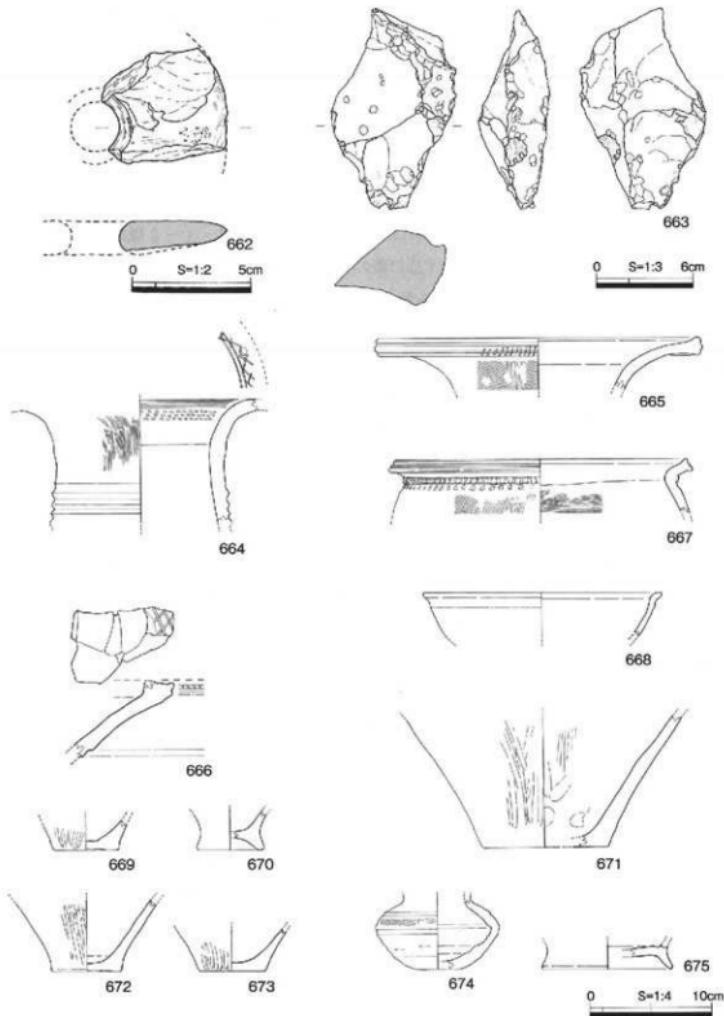
遺構存在時期は、遺構面上一層である第4層中の出土遺物より、IV-1様式期（弥生中期後葉）頃もしくは、それ以前であったと思われる。

その他、この平坦加工面遺構の東側の尾根上から、黒曜石・サヌカイトのチップが集中して出土する箇所を確認している。この両チップが出土する箇所及び、その周囲においては、これに関する遺構が確認されていないことから、建物外で黒曜石・サヌカイトを用いた石器製作がおこなわれていた様子が窺えるものであ

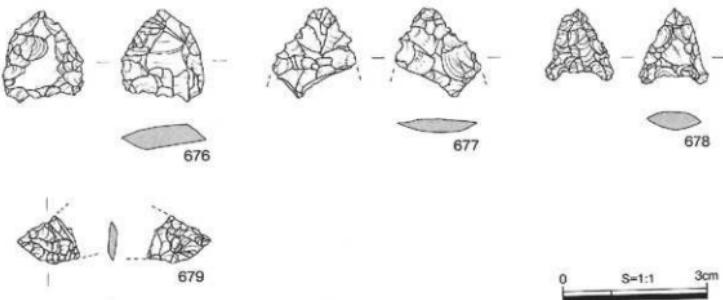
る。また、前述の黒曜石の原石663等はここから転落してきた可能性も考えられる。なお、この場所からは、黒曜石の石器未製品676～678、石匙の先端部分679も出土している。

#### 平坦加工面遺構 出土遺物 (第102・103図)

662は環状石斧の欠損品である。原形はドーナツ状の円形を呈するもので、本品は1/6程度残存しているものである。本遺跡では1-c環壕・第2環壕でも出土している。663は黒曜石の原石であ



第102図 平坦加工面遺構 出土土器・石器

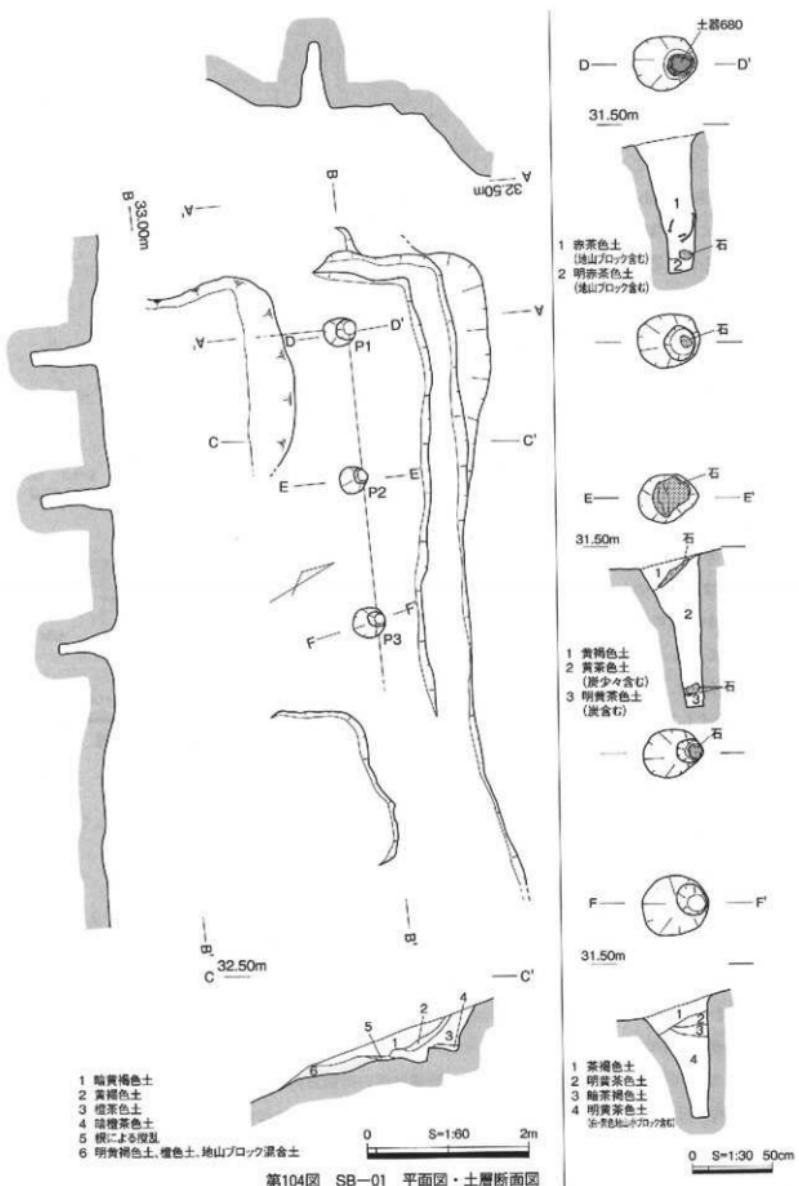


第103図 平坦加工面遺構の東側斜面 出土石器（石鎌）

る。外面には原石を示す風化面が全面にみえている。664は口縁内面に円形浮文・斜格子文・直線文・列点文、頸部に突帯文を施す広口壺の口縁部～頸部である。III-1～2様式のものと思われる。665は口縁端部に2条の凹線文を施す広口壺の口縁部で、IV-1様式のものと思われる。666は口縁端部上面に斜格子文、頸部に凹線文を施す壺の口縁部付近である。III-2～IV-1様式のものと思われる。667は口縁端部に凹線文、頸部に指頭圧痕文帯を施す甕の口縁部～肩部で、IV-1様式のものと思われる。668は口縁部が緩く外斜する鉢の口縁部である。669～673は甕・甕・鉢の底部で、670は上げ底となっているものである。674は焼成不良の須恵器の小形壺である。最大径付近に凹線・波状文が施され、窓の可能性もある。675は高台付の土師質土器の底部である。676～678は製作途中の剥離がみられる黒曜石製石鎌の未製品である。679は黒曜石製の石匙の先端部分と思われるものである。

#### SB-01 (第104～106図)

山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面を段状に切って遺構面とした掘立柱建物跡と考えられるものである。平坦加工面遺構の南東側に位置し、北西側には近接して後述するSB-02が検出されている。この遺構面からは、直線上に並ぶ3穴の柱穴 (P1～P3) を検出している。この3穴の柱穴は掘立柱建物跡の桁行部分と思われるが、南北側と東側の遺構面が流失していたことから、これに対向する南西側の桁行および、梁間は検出されていない。このため、建物規模の正確な数値は不明であるが、桁行2間(3.6m)×梁間1間以上の建物であったと考えられる。検出したそれぞれの柱穴法量は、P1は上端径34～40cm・下端径(底径)16～18cm・深さ85cm、P2は上端径32～36cm・下端径(底径)11～15cm・深さ92cm、P3は上端径38～40cm・下端径(底径)11～12cm・深さ74cmを測り、P1-P2・P2-P3間は共に1.8mを測っている。このうちP1の埋土中からは、弥生土器の甕680が完形で出土している。この甕は、P1底から19～37cm浮いたところから、底部を上にする状態で検出したもので、その下には9cm大的の石も検出している。これら状況から、この甕は、建物の柱を抜いた後、意図的に柱穴内に入れられたものと考えられる。その他、P2では平らな石が柱穴に蓋をするような状態で検出され、P1と同様に9cm大的の石が柱穴底上9cmのところから出土している。このP2の柱穴に蓋をしたような石は、P1と同様、意図的(人為的)に置かれたものと思われる。このような状況からSB-01は、他の建物とは性格を異にする



る、特質な建物跡であったものと考えられる。

その他、造構面の北側の端には、幅20~35cmのL字状の小テラスのような段を検出している。この段の詳細は不明ではあるが、通常、掘立柱建物跡にみられる雨落ち溝と思われる溝がこのSB-01では存在せず、その溝があるすべき場所に小テラスのような段が作られているようである。このような状況から、SB-01が建物跡だとすれば、他の掘立柱建物とは相違する建物構造を有するものであつたとも考えられる。

遺物は、前述のとおり柱穴P1内埋土層1層から弥生土器の壺の完形品680が出土している。また、造構面埋土層1層から凹石682、3層から弥生土器の壺片681が出土している。その他、SB-01の東側斜面から弥生土器の壺の頸部~肩部683・直口壺の口縁部684が出土している。

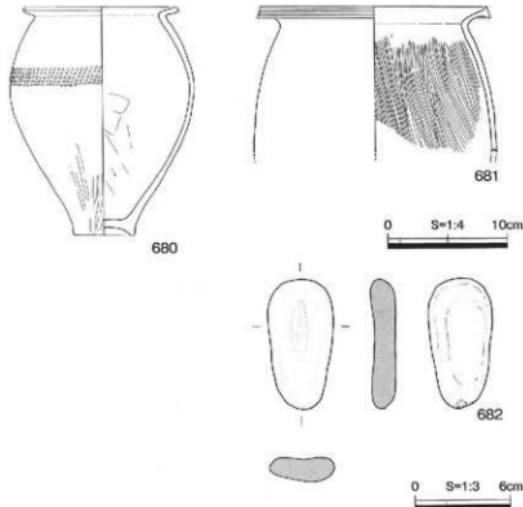
造構存在時期は、柱穴P1内出土の壺から、Ⅲ-1~2様式期（弥生中期中葉）頃もしくは、それ以前であったと思われる。

#### SB-01 出土遺物（第105・106図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

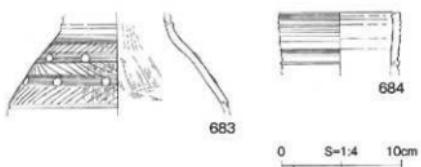
680は胴部に列点文を施し、底部が上げ底のⅢ-1~2様式と思われるの壺の完形品である。681は口縁端部に2条の凹線文を施すⅣ-1様式と思われるの壺である。682は小形の凹石で、中央が梢円状に窪むものである。683は頸部に突帯文、肩部に直線文・円形浮文・波状文を施すⅢ-2様式と思われるの壺の頸部~肩部で、684は口縁部に凹線文・突帯文を施す直口壺の口縁部である。

#### SB-02（第107~110図）

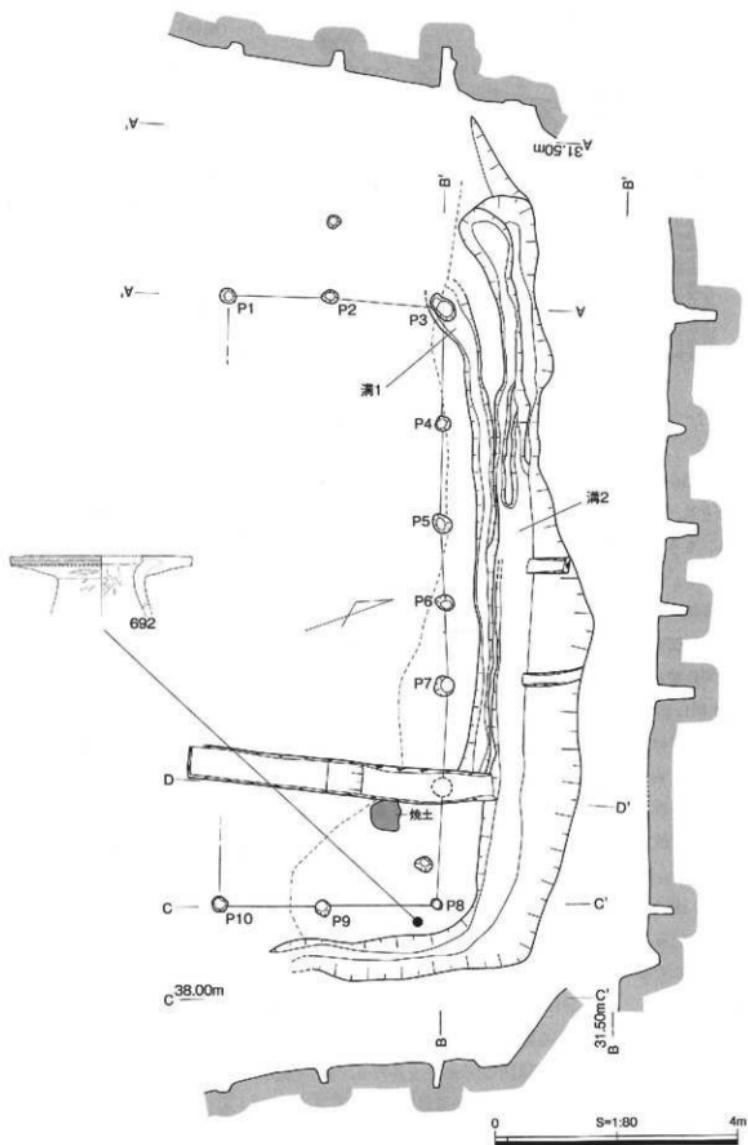
SB-01と同様、山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面を段状に切って造構面とした、掘立柱建物跡である。平坦加工面造構の南東側に位置し、東側には近接してSB-01が検出されている。この造構面（L=30.7~31m）からは、コの字状になる10穴（P1~P10）の柱穴列・溝・焼土跡を検出している。検出した柱穴の法量は、P1は上端径25cm・下端径（底径）15cm・深さ17cm、



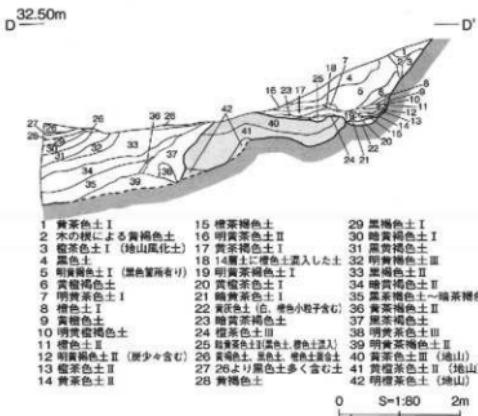
第105図 SB-01 出土土器・石器



第106図 SB-01の東側斜面 出土土器



第107図 SB-02 平面図・断面図

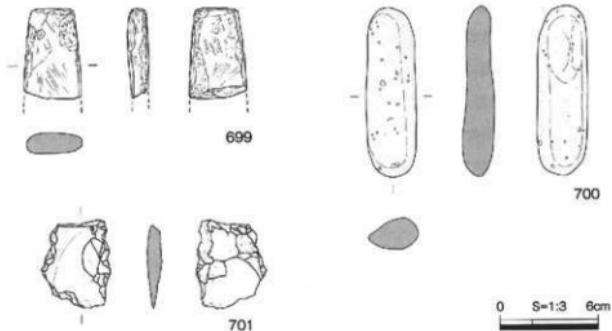
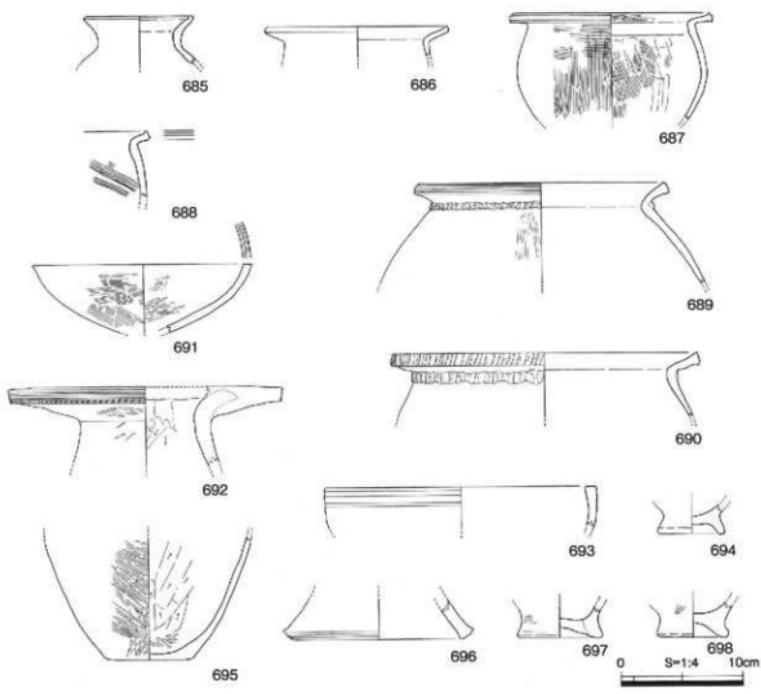


第108図 SB-02 土層断面図

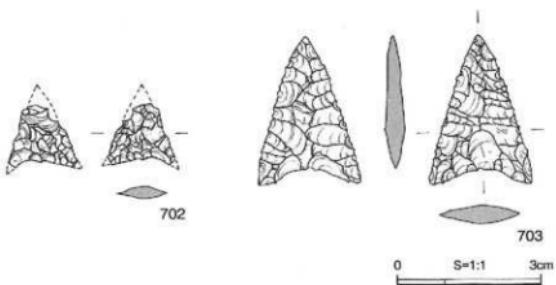
(底径) 16~18cm・深さ24cm、P10は上端径20cm・下端径(底径) 17~18cm・深さ14cmを測る。このうち、P1・P2・P9・P10は、これら付近の遺構面が流失し本来の高さを保っていないことから、もう少し深いものであったと考えられる。また、P3は柱穴が作り変えられた形跡が認められている。検出したこれら柱穴は建物の西側の梁間(P1~P3)と北側の桁行(P3~P8)と東側の梁間(P8~P10)にあたるものと思われるが、南側の桁行部分にあたる柱穴は、SB-01と同様、遺構面南西側が流失している状態であったことから検出することはできていない。それぞれの柱穴間距離はP1~P2間1.65m、P2~P3間1.9m、P3~P4間1.9m、P4~P5間1.65m、P5~P6間1.35m、P6~P7間1.35m、P7~P8間3.6m、P8~P9間1.9m、P9~P10間1.65mを測り、桁行では柱穴間が中央で短く、外側は長いものであることが分かる。なお、P7~P8間にはトレンチで掘られた範囲内に柱穴が1穴存在していたものと推測される。推定される建物の規模は、桁行6間(9.85m)×梁間2間(3.55m)、床面面積約35m<sup>2</sup>で、本遺跡内で確定できる掘立柱建物跡では最大のものである。また、この建物跡からは遺構面が焼けた状態の焼土跡を検出していることから、平地式の建物であった可能性が高いと思われる。その他、平面から幅20~60cm・深さ4~9cmの溝1、幅40~60cm・深さ4~18cmの溝2、土層断面から幅60cm・深さ12cmの溝を確認している。これら溝は建物に伴う雨落ち溝と思われ、SB-02の掘立柱建物跡に付随する雨落ち溝は溝2であることが分かっている。なお、SB-02の掘立柱建物跡には建替えの痕跡が認められないことから、溝2以外の溝は何に伴うものであったか詳細は不明である。

遺物は、埋土層5層中から弥生土器の甕片689・底部694、扁平片刃石斧699、埋土層16層中から弥生土器の甕片686、埋土層17層中から弥生土器の壺片685・甕片688、埋土層23層中から弥生土器の高坏片691・底部695、埋土層24層中から黒曜石製の石鐵702、埋土層26層中からサヌカイト製の楔形石器701が出土している。またこれらの他、埋土層から弥生土器の甕片690・687・高坏片696・鉢片693・底部698、用途不明石器700、黒曜石製の石鐵703が出土している。

P2は上端径22~28cm・下端径(底径) 13~18cm・深さ33cm、P3は上端径34cm・下端径(底径) 27cm・深さ57cm、P4は上端径22~25cm・下端径(底径) 14~17cm・深さ37cm、P5は上端径28~34cm・下端径(底径) 14~19cm・深さ45cm、P6は上端径24~31cm・下端径(底径) 14~19cm・深さ45cm、P7は上端径32~34cm・下端径(底径) 21~23cm・深さ68cm、P8は上端径13~18cm・下端径(底径) 13~16cm・深さ38cm、P9は上端径23~24cm・下端径



第109図 SB-02 出土土器・石器



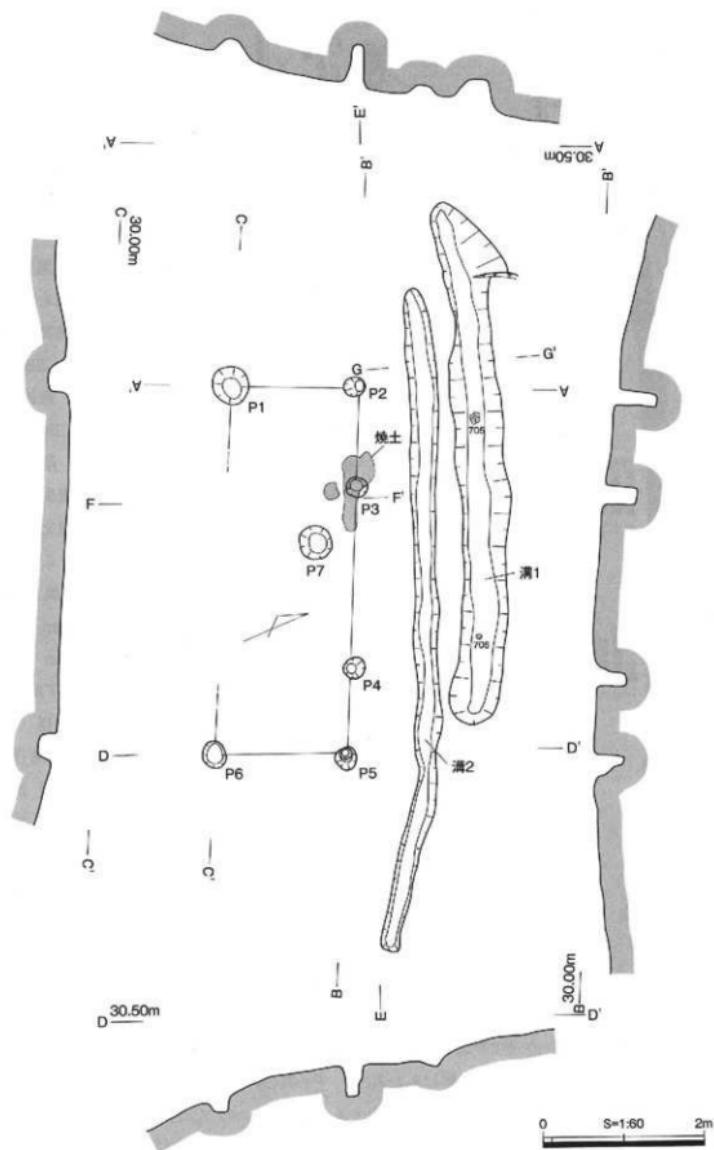
第110図 SB-02 出土石器（石鏃）

その他、特筆する遺物として、東側の溝2が折れ曲がるコーナー付近の遺構面上から、弥生土器IV-1~2様式と思われる台形土器692の平端部~脚部が出土している。台形土器は、本遺跡では1-c環境・西側自然流水路からも出土している。他の住居関連遺構の出土例は、広島県庄原市和田原E地点遺跡<sup>(3)</sup>の焼失破棄住居跡内に完形品が置かれた状態で出土した例が知られている。この和田原E地点遺跡出土の当該土器は、周辺から粘土塊が検出されており、土器製作の過程で使用されたものと考えられているが、本遺跡SB-02では土器製作に関わる痕跡はみられず、その性格を示す根拠が見当たらない。ただ、全国的にも出土数が少なく、島根県内においては布田遺跡<sup>(3)</sup>で3点の出土例があるのみであることから、稀少な土器であったことは相違ないものと思われる。このような出土状況から推測の域を出ないが、当該土器が出土する場所は特異性をもったある種、選ばれた場所であった可能性も考えられる。

以上の出土遺物からSB-02の遺構存在時期は、遺構面上から出土しているIV-1~2様式と思われる台形土器と遺構面上一層の埋土層23層出土のIII-2様式の高坏より、III-2~IV-2様式期（弥生中期中葉～中期後葉）頃であったと思われる。

#### SB-02 出土遺物（第109・110図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

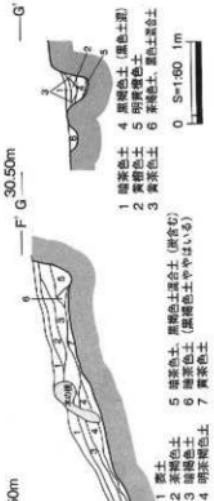
685は施文は施されない壺の口縁部～肩部で、686も施文が施されない壺の口縁部～頸部である。III-1~2様式のものと思われる。690は口縁端部に刻目、頸部に指頭圧痕文帯を施す壺の口縁部～肩部で、691は口縁端部に2条の凹線文を施し、内外面に煤が付着する高坏の坏部である。これらはIII-2様式のものと思われる。687は口縁端部に2条の凹線文を施す鉢の口縁部～胴部下付近で、688は口縁端部に1条の凹線文を施す壺の口縁部～胴部である。これらはIII-2~IV-1様式のものと思われる。689は口縁端部に3条の凹線文、頸部に指頭圧痕文帯を施す壺の口縁部～胴部で、IV-1様式のものと思われる。693は口縁端部は平坦で口縁外面に2条の凹線文を施す鉢の口縁部である。692は平坦面にナデとヘラミガキ、横に突出した平坦面の端部に3条の凹線文と刻目を施した台形土器の平坦面（台面）～脚部である。全国的にも稀少な遺物で、中国地方では29遺跡からの出土が確認されている。<sup>(4)</sup>以上、IV-1~2様式のものと思われる。696は脚端部外面に2条の凹線文を施す高坏の脚部で、IV-2様式のものと思われる。694・695・697・698は壺・壺・鉢の底部である。699は扁平片刃石斧の刃部欠損品で、外面は研磨によって加工された痕が残っているものである。700は用途不明石器である。角は丸く長細い楕円形を呈している。701はサヌカイト



第111図 SB-03 平面図・断面図



SB-03 土層断面図(1)



第113図 SB-03 土層断面図(2)

製の楔形石器である。702・703は黒曜石製の石鎌である。両者とも凹基式を呈し、702は先端部を欠損している。また、703は本遺跡出土の石鎌中で大型の部類に属するものである。

#### SB-03 (第111~114図)

山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面を加工して作られた掘立柱建物跡と思われる遺構である。SB-02の南西側に位置し、西側の斜面下には後述するSB-04が検出されている。遺構面は、西・東・南側が流失していることから、平坦面を留めてい

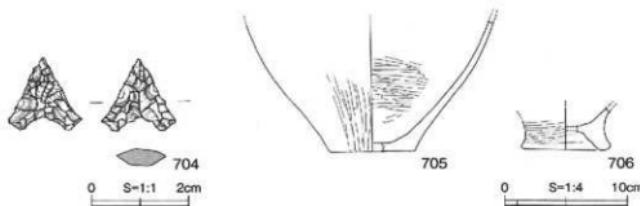
ないものである。この遺構面では、柱穴7穴(P1~P7)・溝2条(溝1・2)・焼土跡を検出している。検出した柱穴の法量は、P1は上端径46cm・下端径(底径)20~26cm・深さ31cm、P2は上端径24~26cm・下端径(底径)12cm・深さ53cm、P3は上端径24~26cm・下端径(底径)14cm・深さ47cm、P4は上端径26~28cm・下端径(底径)12cm・深さ44cm、P5は上端径26~30cm・下端径(底径)10cm・深さ38cm、P6は上端径28~34cm・下端径(底径)20~22cm・深さ25cm、P7は上端径38~40cm・下端径(底径)20~26cm・深さ43cmを測る。このうち、P1・P6はこれら付近の遺構面が流失し、本来の高さを保っていないことから、もう少し深いものであったと考えられる。柱穴間距離はP1-P2間1.6m、P2-P3間1.2m、P3-P4間2.25m、P4-P5間1.05m、P5-P6間1.6m、P6-P1間4.55mを測り、桁行部分と思われるP2~P5間は柱穴間が中央では長く、外側は短いものとなっている。検出したP1~P6の柱穴は、建物の北西側の梁間(P1-P2)と北東側の桁行(P2~P5)と南東側の梁間(P5-P6)にあたるものと思われるが、南西側の梁間にあたるP1~P6間にP3・P4と対になるべき柱穴が検出されていないことから、この状態で建物を想定することは難しい。ただ、このP1~P6付近は遺構面が流失しており、調査時の遺構面レベルがP3・P4の底面レベルと同等であったこと等から、本来存在していた柱穴が遺構面と共に流失した可能性も考えられる。これらのことから、SB-03

は桁行3間(4.5m)×棟間1間(1.6m)、床面面積約7.2m<sup>2</sup>を測る掘立柱建物跡であったと想定しておきたい。なお、P7はその位置から、建物跡に関する柱穴ではないものと考えられるが、性格については不明である。

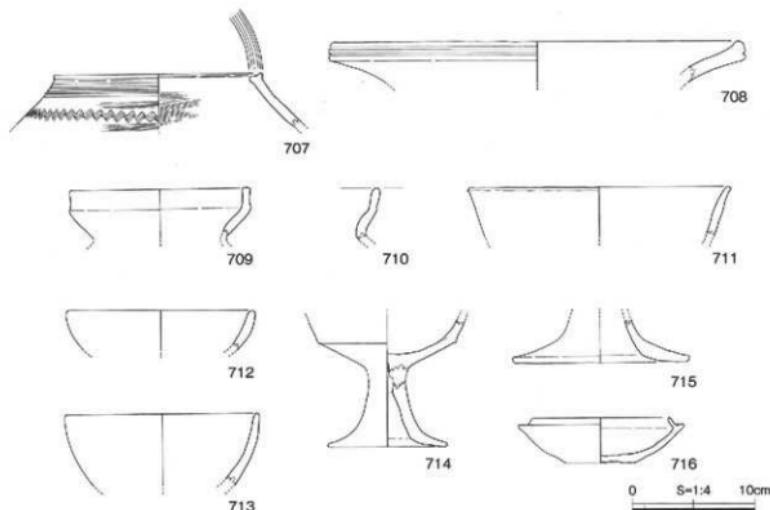
その他、掘立柱建物跡の北東側で検出している幅40~60cm・深さ28~61cm・残存長6.5mの溝1、幅20~34cm・深さ5~10cm・残存長8.2mの溝2は、建物の雨落ち溝と思われ、当掘立柱建物跡に付随したであろう雨落ち溝は溝2と考えられる。溝1については、何に付随した溝であるのか不明である。また、P3の直上からP3が埋まつた後に存在した焼上跡を検出しているが、その詳細な性格については不明である。

遺物は、埋土層3層中から黒曜石製の石鎚704、溝1埋土中から弥生土器の底部705・706が出土している。

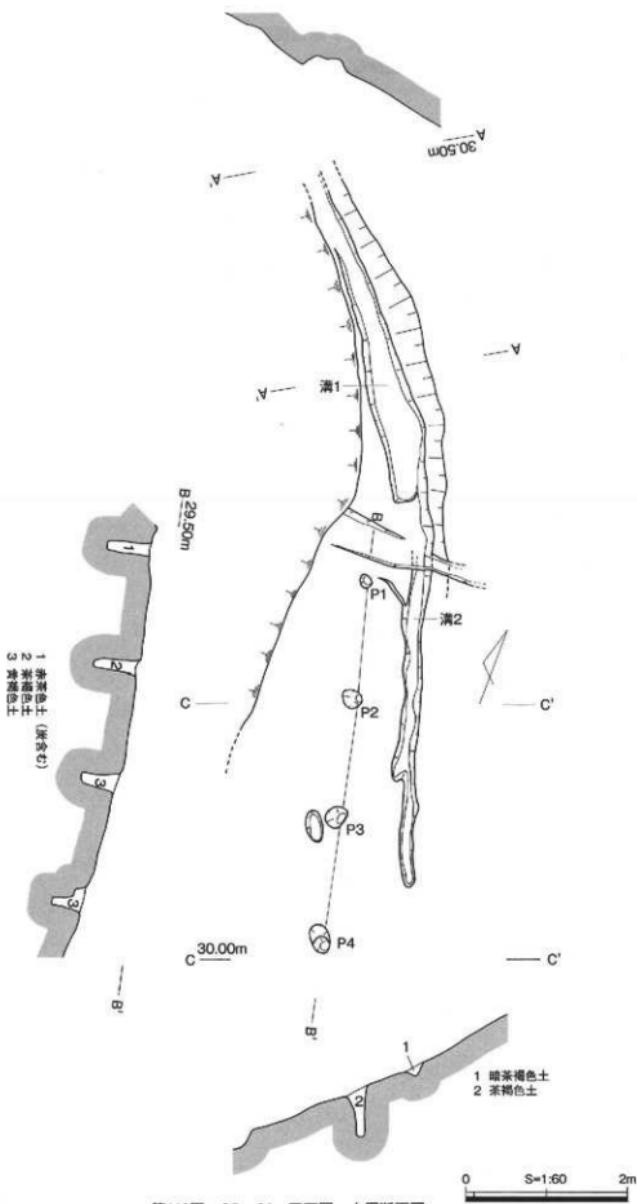
遺構存在時期は、時期を推測出来得る出土土器が弥生土器の底部のみであることから、詳細な時



第114図 SB-03 出出土器・石器(石鎚)



第115図 SB-01・02・03 周辺出土土器



第116図 SB-04 平面図・土層断面図

期を示すのは困難なものとなっている。ただ、この弥生土器底部の胎土が含む、砂粒の特徴が弥生前期土器と相違することから、SB-03は弥生中期頃の遺構であったと考えられる。

※本遺跡内出土の弥生土器は弥生前中期～中期後葉に限定されることから、この範疇で考察した。

**SB-03 出土遺物（第114図）** ※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

704は黒曜石製の石器である。形態は円基式で小型のものである。705・706は弥生土器の壺・甕・鉢の底部である。706は上げ底で脚のような台が付いている。

**SB-01・02・03周辺 出土遺物（第115図）**

SB-01～03周辺からは遺構外の遺物も多く出土している。ここでは、図化可能なこれら出土遺物をあげておく。※遺物の法量・出土地等の詳細は遺物観察表を参照。

707は口縁端部上面に凹線文、口縁外面に凹線文と波状文を施した無頸壺の口縁部～胴部付近で、708は口縁端部に2条の凹線文を施す広口壺の口縁部である。これらはIV-1様式のものと思われる。709・710は二重口縁の土師器の甕の口縁部～頸部付近である。711・714・715は土師器の高壺で、711は壺部、714は壺部が有段の壺部～胴底部、715は脚底部付近のものである。712・713は口縁部が湾曲する上師器の壺である。716は底部に回転ヘラ切りの痕がみられる須恵器の壺身で、出雲5期相当のものと思われる。

**SB-04（第116図）**

山頂部丘陵から派生する西側尾根の南西側斜面に作られた、溝を作った掘立柱建物跡と思われる遺構である。平坦加工面遺構とSB-03の南西側下の斜面に位置し、本遺跡調査区の西側端にあたる。ここからは、斜面上にて溝2条（溝1・溝2）と直線上に並ぶ4穴の柱穴（P1～P4）を検出している。溝1は幅25～57cm・深さ5～10cm・残存長約4m、溝2は幅15～27cm・深さ6～10cm・残存長3.9mを測るもので、建物に伴う雨落ち溝であったと推測される。柱穴間距離はP1～P2間1.45m、P2～P3間1.45m、P3～P4間1.6mを測る。柱穴が直線上に並び、雨落ち溝と思われる溝2が柱穴列に平行して存在することから、溝を作った掘立柱建物跡と推定される。なお、P1～P6はSB-04の東側の桁行部分と思われるが、遺構面（床面）のはとんどが流失している状況であった為、建物規模の詳細は不明であり、現状では桁行3間（4.5m）以上×梁間1間以上としか言えない。その他、溝1は溝2同様、建物に付随する雨落ち溝と考えられるが、西側の遺構面が滑落しているため、詳細は不明である。

遺物は、P1内から弥生土器の甕の口縁部、P2・P3から弥生土器細片が出土している。※これら土器片は小片・細片のため図化は不可能なものであった。

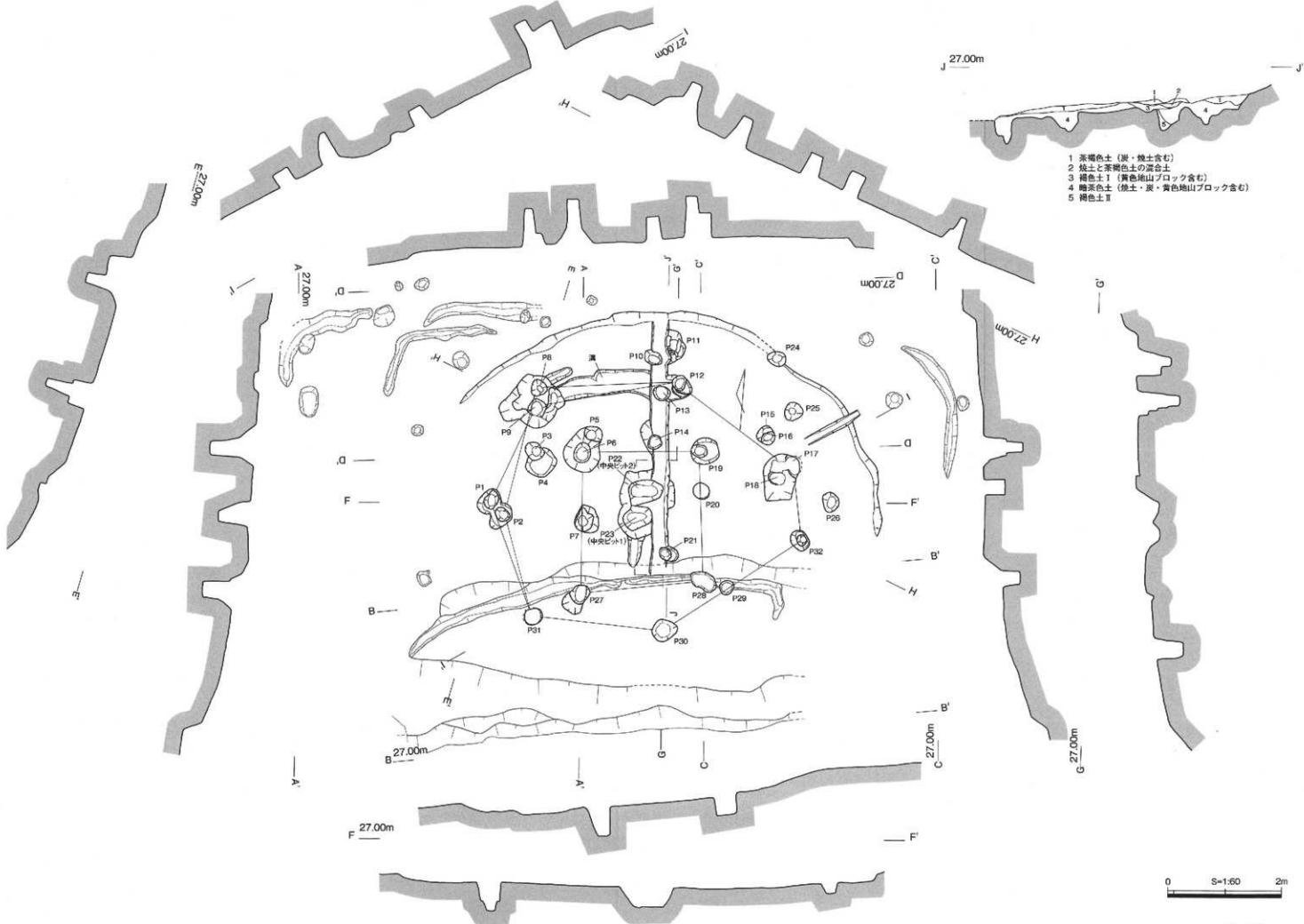
遺構存在時期は、P1内出土土器がIII-1～2様式と思われるものであることから、この時期（弥生中期中葉）もしくは、それ以前のものと考えたいが、時期指標となる土器が口縁部の小片の1片だけであることから、当該期の可能性があるということに留めておきたい。

**SI-01（第117～119図）**

山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面を加工して作られた竪穴住居跡である。SB-03の南側に位置し、南側の斜面下ではSB-05が検出されている。

この竪穴住居跡は、溝及び柱穴の位置的状況から、規模を大きく変えた建替えが推測できるものである。以下、建替えの占段階の竪穴住居跡をSI-01-1、新段階の竪穴住居跡をSI-01-2と呼





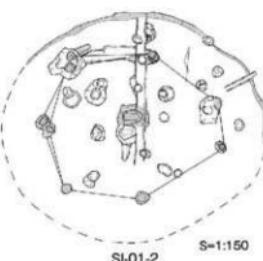
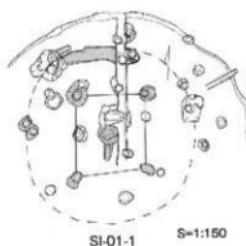
第117図 SI-01 平面図・土層断面図

称し、詳細を述べる。

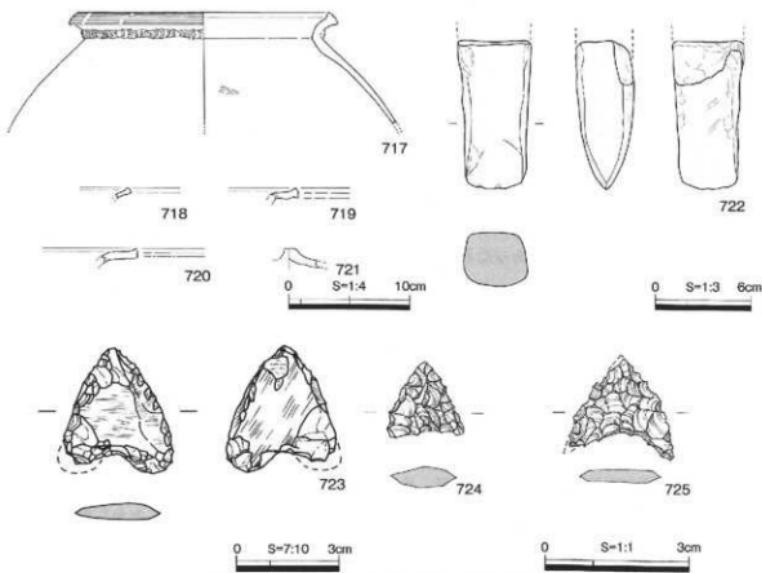
SI-01-1は、壁体溝を作り4穴の主柱穴(P1～P4)によって構成される竪穴住居跡である。遺構面の南側は、後に作られた(古墳時代)加工段1によって削り取られている。周壁はSI-01-2に作り替えられた際、消滅したものと思われ、一切残存していない。壁体溝と思われる溝は北西側の一部のみ残存しており、幅33～45cm、深さ5～12cmを測る。平面プランは、壁体溝と推測される溝が2.3m程しか検出できなかったことから確定できないが、当地の弥生竪穴住居跡の例からして、円形に近いものであったと考えられる。また、これによって想定される平面規模は、壁体溝を含め直径5.3m程度のものであったと推測される。P1～P4の中央には上端径55～60cm、下端径(底径)18～35cm、深さ35～40cmの楕円形の中央ピット1を検出している。この中央ピット1の南側では、幅18～30cm、深さ6～10cm、残存長50cmの溝も合わせて検出している。中央ピット1は、溝を付随することから、貯水穴といった性格が考えられるが、溝の底面レベルは、ほぼ平行な値を測るものであったことから、溝を介して水を集めるものであったのか、中央ピットに溜まつた水を溝によって排水するものであったのか、詳細は明らかではない。

SI-01-2は、7穴の主柱穴(P5～P11)によって構成される壁体溝を付隨しない竪穴住居跡である。遺構面の南側は、SI-01-1同様、後に作られた(古墳時代)加工段1によって削り取られている。平面プランは、周壁が北東側(全体の1/2弱)しか残存していないことから復元を試みたもので、東西が長い楕円形を呈するものであったと想定される。これによる平面規模は、東西8m、南北6.6mを測る。SI-01-2もその中央に中央ピット(中央ピット2)を有している。中央ピット2は、上端径70～100cm、下端径(底径)18～47cm、深さ41～48cmを測り、横広の楕円形を呈するものである。中央ピット1のような溝を付隨しないものであること等から、用途・性格については不明である。また、SI-01-2は西側の柱穴がP11→P12、P5→P13と一部作り変えられているものと推測される。その他、北側においては、角ばった石を立てて入れられたP11を確認している。形状・深さは他の柱穴と同様なものだが、位置的状況から掘立柱建物跡の柱穴にはならないものと判断される。この石が入るピットの用途・性格は不明と言わざるを得ないが、後述する同じ弥生竪穴住居跡のSI-11においても同様のピットが検出されている。

遺物は、中央ピット2内埋土中から弥生土器の壺片717・718、P15内埋土中から黒曜石製の石鎌724、遺構面上一層の第4層中から弥生土器の壺片719・石包丁もしくは、磨製石剣からの転用品と思われる貝岩製の石鎌723が出土している。その他、埋土中から弥生土器の壺片720・蓋721、柱状片刃石斧722、黒曜石製の石鎌725が出土している。なお、石包丁もしくは、磨製石剣からの転用品と思われる貝



第118図 SI-01 変遷図



第119図 SI-01 出土土器・石器（石鎌・石斧）

岩製の石鎌723は、その転用した意味・目的や、その大きさを考えると対獣・対人といった実用的なものよりも祭祀的な用途を意識したものとも考えられる。

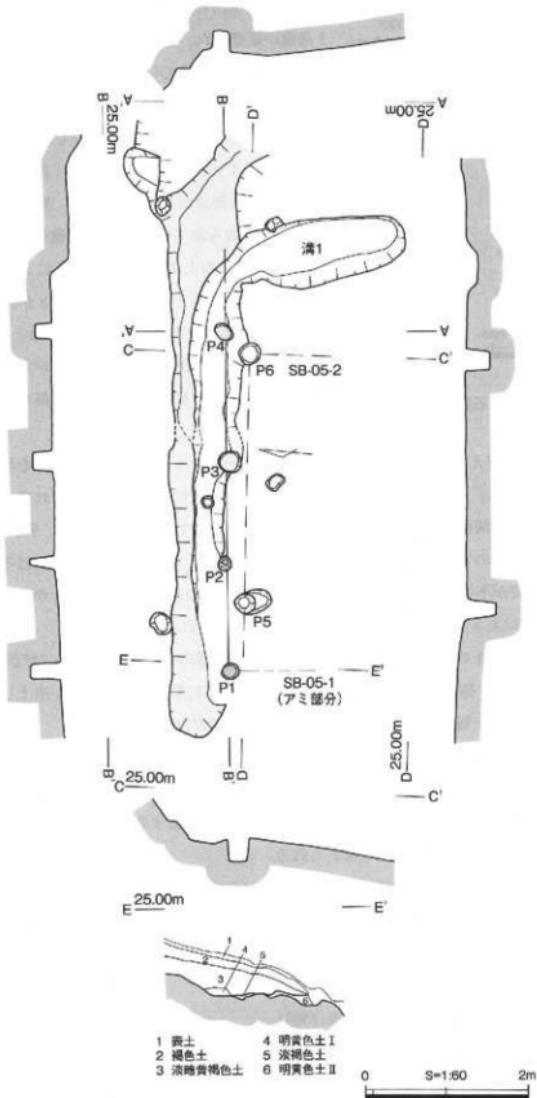
遺構存在時期は、SI-01-2が中央ピット2内埋土中や遺構面上一層の第4層中からの出土土器より、IV-1様式期（弥生中期後葉）頃もしくは、それ以前と推定される。また、SI-01-1は遺構に伴う土器の出土が認められないことから詳細は不明であるが、SI-01-2と近い時期と考えても差し支えないと思われる。

#### SI-01 出土遺物（第119図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

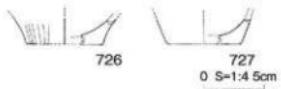
718はⅢ-2様式と思われる施文がみられない壺の口縁部で、720は口縁端部に1条の凹線文を施すⅢ-2～IV-1様式と思われる壺の口縁部である。717・719は口縁端部に凹線文を施す壺の口縁部～肩部・口縁部で、717の頸部には指頭圧痕文帯も合わせて施されている。これらはIV-1様式のものと思われる。721は壺等の蓋のつまみ部付近と思われるものである。722は研磨によって作られた両刃状の柱状片刃石斧である。723は頁岩製の大型の石鎌である。形態は凹基式で、石鎌製作時の剥離は側刃にのみ、おこなわれている。剥離がおこなわれていない面は表裏とも研磨痕がみられることから、石包丁もしくは、磨製石剣からの転用品と思われる。724・725は黒曜石製の石鎌である。724は凹基式か平基式の形態を呈するもので、725は基辺が大きい凹基式を呈するものである。

#### SB-05（第120～122図）

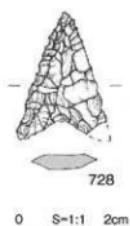
山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面を段状に切って造構面とした、掘立柱建物跡である。SI-01の南側に位置し、南側の斜面下には遺物を包含した西側自然流水路が検出されている。



第120図 SB-05 平面図・土層断面図



第121図 SB-05 出土土器



第122図 SB-05  
出土石器（石鎌）

ここからは、段状造構面と建物に伴う柱穴 6 穴 (P 1 ~ P 6) と溝を検出している。検出した掘立柱建物跡は、新旧 2 造構が確認され、当地で建替えがおこなわれたものと考えられる。最初に建てられた掘立柱建物跡 SB-05-1 は、加工段状の造構面から掘られた P 1 ~ P 4 の柱穴を北側の

桁行としたもので、雨落ち溝を伴わないものである (第120図のアミ部分)。柱穴間距離は P 1 - P 2 間 1.35m、P 2 - P 3 間 1.25m、P 3 - P 4 間 1.6m を測る。梁間部分にあたる柱穴は、南側の造構面 (床面) が後述の SB-05-2 に切られていることから検出することはできない。また、P 1 ~ P 4 の上端は SB-05-2 によって削られており、本来の柱穴深を復元すると P 1 が 55cm、P 2 が 54cm、P 3 が 48cm、P 4 が 43cm ほどの深さであったと推定できる。建物の規模は、梁間が不明なことや桁行部分が東に延びることが考えられることから、桁行 3 間 (4.2m) 以上 × 梁間 1 間以上の規模をもつものであつたと推測される。

SB-05-1 の建替えと思われる SB-05-2 は、SB-05-1 の造構面 (床面) を切る形で斜面下方側に作られている。これに伴う柱穴は P 5 - P 6 で、柱穴に平行し東側で折れ曲がる雨落ち溝も作られている。柱穴間距離は P 5 - P 6 間 3.1m を測り、検出できてはいないが、P 5 - P 6 間に柱穴の存在が疑われるものである。また、南側の造構面が流失していることから梁間は不明である。建物の規模は、梁間が不明なことや桁行部分が西に延びるものと推察されることから、桁行 2 間または 3 間 (3.1m) 以上 × 梁間 1 間以上のものであったと思われる。

遺物は、SB-05-1 の造構面 (床面) 付近から弥生土器の壺片・底部 726・727 が、SB-05-2 に付随する溝内から、弥生土器の壺片・甕片・底部、黒曜石製の石鎌未製品が出土している。その他、SB-05-2 の埋土層 3 層からは、黒曜石製の石鎌 728 が出土している。

※弥生土器の壺片・甕片は小片・細片のため図化は不可能なものであった。

造構存在時期は、底部を除く弥生土器が小片であったことから詳細な時期確定ができないものであるが、底部の胎土が含む砂粒の特徴が弥生前期の土器と相違することから、SB-05-1・SB-05-2 は弥生中期頃の造構であったと考えられる。

※本遺跡内出土の弥生土器は弥生前期末～中期後葉に限定されることから、この範疇で考察した。

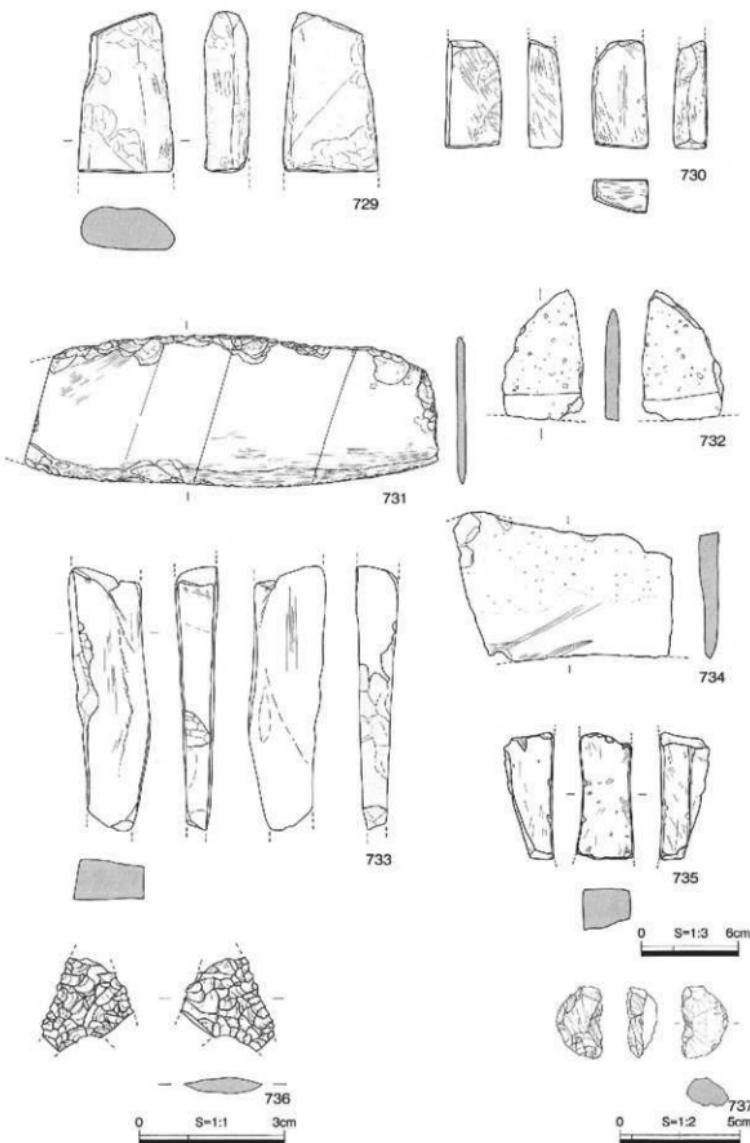
**SB-05 出土遺物 (第121・122図)** ※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

726・727 は弥生土器の壺・甕・鉢の底部である。728 は黒曜石製の石鎌である。形態は凹基式で片側の基部が欠損しているものである。

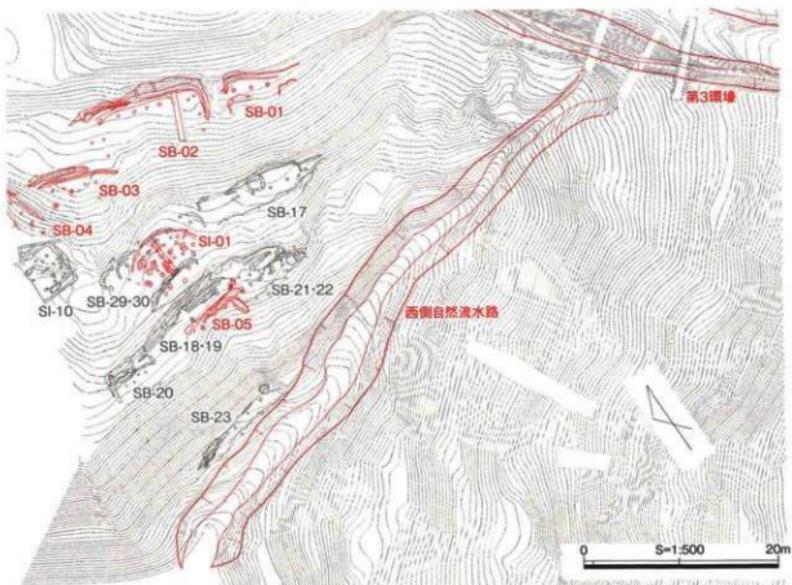
**南西側環壕外側造構周辺 出土遺物 (第123図)**

南西側環壕外側造構の周辺からは、造構外の遺物も多く出土している。ここでは、図化可能なこれら出土遺物をあげておく。※遺物の法量・出土地等の詳細は遺物観察表を参照。

729 は船刃石斧の刃部欠損品と思われるものである。730・733・735 は砥石で、多面に砥面がみられるものである。731・732・734 は大型石包丁で、刃部は研磨によって作り出されているものであ



第123図 南西側環壕外側遺構周辺 出土土器・石器



第124図 西側自然流水路 平面図

る。736は黒曜石製の石鎚である。形態は凹基式で先端部・両側基部は欠損しているものである。737は瑪瑙の勾玉未製品である。形状は勾玉完成品に近いものとなっており、最終段階の調整剥片と思われる。

#### 西側自然流水路（第124～129図）

山頂部丘陵から派生する西側尾根と山頂部丘陵と対向する南丘陵の間の谷部分から検出した、遺物を包含する自然流水路である。この北側の斜面には、弥生時代の平坦加工面構造、SI-01、SB-01～05や後述する古墳時代～平安時代のSI-10、SB-17～23・29・30、加工段1が存在している。自然流水路は、この東側に位置する第3環壕の外側付近を流水元としたもので、そこからは湧き水を確認している。なお、この付近の第3環壕は一部崩れた箇所が認められることから、第3環壕内に溜まった水もこの自然流水路に流れ出していたものと推測される。包含する遺物は、その大半が前述の北側斜面に存在する遺構や第3環壕からの転落物と思われ、縄文土器の鉢、弥生土器の壺・甕・鉢・高壺・底部、土師器の壺・高壺・低脚壺、須恵器の壺蓋・壺身・高壺・甕・壺、分銅形土製品、磨製石剣（石戈？）、石包丁、蛤刃石斧、打製石斧、砥石、楔形石器、石鎚等が出土している。

#### 西側自然流水路 出土遺物（第125～129図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

縄文土器：738は磨消縄文をもつ縄文土器である。縄文時代後期のものと思われる。

弥生土器：739・740は壺の口縁部～頸部・口縁部で、739は頸部に指頭圧痕文帯、740は垂れ下が

る口縁端部に斜格子文を施すものである。これらはⅢ-1～2様式のものと思われる。741は外斜して開く壺の口縁部である。口縁端部上面には斜格子文・円形浮文、口縁部下に円線文・指頭圧痕文帯が施されている。IV-1様式のものと思われる。742は口縁端部に刻印が施された壺の口縁部～頸部で、Ⅲ-2様式のものと思われる。745～748は頸部に指頭圧痕文帯を施す壺の口縁部～肩部である。746・747には口縁端部に刻印、748には口縁端部に2条の凹線文も合わせて施されている。以上、Ⅲ-2～IV-1様式のものと思われる。749は口縁端部上面に2条の凹線文を施す鉢の口縁部～胴部付近で、IV-1～2様式のものと思われる。750～753は高坏と思われるものである。このうち、750・751は口縁端部が肥厚し平坦面を成す坏部で、750は口縁端部外面に1条の円線文と円形浮文、751は坏部外面に凹線文を施している。750はⅢ-2～IV-1様式、752はIV-1様式のものと思われる。752・753は脚部付近のもので、753は3条の凹線文と直線文を施している。753はIV-1様式のものと思われる。754～757は壺・壺・鉢の底部で754・757は上げ底となっているものである。また、757の外面には煤も付着している。

土師器：758・759は壺の口縁部・口縁部～肩部で、760は高坏の有段の坏部である。761は低脚坏と思われるもので、赤色顔料の塗布がみられるものである。

須恵器：763・764は出雲5期相当の坏壺である。764の天井部にはヘラ記号がみられる。765・766は出雲4期相当の坏身である。765の底部には回転ヘラ切り痕がみられる。767～769は高坏で、767・769は脚部に台形の透かしが2方向にあけられている。767・768は出雲4期相当、769は出雲4～5期相当のものと思われる。770・771は壺と思われるものである。770の頸部付近には波状文、771の胴部には2条の凹線文と刺突文が施されている。770は出雲1～2期相当のものと思われる。772・773は壺で、773には頸部に波状文が施されている。

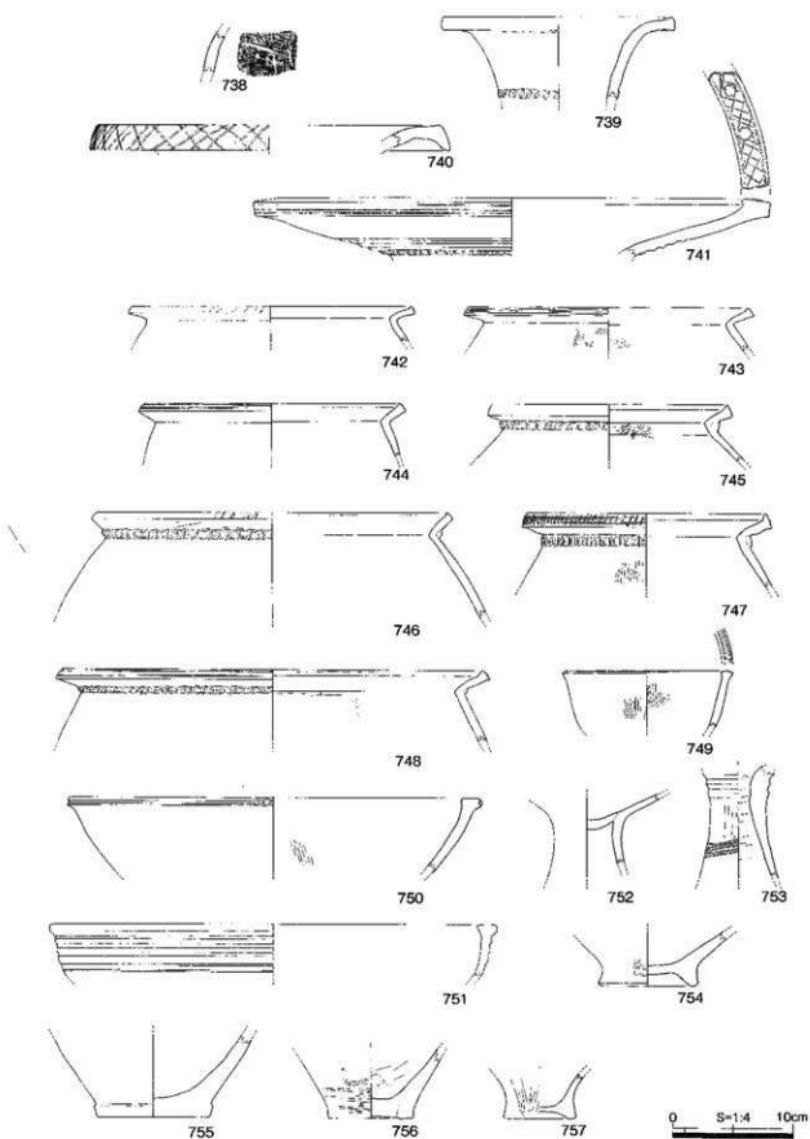
分銅形土製品：774は分銅形土製品の欠損品である。くりこみ部と縁部に沿って刺突文が施されている。当該上製品は祭祀用具と考えられているもので、山陰地方での出土例は比較的多いようである。本遺跡群ではB遺跡（A遺跡・B遺跡編を参考）において1点出土している。

磨製石剣（石戈？）：775は磨製石剣の先端部である。断面は菱形を呈し、中央に一本の直線的な錐が作り出されている。当初は右戈の先端部分とも考えられたが、左右側刃がそれほど顯著な非対称なカーブをしているようにみえないことから、本報告では磨製石剣としておく。

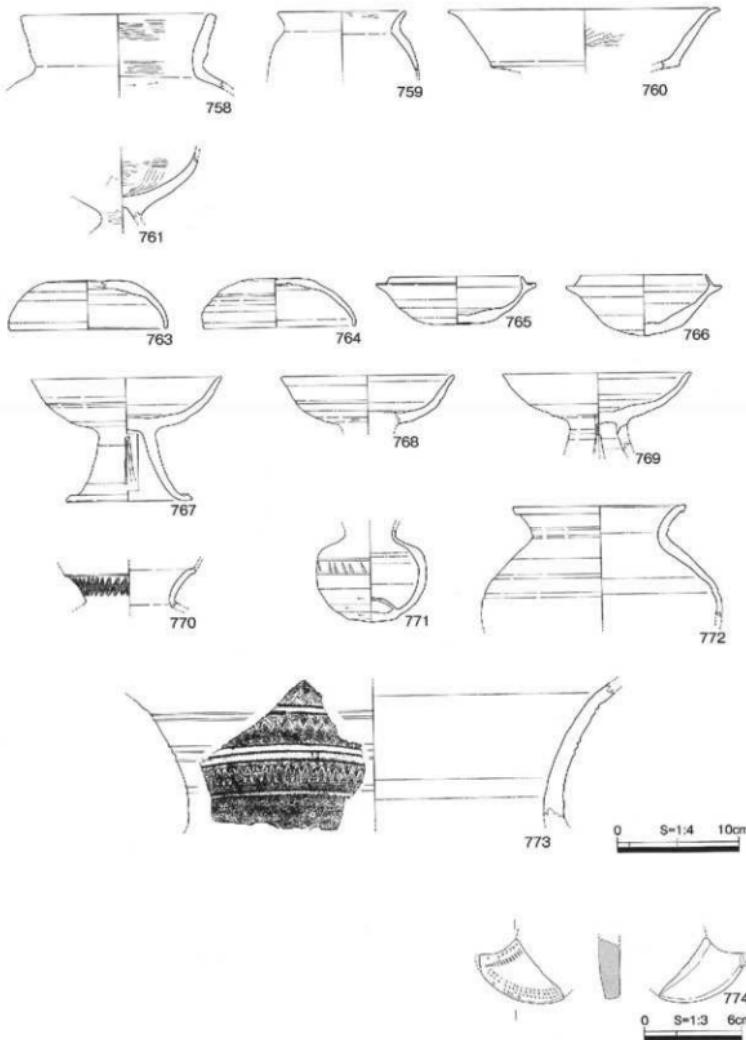
その他の石器：776～779は石包丁である。776・777・779には穿孔がみられ、このうち776は孔に紐を通して使用された痕がみられるものである。780・781は蛤刃石斧である。両者共に刃部は研磨によって作り出されている。782は打製石斧（打製石鍬）の刃部付近である。刃部は敲打によって作り出されている。783～785は砥石である。797は瑪瑙製の楔形石器で、旧石器時代のものと考えられる。<sup>⑩</sup>

金属製品：786は鎌のようなものとみられる金属器で、近代製品の可能性が高いものである。

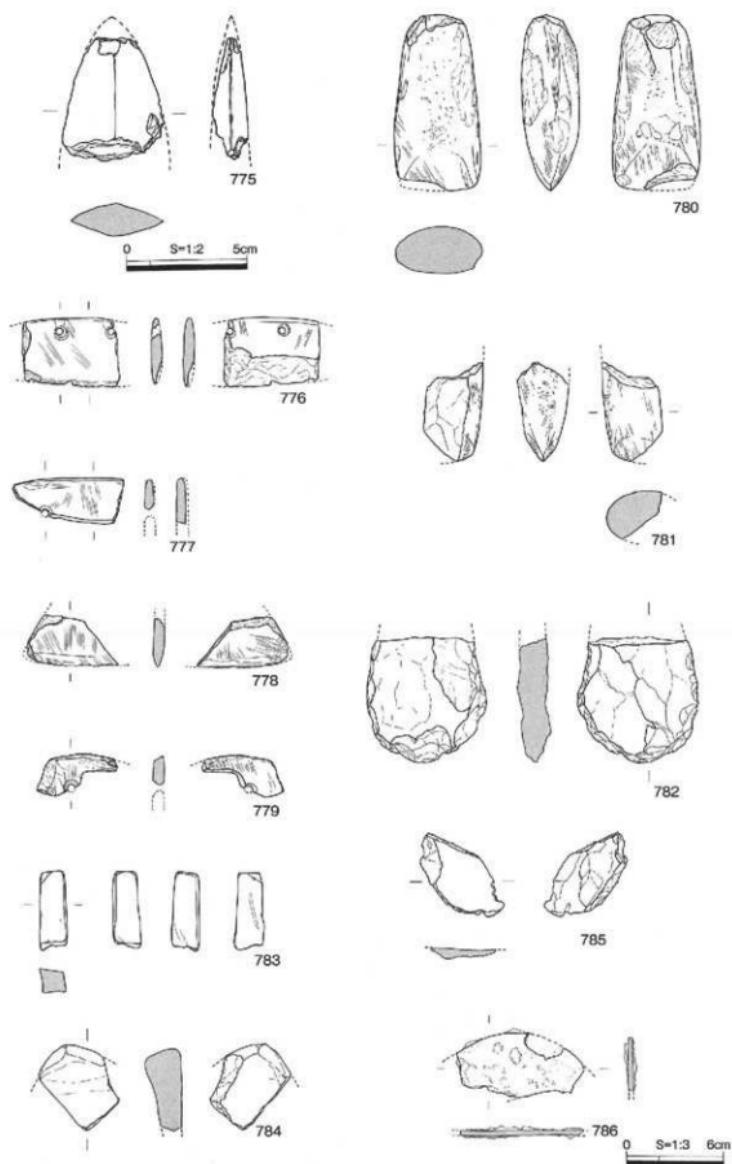
石鎌：787～792は黒曜石製の石鎌である。787は鎌形石鎌と思われ、純文期の石鎌であった可能性が考えられるものである。788は平基、790・791は凹基式を呈する。789は非常に細かい剥離がおこなわれている石鎌で、側刃は鋸歯状となっているものである。793は黒曜石製の何かの未製品であるが、石鎌の未製品である可能性も考えられる。794～796はサヌカイト製の石鎌で、794は凹基式、795・796は平基式を呈するものである。



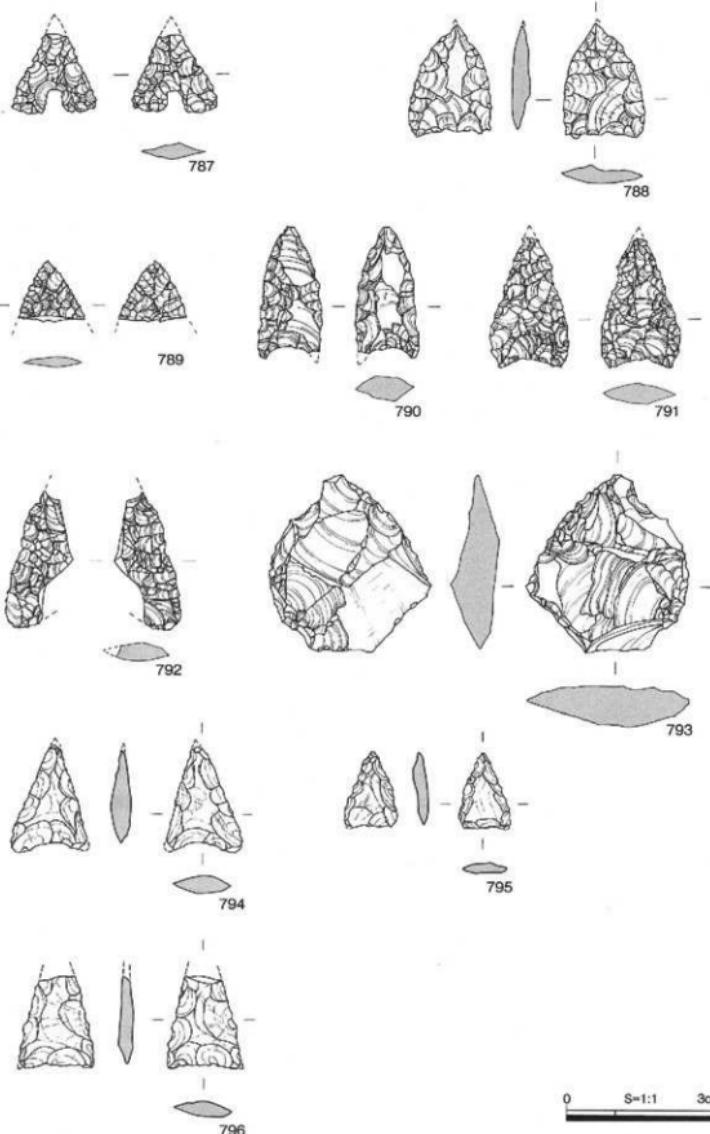
第125図 西側自然流水路 出土土器



第126図 西側自然流水路 出土土器・土製品（分鉢形土製品）

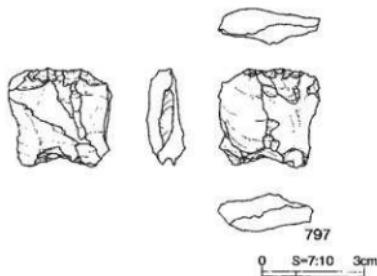


第127図 西側自然流水路 出土石器・鉄器

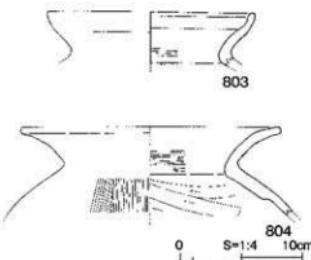


0 S=1:1 3cm

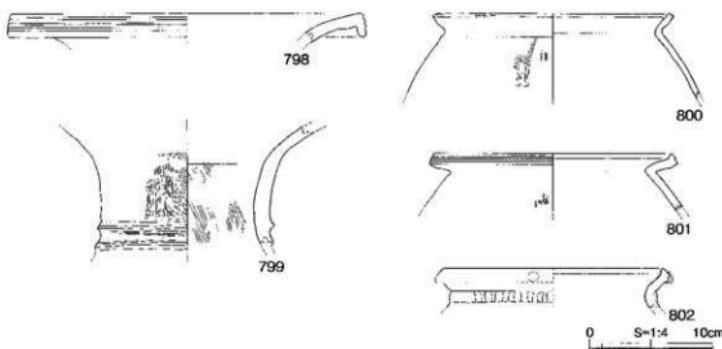
第128図 西側自然流水路 出土石器（石錐）



第129図 西側自然流水路 出土旧石器



第130図 南丘陵西側多目的広場路 出土土器



第131図 南丘陵西側斜面下周辺 出土土器

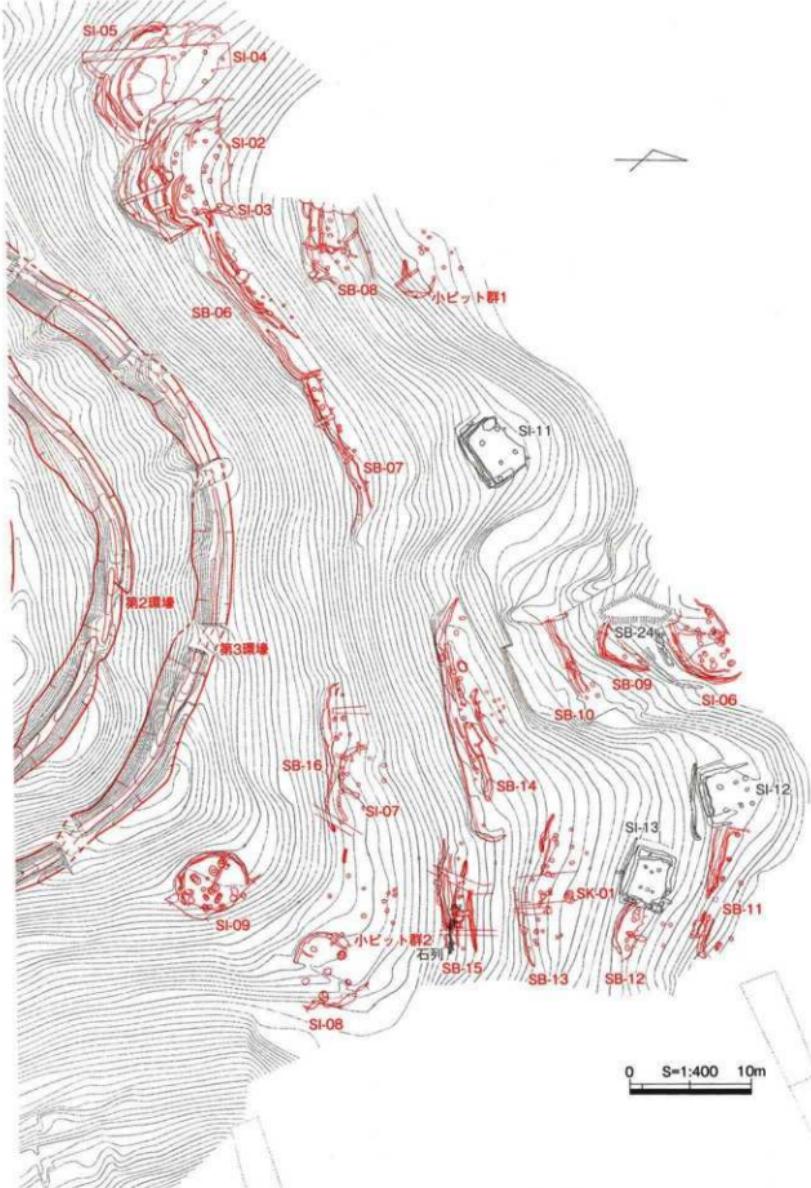
#### 南丘陵西側多目的広場・南丘陵西側斜面下周辺 出土遺物（第130・131図）

山頂部丘陵と対向する南丘陵の西側裾にある多目的広場付近と、南丘陵の西側斜面下周辺から出土した遺物である。これら付近から造構は確認されていないが、弥生上器・上師器が少なからず出土している。ここでは、固化可能なこれら出土遺物をあげておく。

※遺物の法量・出土地等の詳細は遺物観察表を参照。

803・804は南丘陵西側多目的広場付近で採取された土師器の壺の口縁部～肩部である。803はややだれた二重口縁を成し、804は単純口縁のものである。

798～802は南丘陵の西側斜面下周辺で採取された、弥生土器の壺・甌である。799は頸部に2条以上の突帯文を施す広口壺の頸部で、Ⅲ-1～2様式のものと思われる。798は下方に垂れた口縁端部に3条の凹線文を施す壺の口縁部で、Ⅳ-1～2様式のものと思われる。802は頸部に指頭圧痕文帯を施す壺の口縁部～頸部で、Ⅲ-2～Ⅳ-1様式のものと思われる。800・801は口縁端部に凹線文を施す甌の口縁部～肩部で、Ⅳ-1様式のものと思われる。



第132図 北側環境外側造構 分布図（弥生時代）



- 1 茶褐色土(炭含む)  
 2 黄茶褐色土(炭含む)  
 3 暗茶褐色土 I  
 4 淡黄灰色土  
 5 淡黄褐色土 I  
 6 黑褐色土  
 7 淡黑褐色土 I  
 8 暗茶褐色土 II(炭含む)  
 9 暗黄褐色土  
 (黄色地山ブロック多量含む。炭・土器・黒曜石多量包含)
- 10 淡灰褐色土  
 11 黄灰色土  
 12 淡墨褐色土(炭・土器・黒曜石多量包含)  
 13 淡褐色土 I(炭含む)  
 14 淡墨褐色土 II  
 15 淡褐色土 III  
 16 淡黄灰色土  
 17 淡黄褐色土 II

0 S=1:80 2m

第133図 SI-02・03 周辺図・土層断面図

## (2) 北側環壕外側遺構 (第132図)

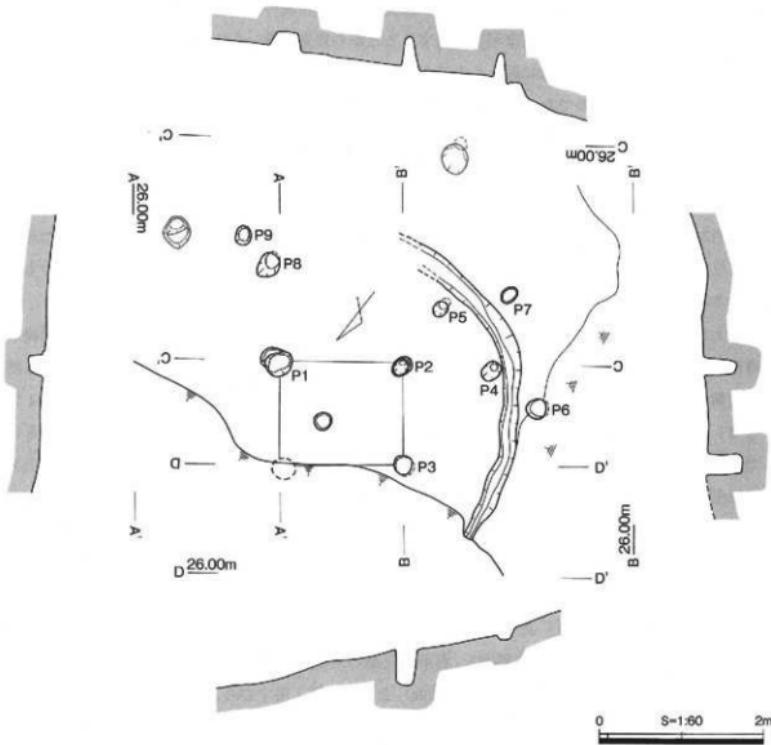
北側環壕外側遺構は、北西～北東の第3環壕外側の緩斜面に作られた遺構である。この北側エリアでは、竪穴住居跡8棟 (SI-02～09)・掘立柱建物跡11棟 (SB-06～16)・小ピット群2所 (小ピット群1・2) の弥生時代遺構と縄文時代と思われる落とし穴状の土坑 (SK-01) を検出している。また、これら遺構からは、弥生土器・石器の他、磨製石剣・土玉といった遺物も出土している。

以下、北側エリアで検出したこれら遺構について述べる。

### SI-02 (第133・134図)

環壕外側の北西側の緩斜面に作られた竪穴住居跡である。この西側には竪穴住居のSI-04・05、東側には近接して竪穴住居のSI-03が検出されている。

SI-02は、壁体溝と4穴の主柱穴によって構成された竪穴住居跡である。実際検出した主柱穴と推察される柱穴は、P1・P2・P3の3穴であるが、遺構面が流失している北側に主柱穴1穴が存在していたものと思われる。周壁及び、南側～北西側の壁体溝は流失もしくは、後の削平等により



第134図 SI-02 平面図・断面図

残存していない。平面プランは、残存する壁体溝の形状から、円形を呈していたものと思われる。これによって想定される平面規模は、壁体溝を含め直径4m程度と推測される。遺構面(床面)は、北側(斜面下方)に向かって傾斜しており、流失等により当時の状態を残していないものとみられる。また、中央ピット、焼土跡は検出していない。なお、東側の斜面上方に存在するSI-03とは、その想定される周壁・壁体溝の位置状況から同時存在したものでないことが推測され、土層堆積状況からはSI-02がSI-03より古いことが分かっている。

遺物は、この遺構に伴うものは出土していない。よって、遺構存在時期は明らかではないが、SI-03の推定遺構存在時期がIV-1様式期(弥生中期後葉)頃もしくは、それ以前と考えられることから、これに近い時期、またはこれ以前の時期と推察できる。

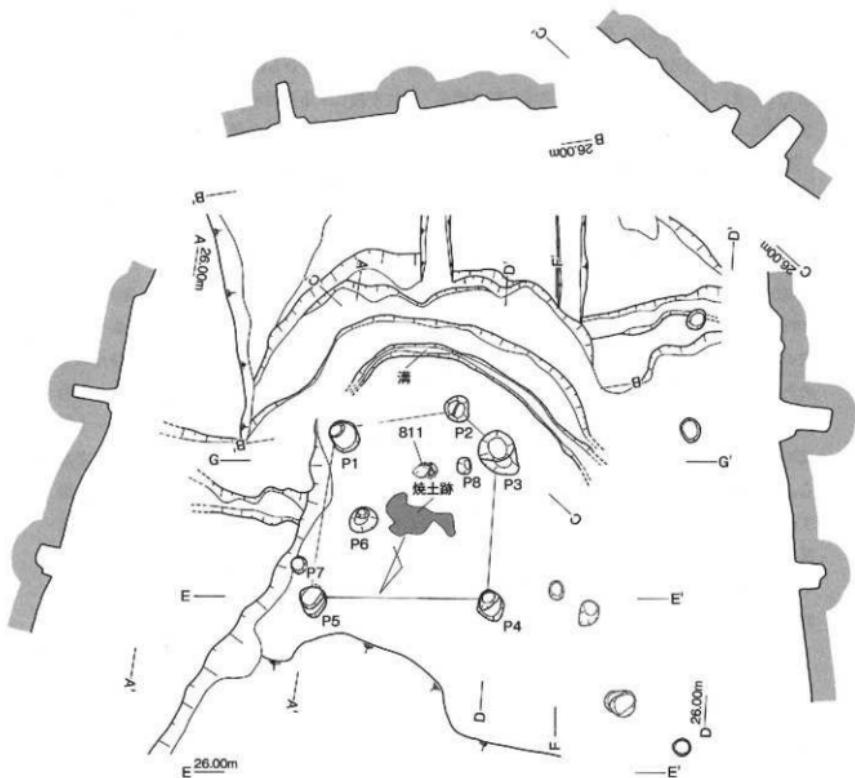
#### SI-03・SI-03周辺(第133・135~139図)

環壕外側の北西側の緩斜面に作られた竪穴住居跡である。この西側の斜面下には竪穴住居のSI-02、東側には近接してSB-06が検出されている。

SI-03は、5穴の主柱穴(P1~P5)によって構成された竪穴住居跡である。周壁は、南側付近のみ残存しており、西・北・東側の周壁は流失もしくは、後の削平等により消滅している。平面プランは、残存する壁体溝が歪な形状を呈することから想定し難いものではあるが、当地の弥生竪穴住居跡の例からして、円形に近いものであったと考えられる。これによって想定される平面規模は、直径5m程度のものであったと推測される。遺構面(床面)は、北側(斜面下方)に向かって傾斜していることから、一部は流失等により当時の状態を残していないものとみられるが、主柱穴によって囲まれる中央付近においては、焼土跡を検出している。また、土層堆積状況からはSI-03が西側の斜面下方に位置するSI-02より新しい遺構であることが分かっている。その他、北側の周壁の約30cm内側にこの周壁に沿う形の溝を検出している。この溝は、上層断面からSI-03の遺構面より占い段階の遺構であることが分かっているが、何に伴う溝であったのか、詳細は不明なものである。

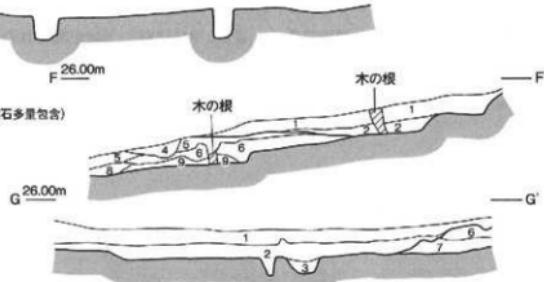
以上がSI-03についての調査状況であるが、このSI-03の周辺では、南西側で溝を作った平坦面と南側の斜面上方で焼土跡をそれぞれ確認している(第133図参照)。南西側の平坦面は、湾曲する溝を南側に付随するもので、平坦面上で柱穴2穴(P1・P2)、南西側で溝にかかる形の柱穴1穴(P3)を検出している。この溝と柱穴を作った平坦面がどの様な遺構であったのか判断し難いものではあるが、ここにも何らかの建物が存在していたことが窺える。また、これの南東側の斜面上方で検出している焼土跡付近も何らかの遺構の存在が疑われるものである。以上これら遺構の存在や段状加工面が数箇所でみられる状況から、SI-02・SI-03周辺の緩斜面においては、幾重もの遺構が重複しているものと考えられる。

遺物は、SI-03の焼土跡付近の遺構面(床面)から、弥生土器の壺が潰れた状態で出土している。また、SI-03遺構面(床面)上一層の第2層中から、弥生土器の底部815・817・819、黒曜石製品の未製品830、サヌカイト製の石錐832、石剣の先端の可能性が考えられるサヌカイト製品833、サヌカイト製の石錐834が、SI-03遺構面(床面)上二層の第1層中から、弥生土器の壺片806・807・壺片808・809・底部814・816、黒曜石製の石錐821・823~826、黒曜石製の未製品827、サヌカイト製の楔形石器831・835~838、貝殻製の石包丁840、黒曜石の剥片等が接合する石核842が出土して



- 1 深茶褐色土(炭含む)  
 2 淡黄褐色土  
 [黄色地山ブロック多量含む。炭・土器・黒曜石多量包含]  
 3 淡灰褐色土  
 4 黄灰色土  
 5 淡黑褐色土(炭・土器・黒曜石多量包含)  
 6 淡褐色土 I (炭含む)  
 7 淡褐色土 II  
 8 淡黄褐色土  
 9 淡黄褐色土

0 S=1:60 2m



第135図 SI-03 平面図・土層断面図

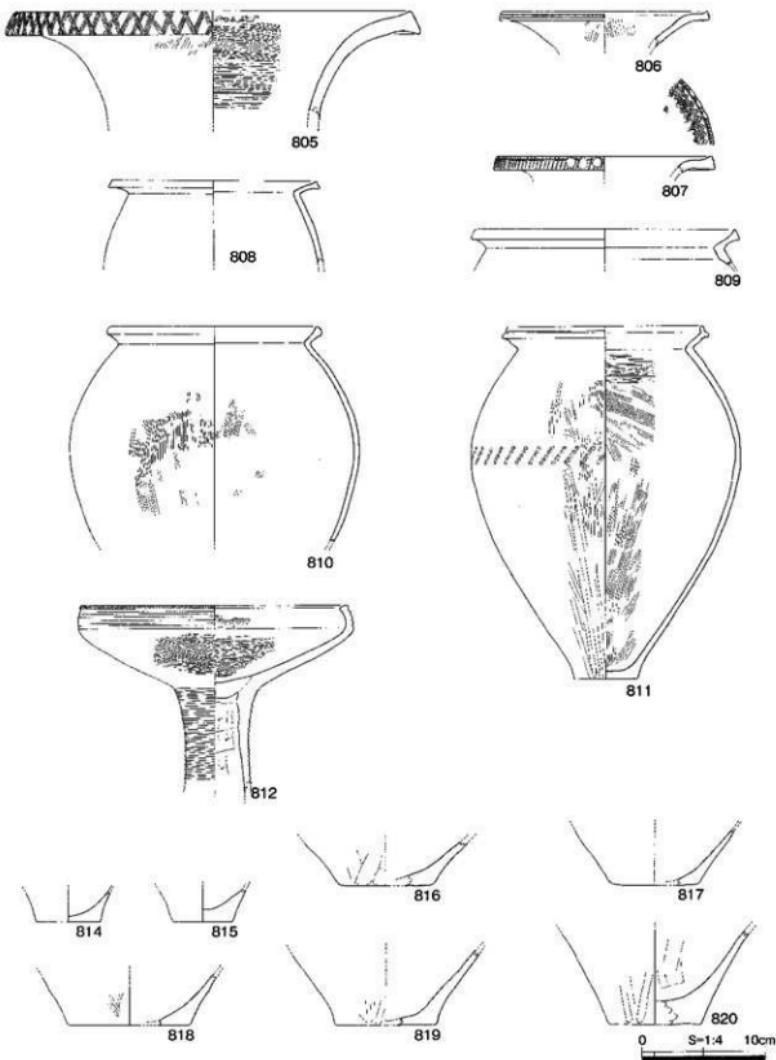
いる。その他、南西側の平坦面のP 3 墳土中から弥生土器の底部818、SI-03遺構面外の堆積土中から弥生土器の壺片805・壺片810・高环片812・底部820、黒曜石製の石錐829、黒曜石製の未製品830、砥石839、石包丁841が出土している。なお、SI-03住居内外からは黒曜石のチップを多量検出している。この黒曜石チップ・黒曜石製未製品・剥片が接合する黒曜石石核の出土は、SI-03住居内もしくは、その周辺で石器製作がおこなわれていたことを示すものと推測される。

遺構存在時期は、遺構面（床面）上の出土土器より、IV-1様式（弥生中期末）頃もしくは、それ以前と推定される。また、その他周辺に存在していた遺構は、その堆積土中の出土土器より、III-2～IV-1様式（弥生中期中葉～中期後葉）頃もしくは、それ以前と推定される。

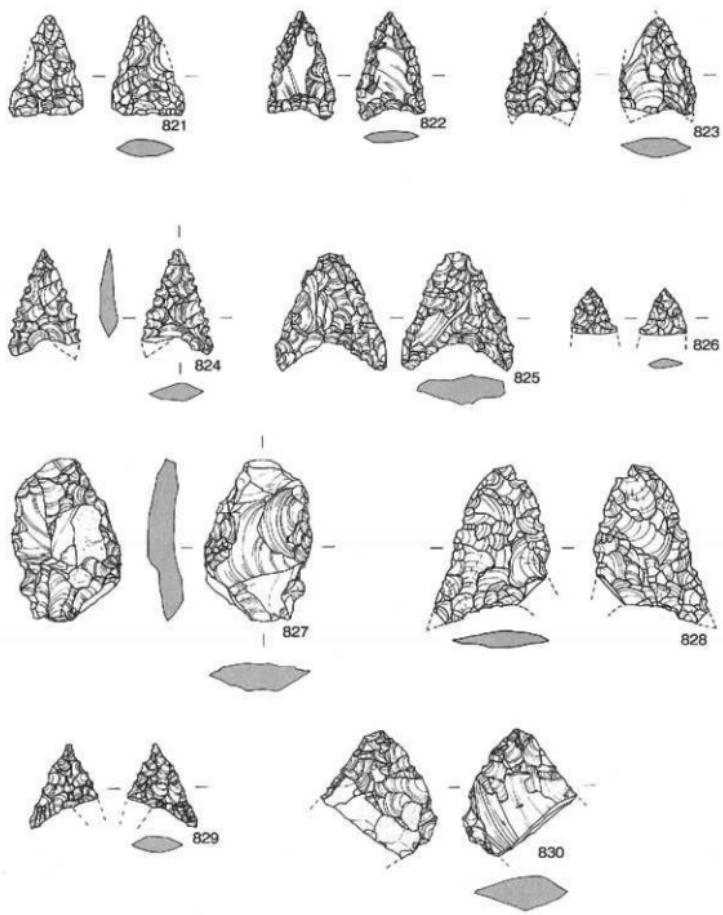
#### SI-03 出土遺物（第136～139図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

805は口縁端部に斜格子文を施す広口壺の口縁部～頸部で、III-1～2様式のものと思われる。807は口縁端部に凹線文・刻目・円形浮文、口縁内面に波状文を施す広口壺の口縁部で、III-2様式のものと思われる。806は口縁端部に2条の凹線文を施す壺の口縁部～頸部で、IV-1様式のものと思われる。808～810は施文がみられない壺の口縁部～胴部・口縁部～頸部である。このうち810は<sup>14</sup>C年代測定によってBC230～90年の可能性が高いものと推測されている。<sup>10</sup>以上、III-2様式のものと思われる。811は口縁端部に凹線文、胴部に列点文を施す壺の口縁部～胴部下付近である。III-2～IV-1様式のものと思われる。812は口縁部が内湾し、口縁外面と脚部に凹線文を施す高環の环部～脚部で、IV-1～2様式のものと思われる。814～820は弥生土器の壺・壺・鉢の底部である。821・822・824・826・829は黒曜石製の石錐で、821は平基式、822・824・829は凹基式を呈するものである。823・825・828・830は黒曜石製の石錐未製品と思われるものである。また、827は黒曜石製の何かの未製品であるが、石錐の未製品とも考えられるものである。832はサスカイト製の石錐である。剥離は側辺のみ、おこなわれているもので、それ以外の表面は研磨によって仕上げられている。サスカイト製の石錐の研磨品は当地山陰地方では他に例をみないものである。833はサスカイト製で、石剣の先端の可能性も考えられるものである。834は一部分に研磨痕がみられるサスカイト製の石錐と思われるものである。831・835～838はサスカイト製の楔形石器と思われるものである。839は3面にて使用痕がみられる砥石である。840・841は石包丁で840は両面に研磨がされており、穿孔があけられているものである。842～845は黒曜石の石核の接合資料である。このうち、842は剥片が接合して復元された石核で、843は842から取られた継長状の剥片、844は842から取られた不定形な剥片である。また、845は843・844が取られた後の残核となったものである。

なお、この黒曜石接合資料は竹広文明氏に実見して頂いている。所見は次のとおり。

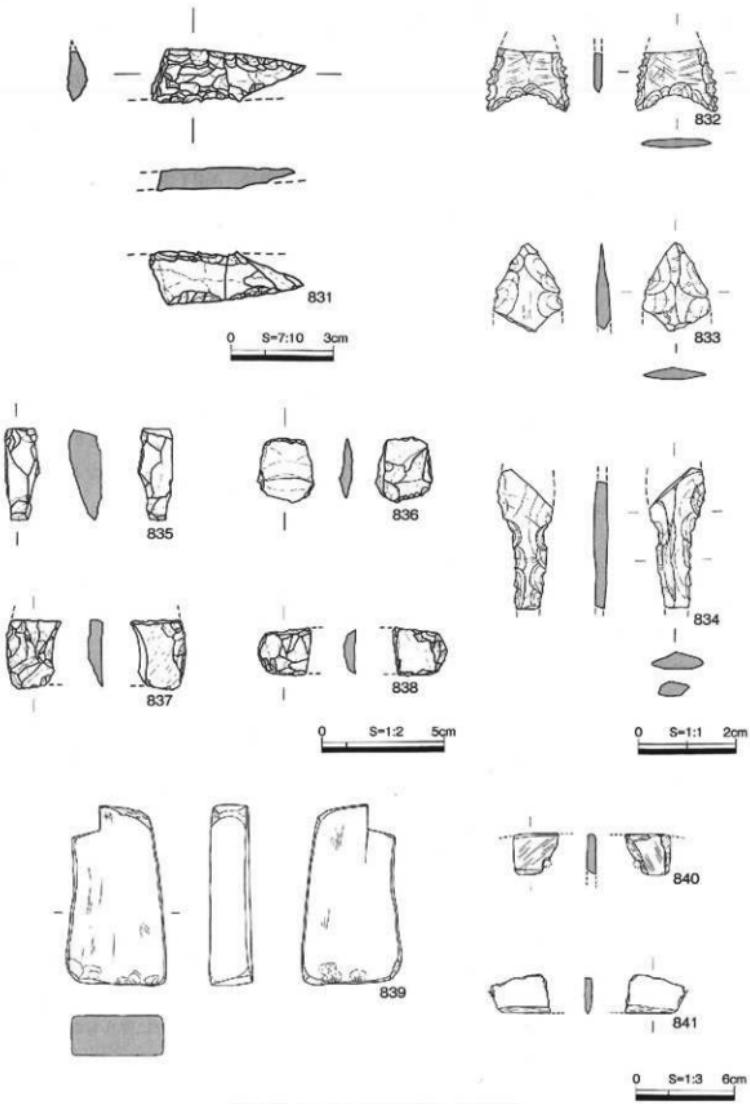


第136図 SI-03・SI-03周辺 出土土器



第137図 SI-03・SI-03周辺 出土石器（石錐）

0 S=1:1 3cm



第138図 SI-03・SI-03周辺 出土石器

# 田和山遺跡出土の黒曜石製石核、剥片の接合資料について<sup>(註1)</sup>

広島大学大学院文学研究科 竹 広 文 明

黒曜石製の石核1点（第139図-3）と剥片2点（第139図-1、2）の接合資料である。なお、1の剥片は欠損しており、a～cの3点に分かれている。3の石核は、A面下半にはポジティブと考えられる平坦な剥離面があり、砾を分割したような厚手の剥片を素材としているといわれる。

接合した2点の剥片はいずれも、C面上縁部を打面として、A面側から剥離されている。接合状況から本石核での剥片剥離の過程を復元すると次のようになる。

## 1. 剥片剥離の過程

### ①剥片1剥離以前の段階

剥片1と同様、C面上縁を打面、A面を作業面として少なくとも2枚の長さ5cm前後の剥片を剥離している。なお、この剥離で打面となっているのは、C面上縁の大きめの剥離面であり、これら剥片1、2を含む一連の剥離に先行してA面側を打面に剥離されていたといわれる。ちなみに、A面下縁部にも小剥離痕が認められるが、剥片1の剥離に先行して行われている。

### ②剥片1の剥離

なお、剥片1は前述したように欠損しているが、打点付近で折損しており、剥離に伴い欠損した可能性が考えられる。

### ③剥片2の剥離

剥片2の剥離以後の剥離痕は観察されず、剥片2の剥離で本石核は残核となったと考えられる。

## 2. 本資料の特徴について

本資料での剥片剥離は、やや厚手の剥片を石核素材しているとみられ、主にA面側から連続して剥片の剥離が行われていると考えられる。本資料は、出土状況などから弥生時代中期の資料と考えられているが、接合資料や残核の形状などからみても、当時代の剥片剥離技術（註2）の中で理解できるものと考えている。

本資料では、以上のように黒曜石原石を直接素材とするだけでなく、原石をいわば分割したような厚手の剥片を素材としている。田和山遺跡では、山頂部や平坦加工面造構から、約160gや300g程度のやや小型の黒曜石原石が出土しており、その関係が注目される。

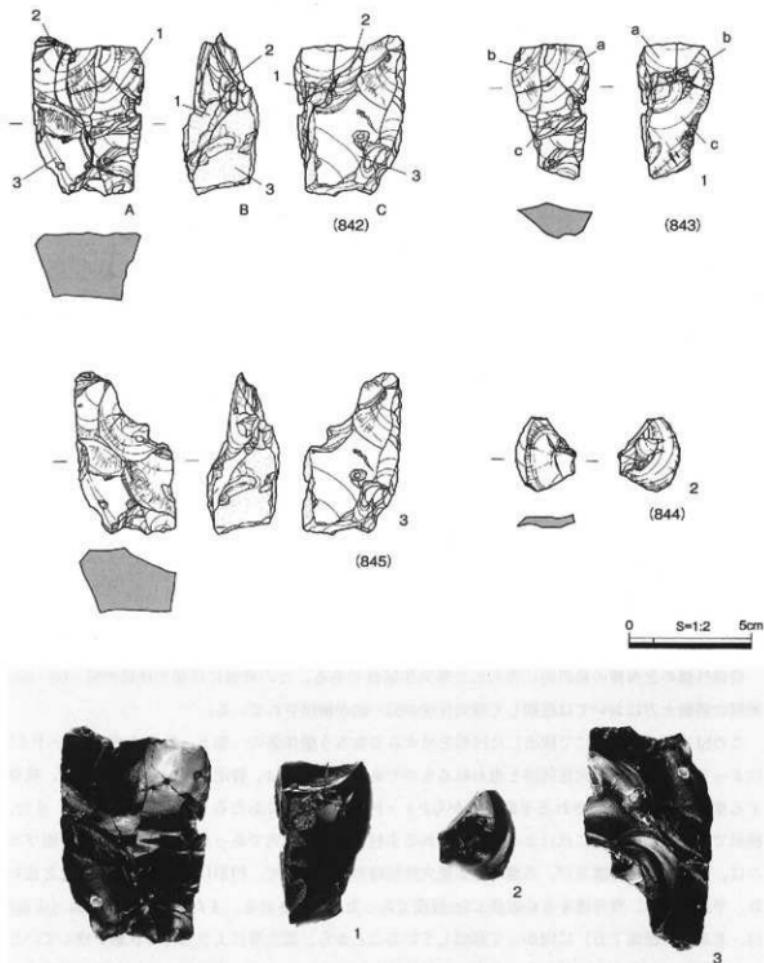
また、田和山遺跡の弥生時代の黒曜石石器には、薄手で丁寧なつくりの石器が特徴的に認められ、その製作手法に興味が持たれる。本接合資料は、弥生時代中期の石器製作に伴うものと考えられているが、この石核から生産された剥片が、このような石器の素材剥片に直接なっているかどうかについては、今回は検討できなかった。

註1 本文は、田和山遺跡の報告書作成のための資料整理の際、本接合資料について所見を求める  
れ、その際に提出させていただいたコメントに加筆をして作成したものである。

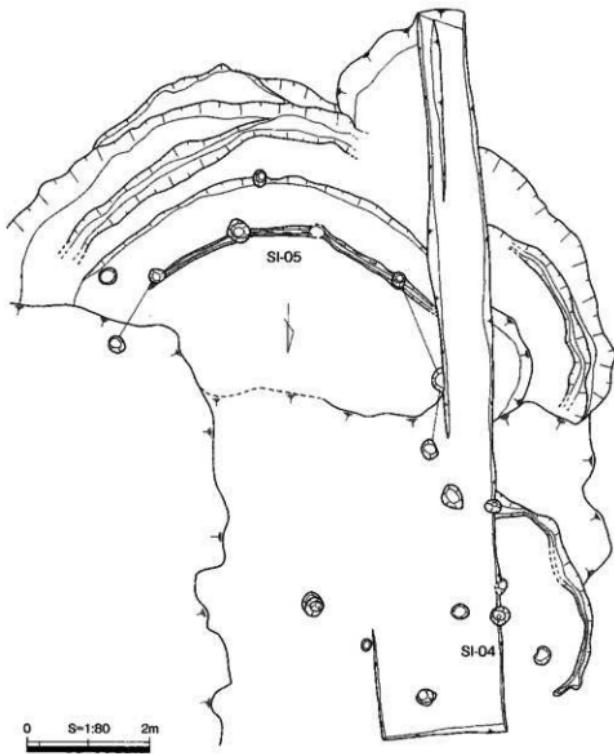
註2 当地域の縄文時代以降の黒曜石の剥片剥離技術の検討例としては、以下の研究例がある。

竹広文明「中国地方縄文時代の剥片石器—その組成・剥片剥離技術—」『考古学研究』第35卷第1号、1988年。

稻田陽介「山陰地方における縄文時代前期の石器製作技術構造」『島根考古学会誌』第22集、2005年。



第139図 SI-03 出土石器（黒曜石核接合資料 実測図・写真）

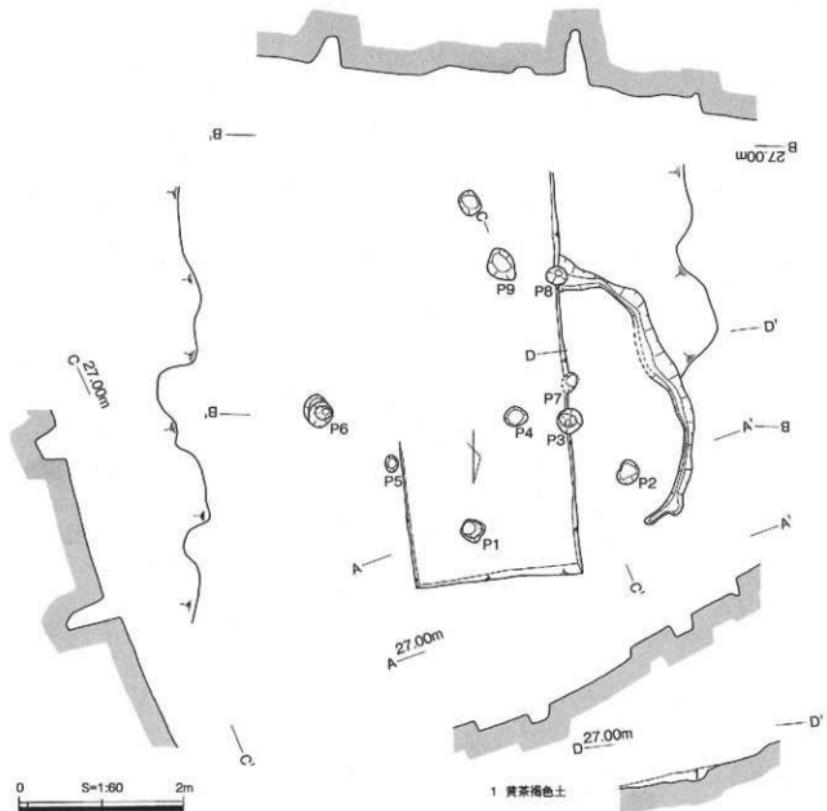


第140図 SI-04・05 周辺図

#### SI-04 (第140・141・143図)

環境外側の北西側の緩斜面に作られた堅穴住居跡である。この東側には堅穴住居のSI-02・03、南側の斜面上方ににおいては近接して堅穴住居のSI-05が検出されている。

このSI-04は、西側にて検出した円形を呈するであろう壁体溝の一部と、柱穴9穴 (P1～P9) によって構成される堅穴住居跡と思われるものである。主柱穴は、特定し辛いものであるが、残存する壁体溝及び、推定される平面規模からP1・P2が主柱穴にあたるものと考えられる。また、検出できていながらこれによって想定される主柱穴は4～5穴であったと考えられる。平面プランは、残存する壁体溝及び、当地の弥生堅穴住居跡の例からして、円形に近いものであったと思われ、平面規模は、壁体溝を含め直径3.5m程度であったと推測される。また、住居内道様面(床面)は、北東側(斜面下方)に向かって傾斜していることから、流失等により当時の状態を残していないものとみられる。中央ピット、焼土跡等は検出していない。なお、南東側の斜面上方に位置するSI-05とは、その想定される周壁・壁体溝の位置状況から同時存在したものでないことが推測され



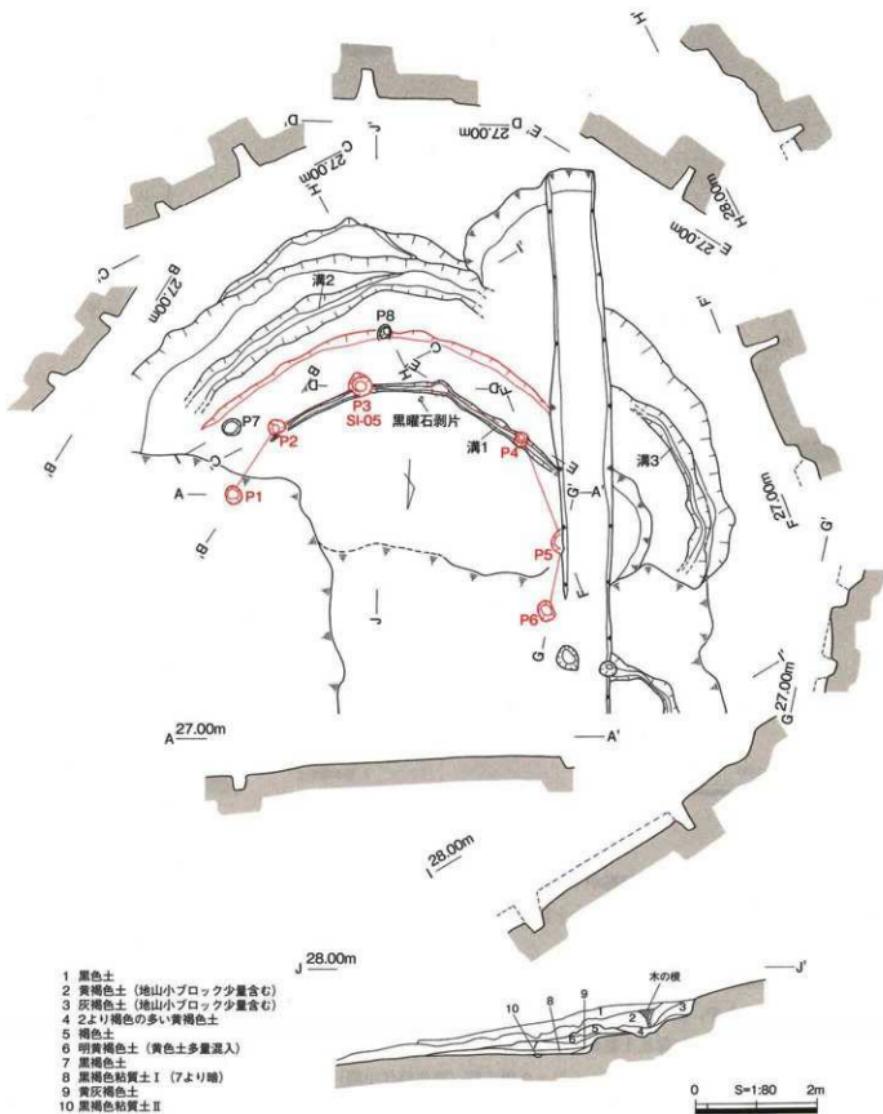
第141図 SI-04 平面図・土層断面図

るが、土層断面等による把握ができなかったため、どちらが先行するものか詳細は不明である。

遺物は、P9内埋土中から弥生土器の底部848、遺構面上第一層中から弥生土器片が出土している。

遺構存続時期は、土器が出土しているP9がその位置よりSI-03に関わる柱穴ではないことも考えられることや、埋土中からの出土土器が小片であることから、明確にすることはできていない。ただ、埋土中出土の弥生土器が、胎土をみる限り弥生中期の土器である可能性が高いものと判断されることから、SI-03はⅢ-1～Ⅳ-2様式期（弥生時代中期）頃もしくは、それ以前の遺構であると考えられる。

※本遺跡出土の弥生土器は、前期末～中期後葉の土器に限定されることから、この範疇にて土器を考察した。



第142図 SI-05 平面図・土層断面図

### SI-05 (第140・142・143図)

環壕外側の北西側の緩斜面に作られた竪穴住居跡である。この北東側の斜面下方には竪穴住居のSI-02・03、北西側の斜面下方においては近接して竪穴住居のSI-04が検出されている。

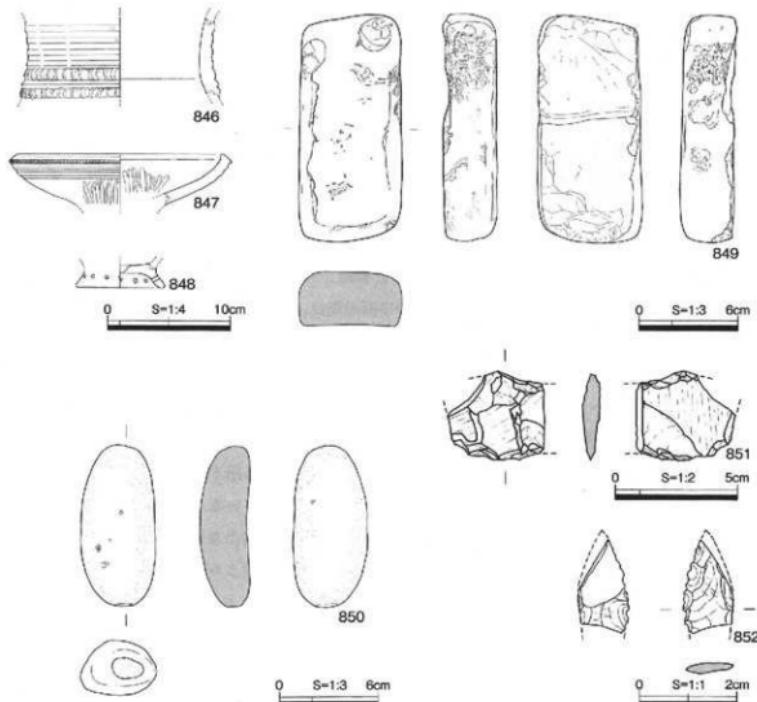
このSI-05は、南側（斜面上方）で検出した周壁痕と主柱穴6穴（P1～P6）によって構成される竪穴住居跡と思われるものである。遺構面（床面）は、北側（斜面下方）に向かって傾斜しており、流失等により当時の状態を残していないもので、当時存在したであろう北側付近の周壁・主柱穴は消滅しているようである。また、中央ピット、焼土跡は検出していないが上記のことより、当時存在したもののが消滅している可能性も考えられる。また、平面プランは、残存する周壁から円形を呈するものと思われる。主柱穴はP1～P6と推測され、検出できてはいないがP3～P4間にもう1穴存在していたものと推測される。住居平面規模は、残存する周壁痕・柱穴を基に復元したもので6.9mを測り、これによって想定される現存したであろう主柱穴は、11～12穴と推測される。この竪穴住居跡の規模は、本遺跡内ではSI-01に次ぐ大きさを誇るものである。なお、北西側の斜面下方に位置するSI-04とは、その想定される周壁のラインから同時存在したものでないことが推測されるが、上層断面等による把握ができなかったため、どちらが先行するものか詳細は不明である。その他、SI-05内及び周辺から、壁体溝ともみられる渦曲する溝を3条（溝1～3）検出している。このうち溝1は、P2～P3～P4を繋ぐような形で検出している。この溝は、SI-05以前に存在した竪穴住居の壁体溝とも推測されるが、これに伴う柱穴が検出されていないことから、その詳細は不明なものである。また、SI-05との新旧関係は、土層断面よりSI-05埋没後に作られたものでないことは分かっているが、これに先行する、または同時存在する等の詳細は、両者の埋上層が類似するものであったことから、明確な判断が出来ていない。溝2は、SI-05の南側の斜面上方にて検出したもので、この付近には柱穴2穴（P7・P8）が合わせて検出されている。溝2に伴う可能性がある柱穴はこのP7・P8の2穴のみであることから、その詳細は不明と言わざるを得ないが、何らかの建物が存在していた可能性も考えられる。なお、上層断面より溝2は、SI-05埋没後に作られた溝であることが分かっている。溝3は、SI-05の西側にて検出したもので、これに伴う柱穴等が確認されていないこと等から、その性格は不明なものである。このようにSI-05の周辺は、SI-03の周辺と同様、複数の遺構の重複がみられる。

遺物は、SI-05の遺構面（床面）から黒曜石の剥片が出土している。また溝2内埋土中から弥生土器の壺片846・高环片847、サスカイト製の石鏃片852が出土している。その他、堆積土中からは、散石849・850、サスカイト製の楔形石器851が出土している。なお、上記のとおり、黒曜石の剥片が出土していることや、この周辺においても黒曜石のチップが検出されていることから、SI-05住居内もしくは、その周辺ではSI-03同様、石器製作がおこなわれていたものと考えられる。

遺構存続時期は、溝2が溝内埋土中の出土土器からIV-1様式期（弥生中期後葉）頃もしくは、それ以前と推定される。また、溝2はSI-05埋没後に作られたことが判明していることから、SI-05はIV-1様式期以前の遺構と考えられる。なお、これにより溝1はIV-1様式期以前と推測されるが、溝3については、不明である。

### SI-04・05 出土遺物（第143図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

846は頸部に凹線文と指頭圧痕文帯を施した壺の頸部で、847は口縁端部が平坦を成し、口縁外面



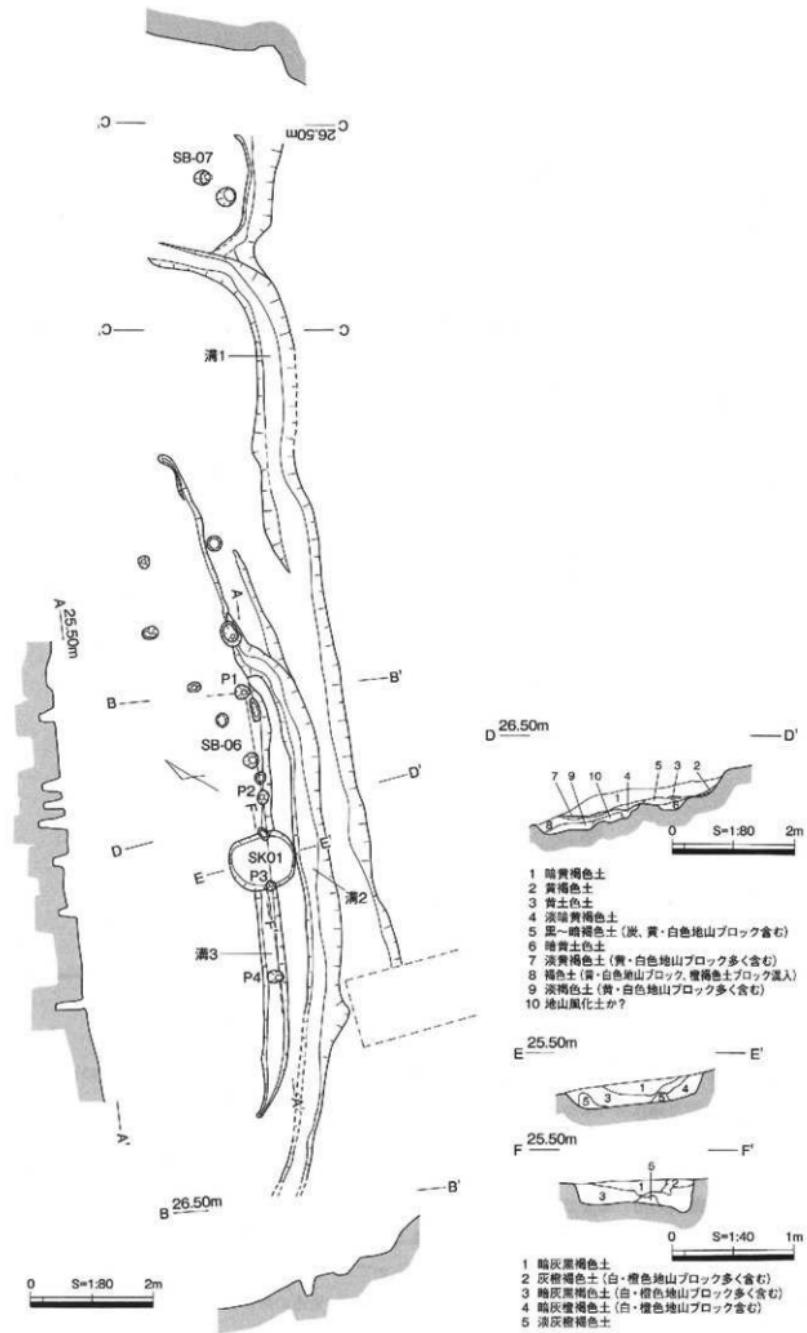
第143図 SI-04・05 出土土器・石器

の3条の凹線文を施す高杯の杯部である。以上、IV-1様式のものと思われる。848は弥生土器の壺・甕・鉢の底部で、脚のような台が付き、その周りには16穴の円孔があけられている。849・850は敲石である。849は長方形形状の側面に、850は細長い楕円形の上下に敲打痕がみられる。また、849は何かの転用品の可能性も考えられる。851は3箇所に研磨痕がみられる楔形石器である。サヌカイト製品に研磨を施すものは当地では稀少な例と思われ、何かの転用品の可能性も考えられる。852はサヌカイト製の石礫の欠損品である。

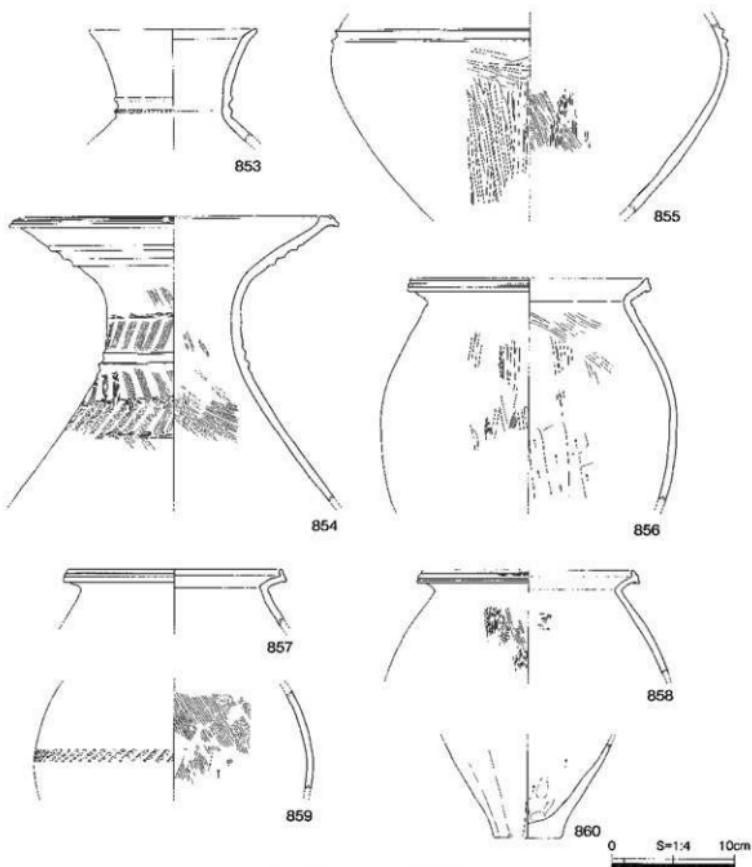
#### SB-06 (第144~146図)

環境外側の北西側斜面を切って作られた加工段状の掘立柱建物跡と思われるものである。南西側にはSI-03、北東側にはSB-07が近接する形で検出されている。

この加工段状の遺構面からは、溝3条(溝1・溝2・溝3)、柱穴13穴、土坑(SK01)を検出している。溝1は幅35~65cm・深さ6~10cmを測り、北東側でL字状に折れ曲がっている。また、溝1に伴う遺構面は北東~南西12m以上に及ぶもの推察される。溝1は建物に伴う雨落ち溝と考えられるが、これに伴う柱穴が検出できなかつたことや、北西側(斜面下方側)の遺構面が流失して

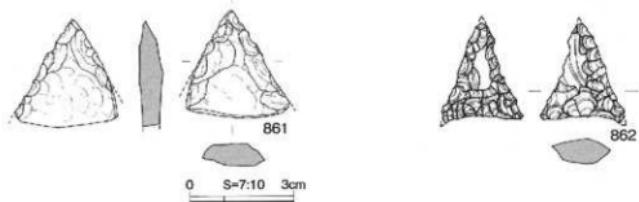


第144図 SB-06 平面図・土層断面図



第145図 SB-06 出土土器

いることから詳細は明らかでない。仮に柱穴を作わない溝であるならば、作業用スペースのような施設であった可能性も考えられる。溝2は溝1以前に作られたもので、幅35~55cm・深さ5~25cmを測り、この北西側には直線状に並ぶ4穴の柱穴(P1~P4)を検出している。柱穴間距離はP1~P2間1.75m、P2~P3間1.45m、P3~P4間1.55mを測る。これら4穴の柱穴(P1~P4)は獨立柱建物跡の桁行部分で、溝2はその建物に付随する雨落ち溝と考えられる(SB-06)。遺構面は地山と第8~10層を基盤としているものである。建物の規模は、北西側(斜面下方側)の遺構面が流失している状態であったことから全容は明らかでないが、桁行3間(4.75m)以上×梁間1間以上の建物であったと推測される。なお、このSB-06は先述の南西側で検出されたSI-03とは



切れ合っており、SI-03がSB-06の溝2を切って作られていることが分かっている。その他、溝3は溝2以前に作られたもので、幅35~40cm・深さ4~12cmを測るものである。この溝も建物に付随する雨落ち溝と想定でき得るが、溝2同様、北西側（斜面下方側）の遺構面（床面）が流失している状態であったことから、これに伴う柱穴が存在していたのか等の詳細は明らかでない。SK01は方形気味の円形土坑で、上端径92~107cm・下端径（底径）80~100cm・深さ8~13cmを測る。切れ合ひ関係から溝2・3埋没後に作られたことが分かっていることから、溝1の遺構面に伴うものであった可能性も考えられる。用途・性格については不明である。

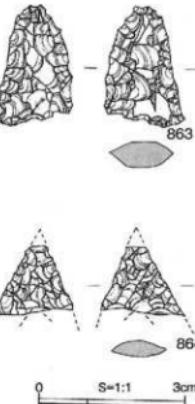
遺物は、SB-06の遺構面上一層の第5層中から弥生土器の壺片853・855・甕片856・859・857、底部860、打

製石剣の先端部の可能性が考えられるサスカイト製の石器861、黒曜石製の石鎚862、黒曜石の石鎚未製品863等が出土している。また、SK01埋土中からは弥生土器の壺片854が出土している。

SB-06の存在時期は、遺構面上一層の第5層中の出土遺物より、IV-1~2様式期（弥生中期後葉）頃もしくは、それ以前と推定される。

#### SB-06 出土遺物（第145・146図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

853は頸部に2条の突帯文を施した壺の口縁部～肩部付近で、III-1～2様式のものと思われる。854は口縁端部に3条の凹線文と円形浮文、頸部に突帯文と羽状文を施した壺の口縁部～胴部付近である。III-2～IV-1様式のものと思われる。855は胴部に2条の突帯文を施した壺の胴部で、III様式のものと思われる。856は口縁端部に2条の凹線文を施した甕の口縁部～胴部である。<sup>14</sup>C年代測定によってBC210~85年の可能性が高いものと推測されている。<sup>17</sup> IV-1様式のものと思われる。857・858は口縁端部に2条の凹線文を施す甕の口縁部～肩部付近で、IV-1～2様式のものと思われる。859は胴部に列点文を施す甕の胴部で、内外共に煤の付着が認められているものである。860は弥生土器の壺・甕・鉢の底部である。861はサスカイト製の石器で、打製石剣の先端部の可能性が考えられるものである。862～864は黒曜石製の石鎚で、863は未製品の可能性も考えられるものである。



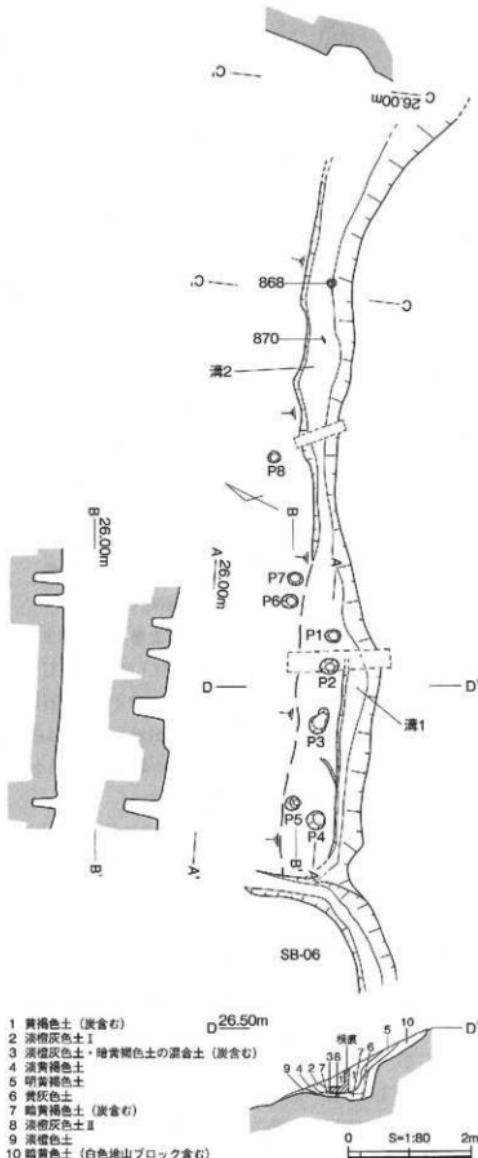
第146図 SB-06 出土石器

SB-07 (第147~149図)

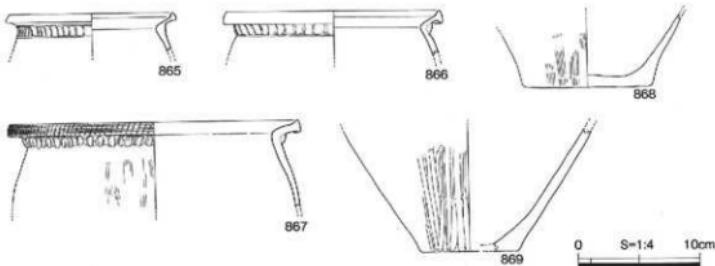
環壕外側の北西側斜面を切って作られた加工段状遺構である。南西側には近接してSB-06が検出されている。

この加工段状の遺構面からは、溝(溝1・2)と8穴の柱穴を検出している。溝は斜面を切って平坦面を作った際(きわ)から、南北側と北東側に分かれる形で検出している。南西側の溝1は幅15~40cm・深さ約2cm、北東側の溝2は幅20~50cm・深さ8~17cmを測るもので、溝2の北東端は遺構面流失のため消滅している。これら溝は連続する1条の溝であったのか、個別の溝として存在していたのか不明なものである。また、柱穴は建物を想定させるような配列の規則性が見られないもので、遺構面(床面)は南西側で0.4~1m程度を残し、北東側は溝のみを残して流失している状態であった。この場所においては、明確な建物跡を確認することはできなかったが、溝と柱穴が併存していることから、当時は雨落ち溝を付随する掘立柱建物跡が存在しており、後にその痕跡は遺構面と共に流失してしまったものと考えられる。なお、溝1の南西端はSB-06の溝1によって切られていることから、SB-07はSB-06の溝1が機能していた時より古い遺構であることが分かっている。

遺物は、溝2埋土中から弥生土器の底部868・用途不明石器870、



第147図 SB-07 平面図・土層断面図



第148図 SB-07 出土土器

P2埋土中から弥生土器の壺片867・底部869が出土している。遺構埋土層からは遺構面上一層の第7層中から弥生土器の壺片865・866、その他埋土中からサスカイト製の石錐871が出土している。

遺構の存在時期は、溝2・P2埋土中及び、遺構面上一層の第7層中の出土遺物より、IV-1様式期(弥生中期後葉)頃もしくは、それ以前と推定される。

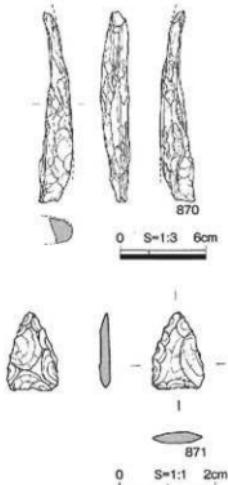
**SB-07 出土遺物**(第148・149図)※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

865~867は頸部に指頭圧痕文帯を施す壺の口縁部~肩部付近である。867は口縁端部に3条の凹線文と刻目が合わせて施されている。以上、IV-1様式のものと思われる。868・869は弥生土器の壺・甕・鉢の底部である。870は研磨痕が所々にみられる頁岩の用途不明石器である。871は平基式のサスカイト製の石錐である。

#### SB-08(第150・151図)

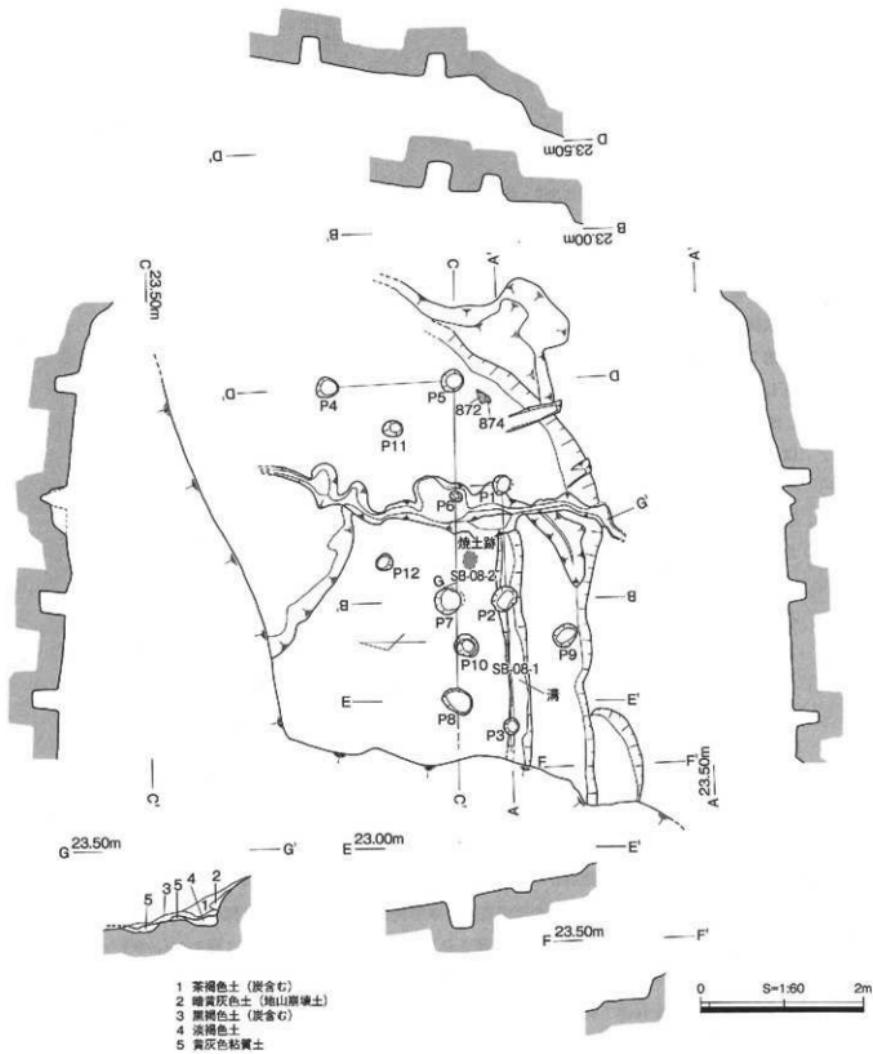
環壕外側の北西側斜面を切って作られた加工段状の掘立柱建物跡である。南側の斜面上方においてはSI-02・03、SB-06が検出されている。

この加工段状の遺構面からは、掘立柱建物跡に伴う溝と柱穴12穴を検出している。また、検出した掘立柱建物跡は建替えがおこなわれたものと考えられる。最初に作られたSB-08-1はP1~P3を桁行部分とした、雨落ち溝を付随しない掘立柱建物跡と考えられるもので、これに伴う焼土跡も検出している。北側の梁間部分の柱穴が検出できなかったことや、西側の遺構面が流失していることから、建物規模の全容を明らかにすることはできなかったが、桁行2間(2.95m)以上×梁間1間以上の建物が存在していたものと推測される。柱穴間距離はP1~P2間1.4m、P2~P3間1.55mを測っている。SB-08-1の後に作られたSB-08-2は、P4~P5を梁間、P5~P8を桁行とした雨落ち溝を付随する掘立柱建物跡と思われるものである。雨落ち溝と推測される溝はP7~P8に平行する形で検出している。建物規模はSB-08-1同様、北・西側の遺構面が流失してい

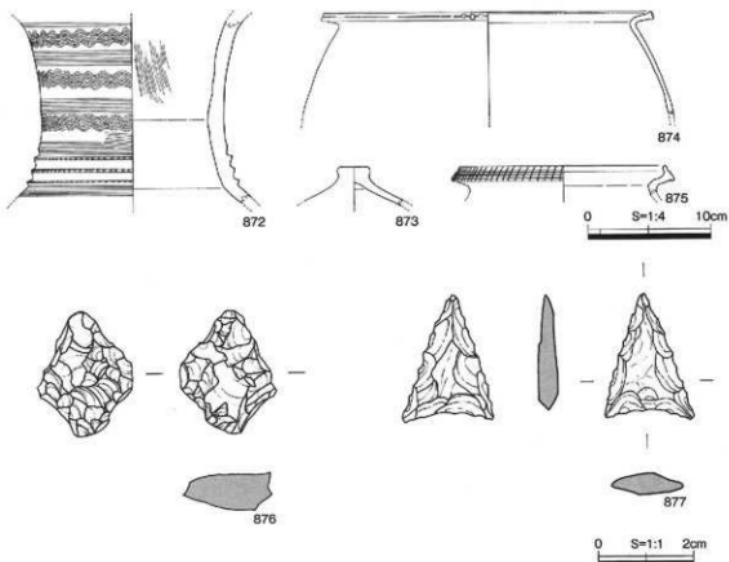


第149図 SB-07 出土石器

ることから全容を明らかにすることはできなかったが、桁行3間(3.9m)以上×梁間1間以上の建物が存在していたものと想定される。柱穴間距離は、P4-P5間1.55m、P5-P6間1.4m、P6-P7間1.25m、P7-P8間1.25mを測り、溝は、幅25~35cm・深さ2~10cmを測るものである。



第150図 SB-08 平面図・土層断面図



第151図 SB-08 出土土器・石器（石鎚）

遺物は、東側の造構面から弥生土器の壺片872・壺片874、P2埋土中から弥生土器の蓋873が出土している。その他、造構面埋土の第1層中から弥生土器の壺片875、上層埋土中から黒曜石製の未製品876、造構外の上方斜面からサスカイト製の石鎚877が出土している。

造構の存在時期は、東側の造構面上の出土遺物より、Ⅲ-2様式期（弥生中期中葉）頃と推定される。

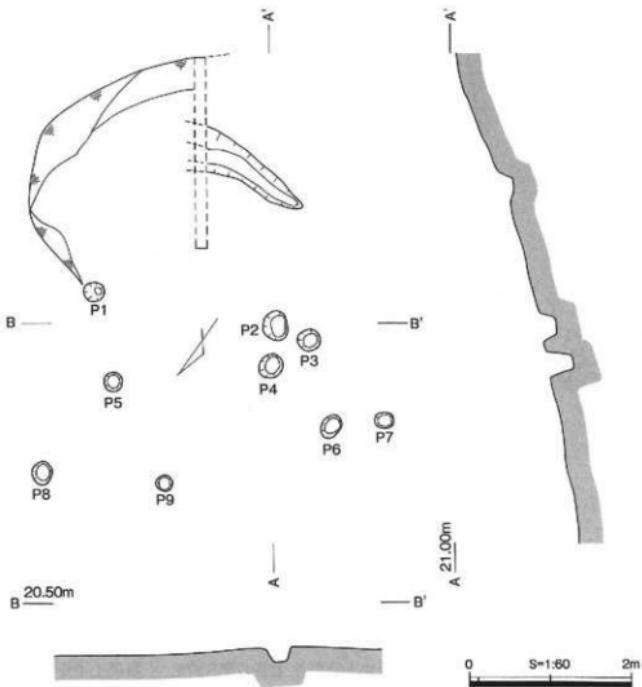
#### SB-08 出土遺物（第151図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

872は頸部に直線文・波状文・2条の突帯文が施される大形壺の頸部で、Ⅲ-1～2様式のものと思われる。873は弥生土器の蓋である。上部が平らな、つまみが付けられている。874は口縁端部に1条の凹線文と円形浮文が施された壺の口縁部～胴部付近で、Ⅲ-2様式のものと思われる。875は口縁端部に3条の凹線文と刻目を施す壺の口縁部で、Ⅳ-1～2様式のものと思われる。876は黒曜石製の何かの未製品であるが、石鎚の未製品である可能性も考えられるものである。877は凹基式のサスカイト製の石鎚である。

#### 小ピット群1（第152・153図）

環境外側の北西側斜面上で検出した小柱穴群である。南側の斜面上方においてはSB-08が検出されている。

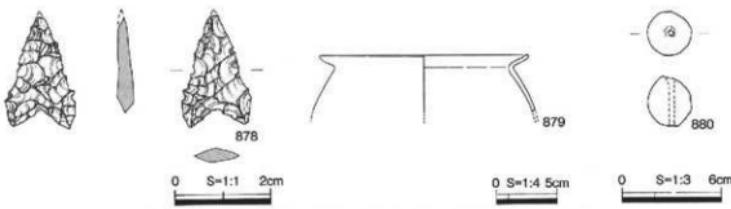
検出した小柱穴は9穴を数えるが、いずれも建物を想定させるような配列・規則性をもたないものであった。また、残存長約1.35m、幅25～55cm・深さ5～16cmの溝も検出しているが、その位置・残存状況から建物に付随する溝であったのか不明なものである。



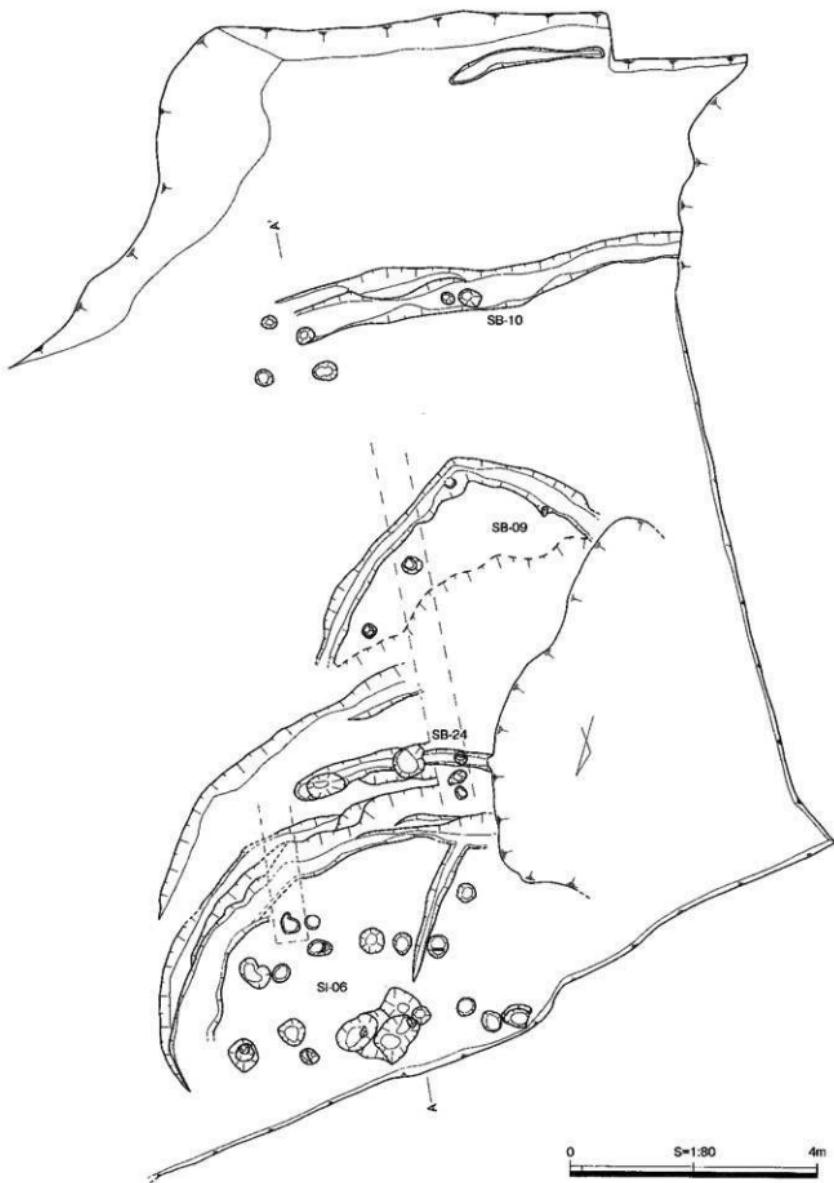
第152図 小ピット群1 平面図・断面図

小ピット群1 柱穴計測表

柱穴番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9
上面径 (cm)	23	30~35	26	29	22	24~27	18~23	25~27	20
下面径 (cm)	10	18~25	17	16~21	15	17~20	13~18	15~20	15
深さ (cm)	39	18	20	30	15	35	9	9	25
下面レベル (m)	19.50	19.77	19.74	19.56	19.61	19.39	19.64	19.48	19.33



第153図 小ピット群1 出土土器・土製品(土玉)・石器(石鏃)



第154図 SI-06, SB-24・09・10 分布図

遺物は、遺構面埋土層から弥生土器の壺片879・土玉880・黒曜石製の石鎚878が出土している。

遺構の存在時期は、遺構面埋土層の出土遺物より、Ⅲ-1～2様式期（弥生中期中葉）頃もしくは、それ以前とも考えられるが、時期をさせる想定土器が1片のみであることから、当該期の可能性があるということに留めておきたい。

**小ピット群1 出土遺物（第153図）**※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

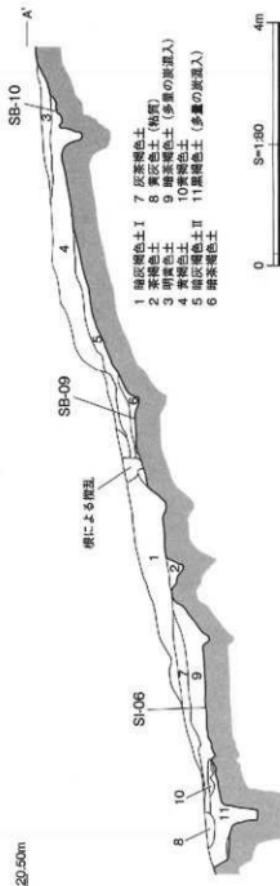
878は黒曜石製の石鎚である。形態は凹基式で先端は欠損している。879は施文がみられない壺の口縁部～肩部である。Ⅲ-1～2様式のものと思われる。880は祭祀用具と考えられている土玉である。当該土製品の本遺跡出土点数は14点を数えている。

#### SI-06（第156・157図）

環壕外側の北側斜面に作られた竪穴住居跡である。南東側の斜面上方ではSB-24・SB-09・SB-10等の掘立柱建物跡が検出されている。

このSI-06は、遺構の北側が調査範囲外となることから、遺構の全体を調査することできないものであったが、調査できた範囲内において、柱穴16穴、中央ピット3穴、壁体溝1条、周壁を検出している。なお、南北側の遺構面は流失、北～西側の遺構面は前述のとおり、調査区外であったことから、本来はこれ以上の柱穴が存在していたものと思われる。中央ピットはSI-06の中央に集中する形で3穴検出しており、中央ピット1が上端45～70cm・深さ34cm、中央ピット2が上端50～75cm・深さ23cm、中央ピット3が上端50～60cm・深さ44cmを測る。その他、中央ピット1と2どちらかに連結していくであろう壁体溝から延びる溝を1条検出している。この溝は、中央ピットに向かって傾斜していることから、中央ピットに雨水等を引き込むものと考えられる。なお、中央ピット1・2・3は重なるようにして存在することから、順次作り替えられたものと思われ、これによって竪穴住居の建替えも3回程度おこなわれたものと推測されるが、検出した柱穴から3回の建替えを確認することは出来ていない。このため、本報告ではあくまでも仮案として2期に分類出来得た主柱穴に基に、建替えの竪穴住居跡を推定してみた。

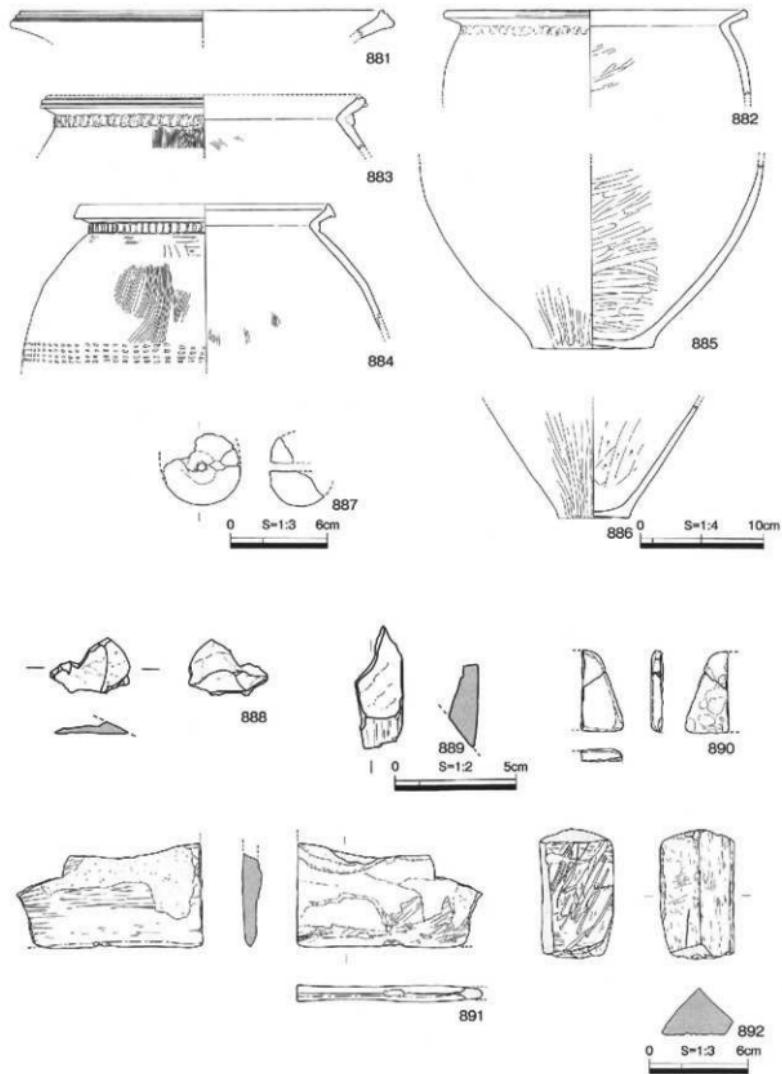
SI-06-1は、P1～P4を主柱穴と考えたものである。平面プランは円形もしくは、北東、南西が長い楕円形を呈するもので、平面規模は6.5m前後を測るものと推測される。想定される全柱



第155図 H区トレーンチ 土層断面図



第156図 SI-06 平面図・断面図



第157図 SI-06 出土土器・土製品（土玉）・石器

穴本数は6本程度で、中央ピットは中央ピット1～3のうち1穴を伴っていたものと考えられる。SI-06-2は、P5-P6-P7または、P5-P6-P8を主柱穴としたもので、平面プランはSI-06-1と同様を測り、想定される主柱穴は4穴程度であったと思われる。また、中央ピットは中央ピット1～3のうち1穴を伴っていたものと考えられる。なお、周壁の際（きわ）で検出している壁体溝は、SI-06-1・SI-06-2のどれに伴うものであったのかは不明である。また、この両者の新旧関係についても不明なものである。

遺物は、SI-06の遺構面（床面）上から弥生土器の壺片884、上玉887、砥石889・892、大型石包丁891が出土している。また、礎体溝内埋土中から弥生土器の底部886が出土している。その他、遺構面上埋土中から弥生土器の壺片881・壺片882・883、用途不明石器888・890が出土している。

遺構存続時期は、遺構面上及び、埋土中からの出土土器より、IV-1様式期（弥生中期後葉）頃もしくは、それ以前と推定される。

#### SI-06 出土遺物（第157図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

881は口縁端部に3条の凹線文を施す広口壺の口縁部で、882・884は頸部に指頭圧痕文帯を施す壺の口縁部～肩部である。882・883には口縁端部に2条の凹線文が、884には胴部に列点文が合わせて施されている。以上、IV-1様式のものと思われる。885・886は弥生土器の壺・壺・鉢の底部である。887は祭祀用具と考えられている上玉で、推定される直径は5cmを測り、本遺跡出土中では最大のものである。なお、当該土器の本遺跡出土点数は14点を数えている。888は研磨面をもつ石器の破片で、原体はなんであったのか不明なものである。889は砥石の破片と思われるものである。890は台形状を呈する石器で、用途不明なものである。891は大型石包丁で、刃部は研磨によって作り出されているものである。892は3面を使用した砥石である。なお、この掲載遺物図にみられる線は遺物検出時につけた現代の傷である。

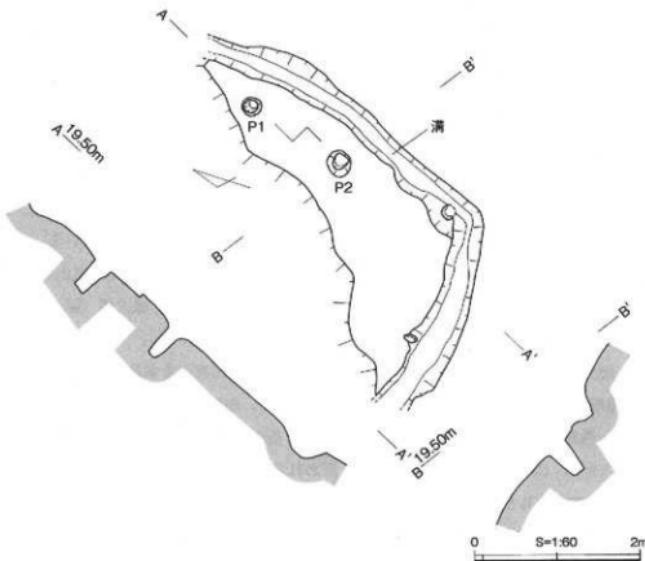
#### SB-09（第158～160図）

環壕外側の北側斜面を切って作られた加工段状の掘立柱建物跡と思われる遺構である。南側の斜面上方にSB-10、北側の斜面下方においては、SI-06が検出されている。

この加工段状の遺構面からは、溝と柱穴2穴を検出している。溝は、幅30～50cm・深さ4～7cmを測り、南東側でL字状に屈曲している。柱穴P1・P2は、この溝に沿う形で検出しており、これら柱穴間距離はP1-P2間1.25mを測る。また、遺構面は西側の大半が流失している状況であった。この遺構は、検出できた柱穴が2穴のみであることから、その全容は明らかでないが、溝と柱穴の位置的状況から掘立柱建物跡が存在していたものと考えておきたい。

遺物は、遺構面から黒曜石製の石鏃893、弥生土器の壺片898・899・壺片900・902～905・底部911～914が出土している。また、溝埋土中から弥生土器の壺片894・897・壺片906・鉢片907・底部916・917が出土している。その他、遺構面埋土中からは弥生土器の壺片895・896・壺片906・高坏片909・908・底部910・915が出土している。

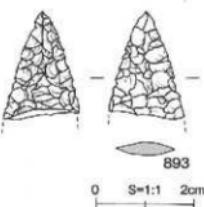
遺構の存在時期は、遺構面及び、溝埋土中の出土遺物より、IV-1様式期（弥生中期後葉）頃と推定される。なお、遺構面埋土中出土のIII-1～2様式期の上器は後述するSB-10に関する遺物と推測される。



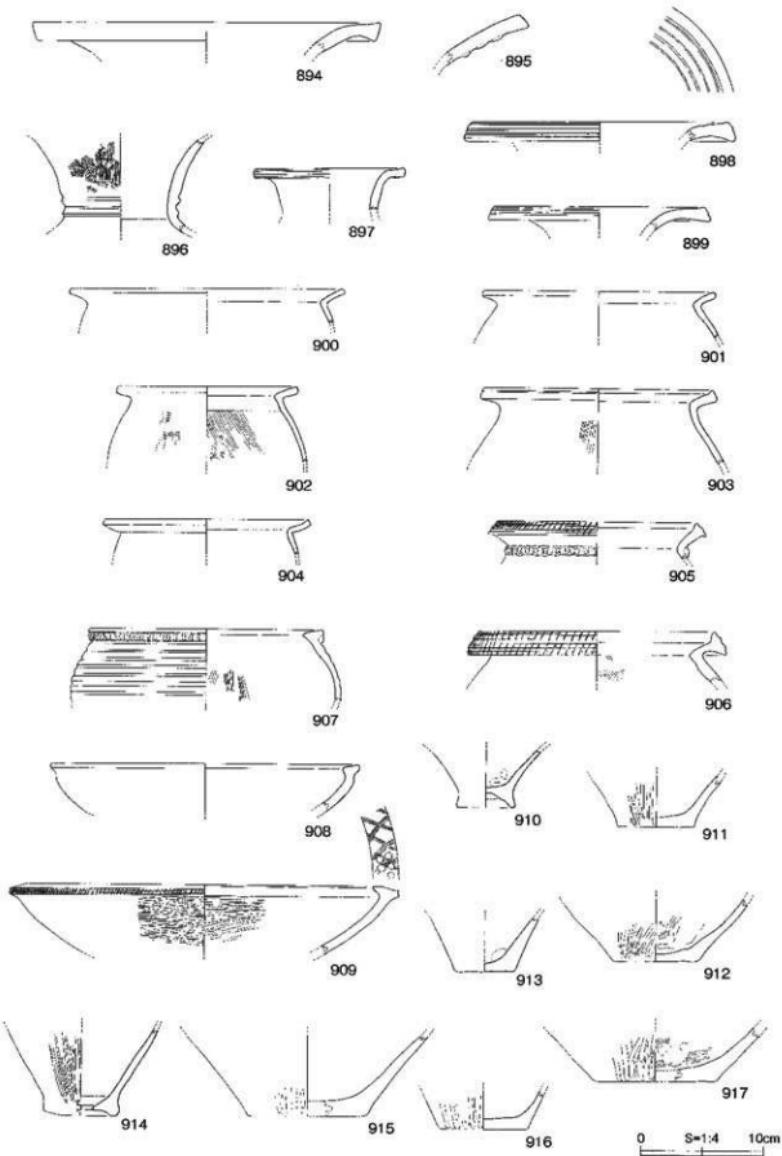
第158図 SB-09 平面図・断面図

SB-09 出土遺物 (第159・160図) ※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

893は黒曜石製の石鉢で、形態は基部が欠損しているため不明なものである。894・895は壺の口縁部で、895の口縁部外面には3条の突帯文が施されている。896は頸部に2条の突帯文を施した壺の頸部付近である。以上、Ⅲ-1～2様式のものと思われる。897～899は壺の口縁部～頸部・口縁部で、897・899の口縁端部には2条の凹線文、898の口縁端部と口縁内面には凹線文が施されている。以上、Ⅳ-1様式のものと思われる。900～904は甕の口縁部～肩部付近で、903の口縁端部には1条の凹線文が施されている。Ⅲ-2様式のものと思われる。905は口縁端部に2条の凹線文と刻目、頸部に指頭圧痕文帯が施された甕の口縁部～頸部で、Ⅳ-1様式のものと思われる。906は口縁端部に3条の凹線文と刻目が施された甕の口縁部～肩部で、Ⅳ-2様式のものと思われる。907は口縁端部が肥厚し、頸部に指頭圧痕文帯、肩部に凹線文を施す鉢の口縁部～胴部で、Ⅳ-1様式のものと思われる。909は口縁端部が肥厚し、口縁端部上面に斜格子文と円形浮文、口縁端部外面の刻目が施された高环の坏部である。Ⅲ-1様式のものと思われる。908は口縁端部が肥厚し平坦面となっている高环の坏部で、Ⅲ-1～2様式のものと思われる。910～917は弥生土器の壺・甕・鉢の底部である。このうち、910は上げ底状で脚のような台が付いている。また、914の底には円孔があげられている。



第159図 SB-09 出土石器 (石錐)



第160図 SB-09 出土土器

### SB-10 (第161・162図)

環境外側の北側斜面を切って作られた溝を伴う加工段状の遺構である。北側の斜面下方においては、SB-09が検出されている。

この加工段状の遺構面からは、溝と柱穴6穴 (P1~P6) を検出している。溝は、幅30~65cm・深さ5~18cmを測り、北東-南西に直線状に延びているもので、建物に付随する雨落ち溝とも推定できるものである。なお、この溝は南西側においては遺構面と共に崩落し、北東側ではその痕跡が徐々に消えていく状態であった。柱穴は配列に規則性がみられず、ランダムに存在しているものである。この遺構からは、溝に伴う柱穴を明らかにすることはできなかったが、溝、柱穴が共存することから掘立柱建物跡の存在を想定しておく。

遺物は、遺構面上から黒曜石製の石鎚の一部922、P2埋土中から弥生土器の壺片918が出土している。また、遺構面埋土中から弥生土器の壺片919・920・底部921、鉄劍形石劍の完形品923が出土している。

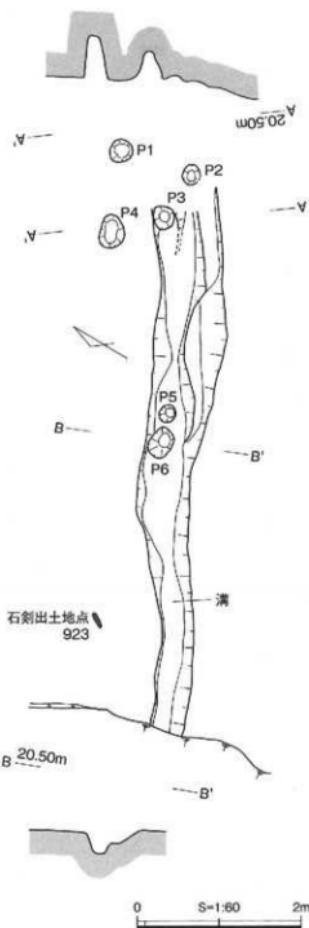
遺構の存在時期は、P2埋土中及び、遺構面埋土中の出土遺物より、III-1~2様式期（弥生中期中葉）頃もしくは、それ以前と推定される。

**SB-10 出土遺物 (第162図)** ※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

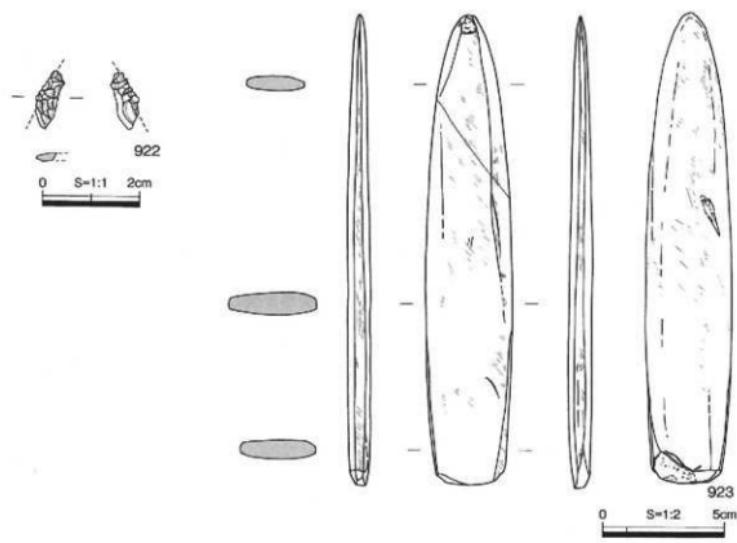
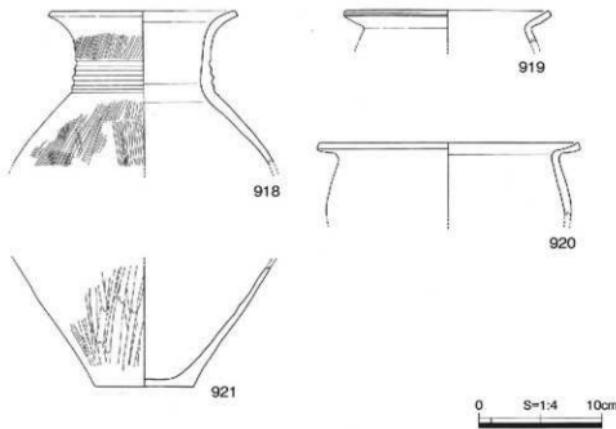
918は頸部に3条の突帯文を施す壺の口縁部～肩部で、920は施文がみられない壺の口縁部～胴部附近である。以上、III-1~2様式のものと思われる。919は口縁端部に1条の凹線文を施す壺の口縁部～肩部で、III-2様式のものと思われる。921は弥生土器の壺・甕・鉢の底部である。922は黒曜石製の石鎚の側刃部分である。923は頁岩の鐵劍形磨製石劍の完形品である。両側刃には刃を作るための研磨がみられるが、側面は平坦に研磨された刃潰しが先端近くまで作られていることから、先端以外は刃を成していない。表裏は共によく磨かれているもので、断面形状は上辺・下辺が長い六角形状を呈している。

**SI-06・SB-09・10周辺 出土遺物 (第163・164図)**

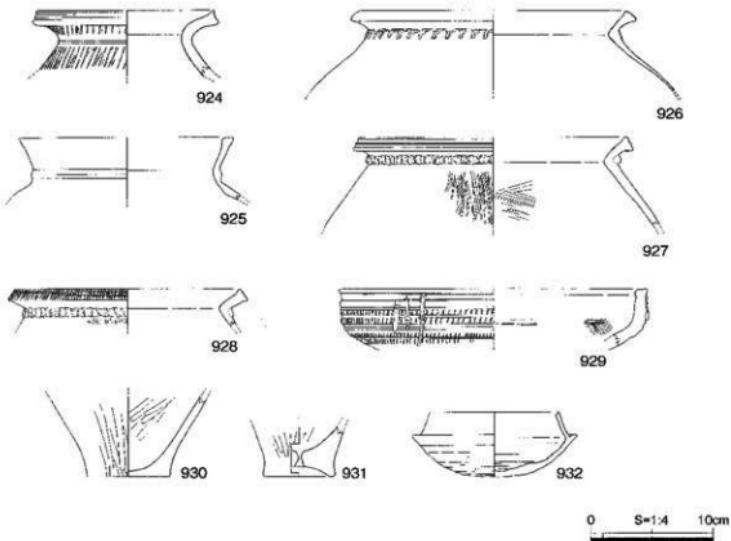
SI-06・SB-09・10周辺からは遺構外の遺物も多く出土している。ここでは、図化可能なこれら出



第161図 SB-10 平面図・断面図



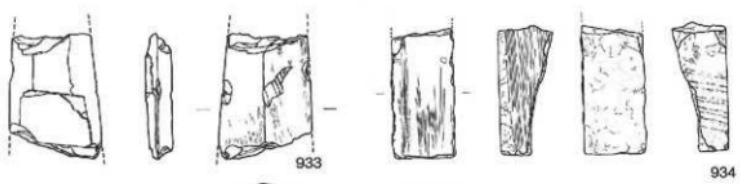
第162図 SB-10 出土土器・石器（石劍・石鎌）



第163図 SI-06、SB-09・10周辺 出土土器

土遺物をあげておく。※遺物の法量・出土地等の詳細は遺物観察表を参照。

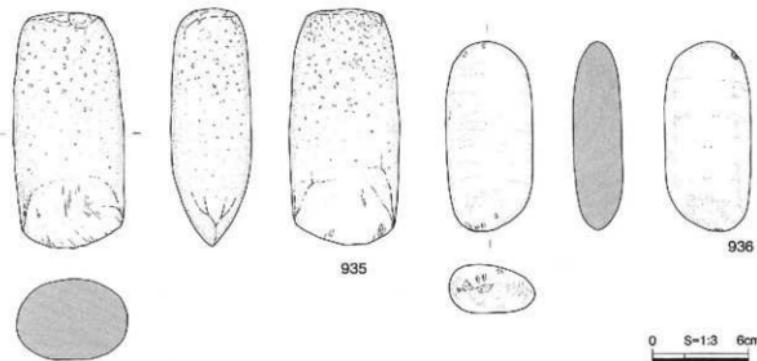
925は頸部に突帯文が施された直口壺の口縁部～肩部で、Ⅲ-2様式のものと思われる。924は口縁端部に2条の凹線文を施す壺の口縁部～頸部で、Ⅳ-1～2様式のものと思われる。926～928は頸部に指頭圧痕文帯を施す壺の口縁部～肩部である。927には口縁端部に2条の凹線文、928には口縁端部に2条の凹線文と刻目が合わせて施されている。以上、Ⅳ-1様式のものと思われる。929は口縁外面に凹線文・刻目・粘土紐の貼付が施された高坏の坏部で、Ⅳ-1～2様式のものと思われる。930・931は弥生上器の壺・甕・鉢の底部である。931は上げ底状で底に円孔があけられている。932は須恵器の坏身で、受部の立ち上がりが高く内傾している。出雲1～2期相当のものと思われる。933は頁岩の鉄剣形磨製石剣の一部である。断面は菱形を呈し、中央に直線的な鎬が作り出されている。934は砥石と思われるもので、片面に硬質なものを磨った痕跡がみられるものである。935は船刃石斧の完形品で、刃部には使用痕がみられ、柄の装着痕らしきものも認められる。936は一部に敲打痕がみられる敲石である。937はサヌカイト製の石鎌である。形態は四基式で、基部の抉りが大きいものである。



0 S=1:2 5cm

934

933



0 S=1:3 6cm

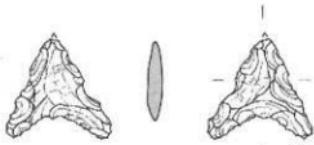
936

935

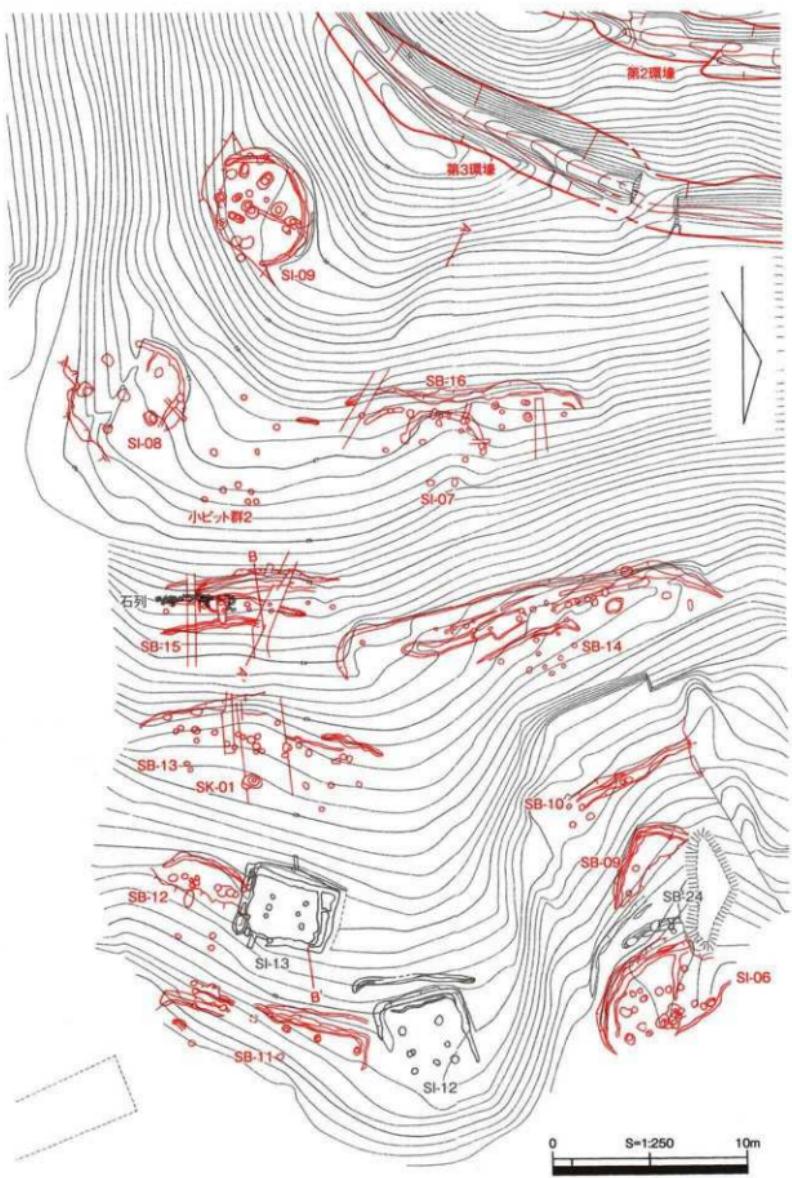


0 S=1:1 2cm

937

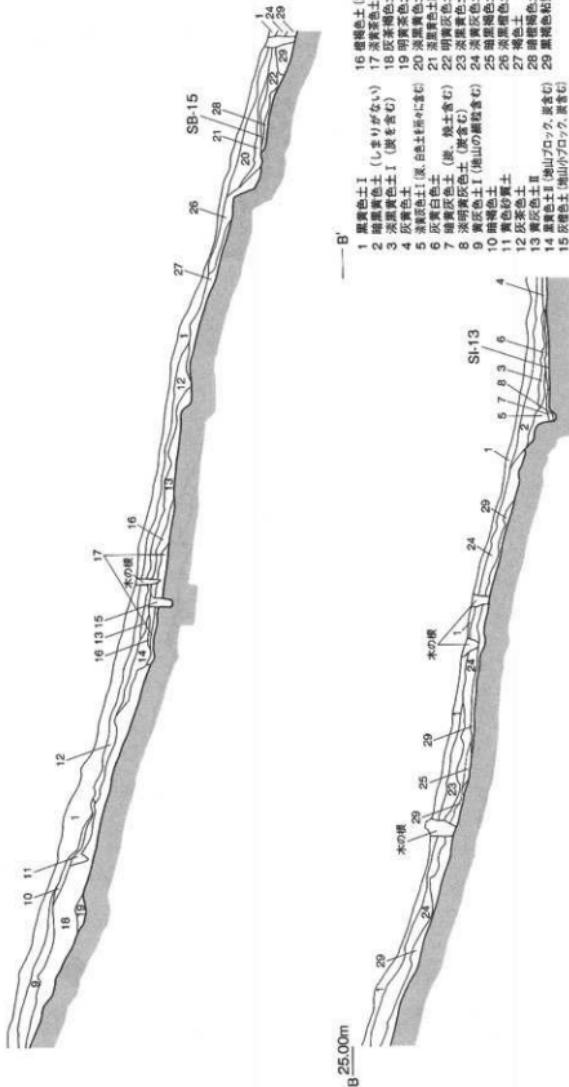


第164図 SI-06、SB-09・10周辺 出土石器

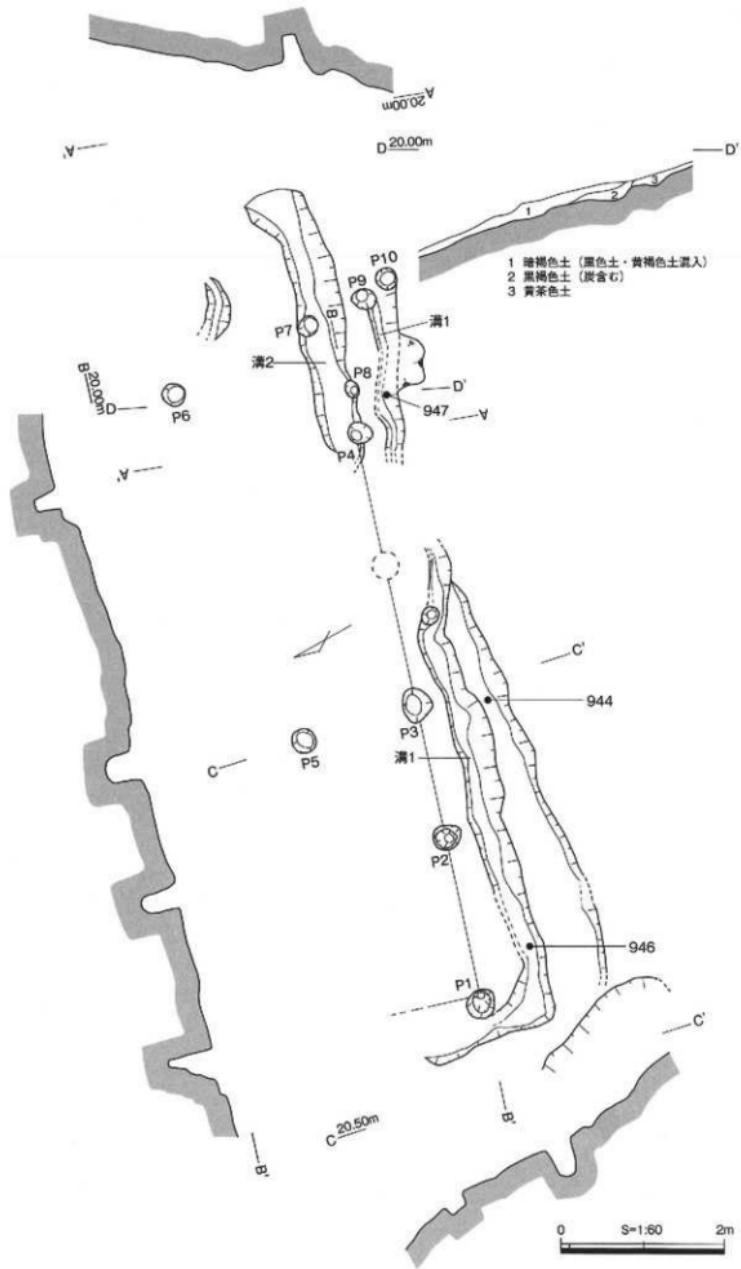


第165図 北側環壕外側造構 分布図（弥生時代）2

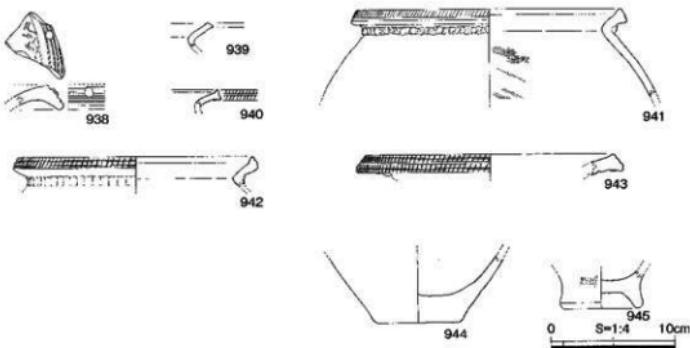
A 31.00m



第166図 I区 トレンチ 土層断面図



第167図 SB-11 平面図・土層断面図



第168図 SB-11 出土土器

#### SB-11 (第167~169図)

山頂部から派生する北側尾根の環壕外側の緩斜面を加工段状に切って作られた、掘立柱建物跡である。南東側の斜面上方においては、SB-12が検出されている。

この加工段状の遺構面からは、溝2条(溝1・2)と柱穴10穴(P1~P10)を検出している。溝1は、幅20~50cm・深さ3~7cmを測るもので、東側と西側に分かれて検出されたが、当初は連続する溝であったように思われる。形状は東西に直線状に延び、西側で斜面下方に向かって90°折れ曲がるものである。この溝1に平行して直線状に並ぶ掘立柱建物の桁行部分と思われる柱穴(P1~P4)が確認できることから、溝1は掘立柱建物跡に付随する雨落ち溝と考えられる。検出した柱穴の柱穴間距離はP1~P2間1.95m、P2~P3間1.7m、P3~P4間3.4mを測るが、P3~P4間には柱穴がもう1穴存在していたものと考えられる。なお、梁間部分の柱穴は、北側の斜面下方の遺構面が斜面に沿って流失していたことなどから検出することはできていない。また、建物規模は、桁行4間(7.05m)、もしくは4間以上×梁間1間以上であったと考えられる。その他、東側において、幅45~55cm・深さ3~8cmを測る溝2と、溝1の西側の斜面上方(南側)において、溝1と方向を異なる段を検出している。溝2は、これに伴う柱穴が確認されていないことから、建物に付隨した雨落ち溝であったのか詳細は不明なものである。また、土壙断面からは溝1の後に作られたことが分かっている。西側の溝1の斜面上方(南側)で確認した段については、SB-11に付隨する溝1と方向を違えていることから、別の遺構であったとも考えられるが、これに伴う柱穴等が検出されていないことより詳細は不明なものである。

遺物は、溝1埋土中から蛤刃石斧946、柱状片刃石斧947、溝2埋土中から弥生土器の壺片938・甕片939・942、西側の溝1の斜面上方(南側)で確認した段上から弥生土器の底部944が出土している。また、表土中から弥生土器の壺片940・943、埋土中から弥生土器の甕片942・底部945が出土している。

溝2の存在時期は、溝2埋土中の出土遺物より、Ⅲ-2~Ⅳ-1様式期(弥生中期中葉~中期後葉)頃もしくは、それ以前と推定される。また、SB-11の存在時期はSB-11に関する出土遺物が

溝1埋土中の石斧のみであることから、明確な時期を示すことは難しいが、溝1が溝2より前段階の遺構であることから、Ⅲ-2～Ⅳ-1様式期（弥生中期中葉～中期後葉）頃以前と解釈できる。

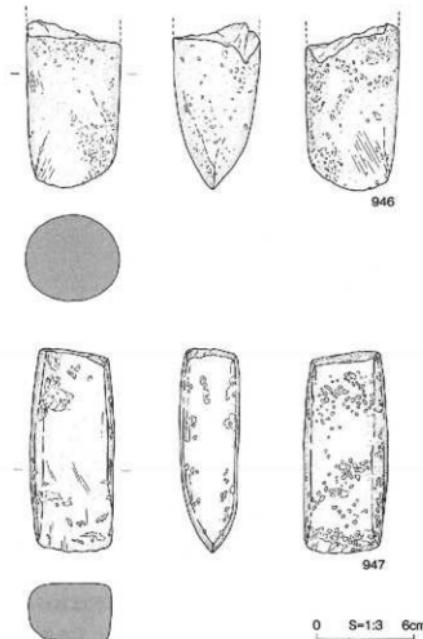
**SB-11 出土遺物（第168・169図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。**

938は口縁端部外面に凹線文と円形浮文、口縁部内面に波状文を施した壺の口縁部である。943は口縁端部に3条の凹線文と刻目が施された壺の口縁部である。これらはⅣ-1様式のものと思われる。939は施文がみられない壺の口縁部～頸部で、Ⅲ-2様式のものと思われる。940は口縁端部に1条の凹線文と刻目が施された壺の口縁部である。941・942は口縁端部に凹線文と刻目、頸部に指頭圧痕文帯を施した壺の口縁部～肩部・口縁部～頸部である。以上、Ⅳ-1様式のものと思われる。944・945は弥生土器の壺・壺・鉢の底部である。このうち、945は上げ底状となっているものである。946は蛤刃石斧の欠損品で、刃部には使用痕がみられるものである。947は両刃状の柱状片刃石斧の完形品である。

**SB-12（第170・171図）**

山頂部から派生する北側尾根の環壕外側の緩斜面を切って作られた、加工段状の掘立柱建物跡と思われるものである。南側の斜面上方ににおいてはSB-13が、北西側の斜面下方ではSB-11が検出されている。

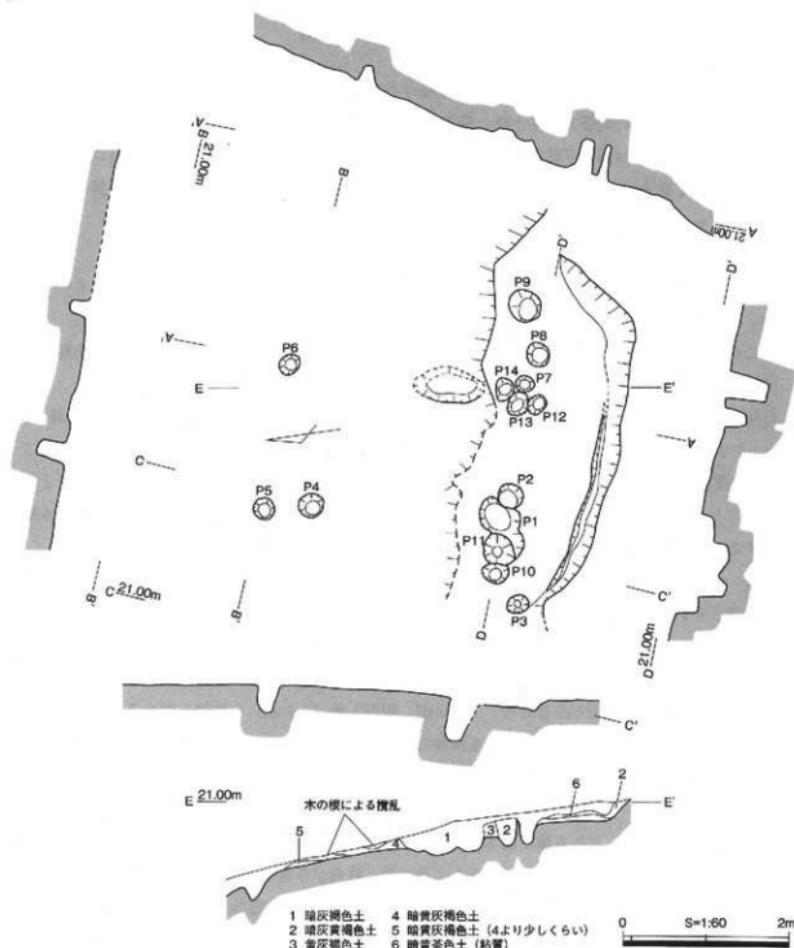
この加工段状の遺構面からは、溝と柱穴14穴（P1～P14）を検出している。溝は、斜面を段状に切った遺構面の際（きわ）に作られており、建物に付随する雨落ち溝とも考えられる。溝の法量は幅10～15cm・深さ2～3cmを測る。柱穴は上端径20～53cm・深さ20～52cmと様々なもので、その多くは東西方向に直線状に並んでいるものである。また、遺構面は北側において流失していることが確認されている。この遺構は、柱穴と雨落ち溝とも考えられる溝が共存することから、掘立柱建物跡と推測されるが、遺構面を作り出すために加工された段は円形に統く気配も感じられることから、堅穴住居跡も想定しておく必要があるのかもしれない。なお、検出した柱穴は、遺構面がほぼ保たれている場所にあるもの（P1～P3・P7～P14）と遺構面が流失している北側にあるもの（P4～P6）とに分かれる形で検出おり、この遺構が掘立柱建物跡と想定するならば、北側にある柱穴は別の遺構に伴うものとも考えられる。



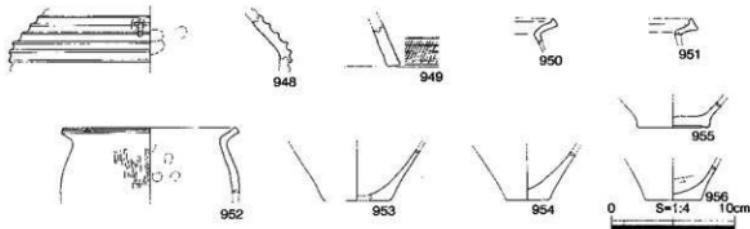
第169図 SB-11 出土石器（石斧）

遺物は、遺構面から弥生土器の甕片950・951・底部953～956、P5埋土中から弥生土器の高坏片949、P12埋土中から弥生土器の無頬甕片948が出土している。また、遺構面埋土中から弥生土器の甕片952が出土している。

遺構の存在時期は、遺構面及びP5・P12埋土中の出土遺物より、Ⅲ-2様式期（弥生中期中葉）頃もしくは、それ以前と推定される。



第170図 SB-12 平面図・土層断面図



第171図 SB-12 出土土器

#### SB-12 出土遺物 (第171図) ※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

948は肩部に多重の突帯文と粘土紐の貼り付けが施された無頸壺の肩部で、Ⅲ-1～2様式のものと思われる。949は脚部下部に凹線文と斜線文を施した高壺の脚部である。950・951は壺の口縁部で、Ⅲ-2様式のものと思われる。952は口縁端部に2条の凹線文を施した壺の口縁部～胴部付近で、IV-1様式のものと思われる。953～956は弥生土器の壺・甕・鉢の底部である。

#### SB-13 (第172～175図)

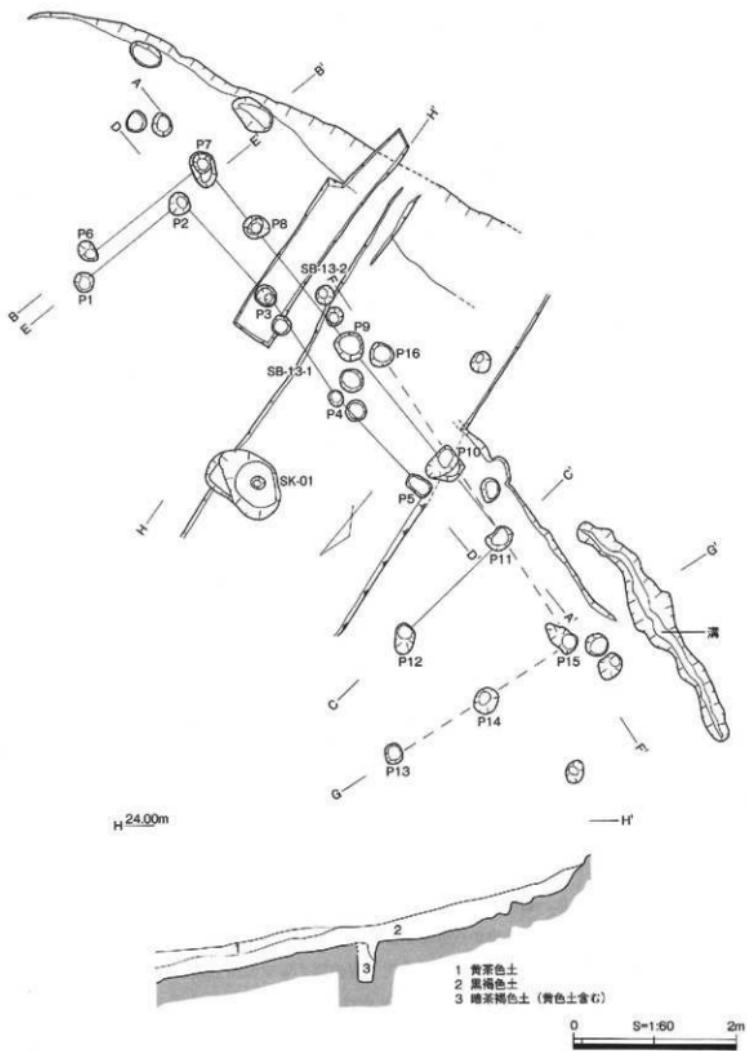
山頂部から派生する北側尾根の環壕外側の緩斜面に作られた、掘立柱建物跡と思われるものである。南側の斜面上方ににおいてはSB-15が、北西側の斜面下方ではSB-12が検出されている。

この遺構面からは、溝と柱穴28穴 (P1～P16等) を検出している。柱穴は、掘立柱建物跡の柱穴と思われ、その配列状況から2～3回の建て直しがおこなわれた可能性が考えられる。

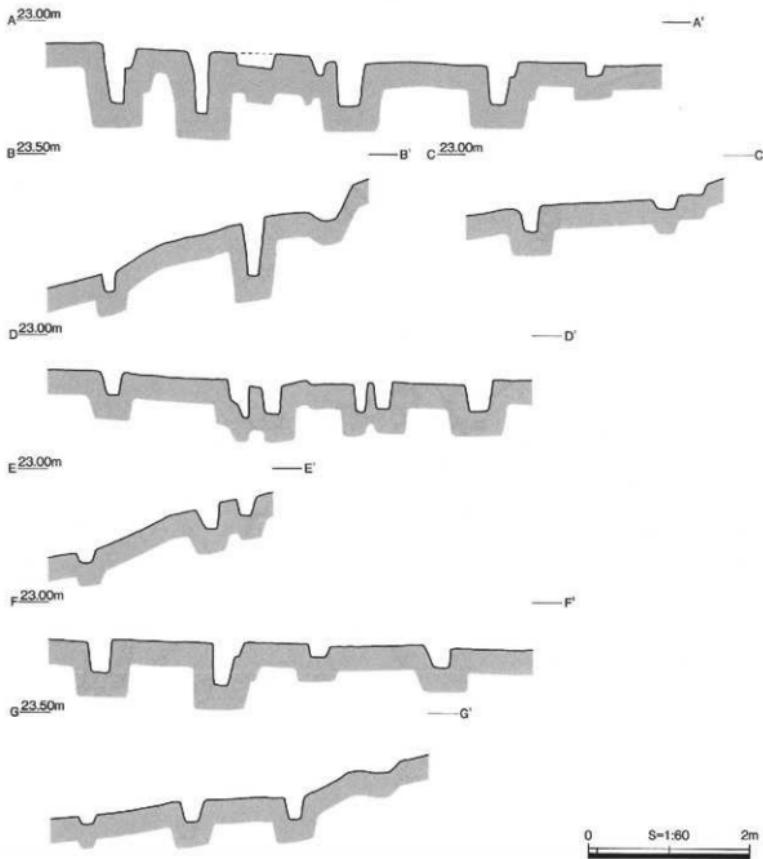
SB-13-1はP1～P5を柱穴にもつ掘立柱建物跡と推測されるもので、P1-P2が梁間、P2～P5が桁行になり得るものである。柱穴間距離はP1-P2間1.55m、P2-P3間1.55m、P3-P4間1.5m、P4-P5間1.5mを測る。建物規模は、北側の遺構面が流失していることも考えられることから、その全容は明らかではないが、桁行3間(4.55m)以上×梁間1間以上の建物を想定することができる。なお、この建物跡は雨落ち溝を付随していない。

SB-13-2はP6～P12を柱穴にもつ掘立柱建物跡と推測されるもので、P6-P7・P11-P12が梁間、P7-P11が桁行になり得るものである。柱穴間距離はP6-P7間1.8m、P7-P8間1.05m、P8-P9間1.85m、P9-P10間1.85m、P10-P11間1.2m、P11-P12間1.7mを測り、桁行の外側(梁間側)の柱穴間は狭いものとなっている。建物規模は、北側の遺構面が流失していることから、その全容は明らかなものではないが、桁行4間(5.95m)×梁間1間以上の建物を想定することができる。なお、この建物跡も雨落ち溝を付随していない。これらの他、想定出来得る掘立柱建物跡として、P13-P14-P15を梁間、P15-P11-P10-P16を桁行とするものも考えられたが、P10・P11がSB-13-2の柱穴と兼ねる格好になることから、建物の可能性があるとだけに留めておきたい。なお、これら建て直された掘立柱建物跡の新旧関係については、柱穴が同一面で検出されていること等から不明なものである。その他、柱穴が存在する遺構面の斜面上方ににおいて、幅22～50cm・深さ3～10cmの溝を検出しているが、これが建物に付随するものか、詳細は不明である。

遺物は、遺構面から弥生上器の底部964、P7埋土中から弥生土器の壺片958、溝埋土中から蔽石



第172図 SB-13、SK-01 平面図・土層断面図



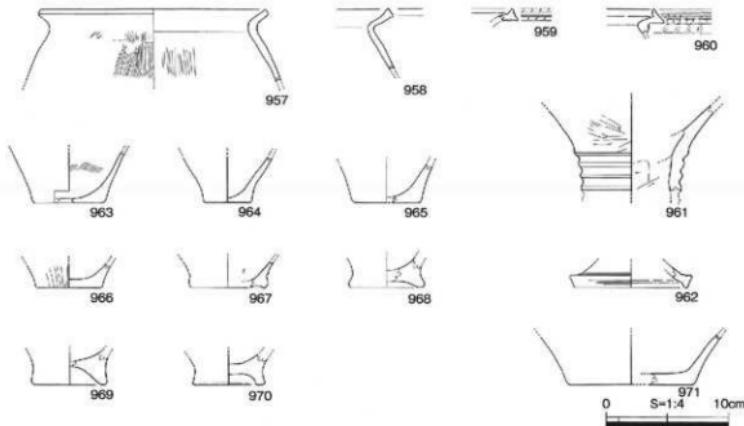
第173図 SB-13 断面図

972が出土している。また、遺構面上一層の第2層中から弥生土器の壺片957・960・高坏片962・底部963・965~969、その他、埋土中から弥生土器の高坏片961・底部970・971が出土している。

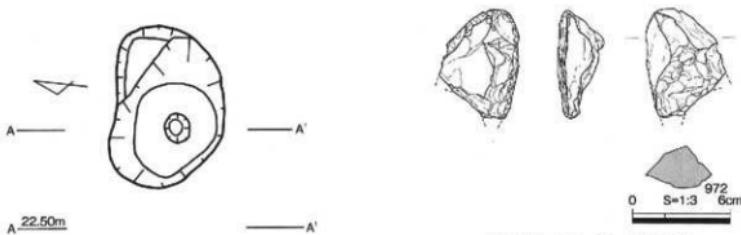
遺構の存在時期は、P7埋土中及び、遺構面上一層の第2層中の出土遺物より、III-2~IV-2様式期（弥生中期中葉～中期後葉）頃もしくは、それ以前と推定される。

#### SB-13 出土遺物（第174・175図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

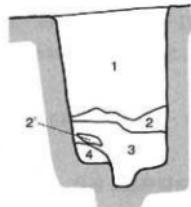
957・958は施文がみられない壺の口縁部～肩部で、III-2様式のものと思われる。959は口縁端部に2条の凹線文と刻目、960は口縁端部に凹線文、頸部に指頭圧痕文帯が施された壺の口縁部である。IV-1様式のものと思われる。961は筒部に4条以上の凹線文が施された高坏の筒部付近で、



第174図 SB-13 出土土器



第175図 SB-13 出土石器



1 黒色土(炭少々含む) 3 黑褐色土  
2 結構褐色土 I 4 褐黃褐色土  
2' 増青褐色土 II (地山ブロック含む)

第176図 SK-01 平面図・土層断面図

962は高坏に脚部である。これらはIV-1～2様式のものと思われる。963～971は弥生土器の壺・甕・鉢の底部である。このうち、963の底には円孔があけられており、968～970は上げ底状で脚のような台が付けられている。972は側面に敲打痕がみられる敲石と思われるものである。

#### SK-01 (第172・176図)

SB-13の柱穴検出面と同じ面で検出した楕円形を呈する土坑である。この土坑は、上端径0.7～1m・下端径(底径)0.5～0.6m・深さ0.95～1mを測り、底中央に上端径約15cm・下端径(底径)約8cm・深さ14cmの円形の穴が作られている。土坑の形状・深さ及び、底に円形穴をもつ特徴から、落とし穴と考えられるものである。

遺物は、埋土中からの出土はみられないものであった。遺構存在時期は、出土遺物が皆無であったことから明らかな時期は示せないが、これと類似する各地のこれまでの検出例より、縄文時代と推測される。

#### SB-14 (第177～180図)

山頂部から派生する北側尾根の環壕外側の斜面を段状に切って作られた、掘立柱建物跡と思われるものである。南側の斜面上方ににおいてはSB-16・SI-07が、同一斜面の東側ではSB-13・15が検出されている。

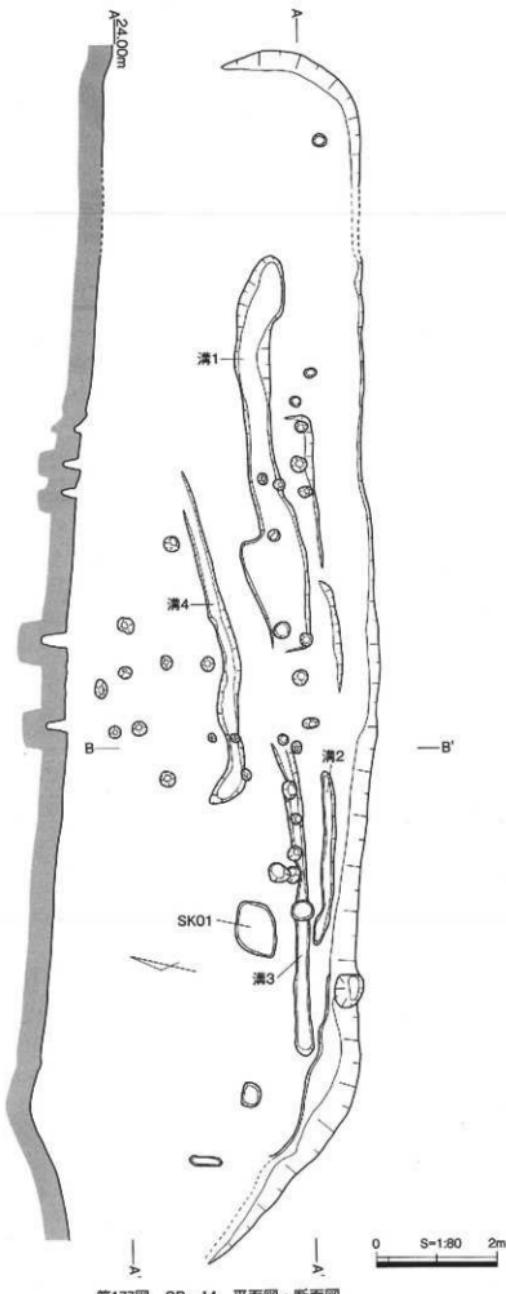
この加工段状の遺構面は、東西約20m、南北約5mに及ぶ広大なものである。また、北側(斜面下方側)においては、遺構面(床面)の流失がみられることから、南北の遺構面はこれ以上を測るものと考えられる。この遺構面内からは、溝4条(溝1～4)・柱穴35穴・土坑(SK01)を検出している。溝は、溝1が幅40～105cm・深さ3～15cm、溝2が幅15～20cm・深さ4～9cm、溝3が幅10～25cm・深さ6～14cm、溝4が幅25～35cm・深さ7～17cmを測り、溝4→溝3→溝2と作り直されていったことが分かっている。柱穴は、建物を想定させるような配列がみられないもので、ランダムに存在している。この場所では、柱穴から建物を想定することはできないが、雨落ち溝とも考えられる溝が4条存在していることから建替えを含め、掘立柱建物が4棟程度作られていたものと解釈しておきたい。また、溝3の北側において、上端径65～68cm、下端径55～60cm、深さ2～10cmの土坑(SK01)を検出しているが、その用途・性格については不明である。

遺物は、遺構面上埋土中から弥生土器の壺片973～976・甕片977～979・高坏片980・981・底部982、黒曜石製の石鎌984・砥石985、旧石器時代の台形様石器とも思われる石器986が出土している。

遺構の存在時期は、遺構面上埋土中の出土遺物より、III-2～IV-2様式期(弥生中期中葉～中期後葉)頃もしくは、それ以前と推定される。

#### SB-14 出土遺物 (第179・180図) ※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

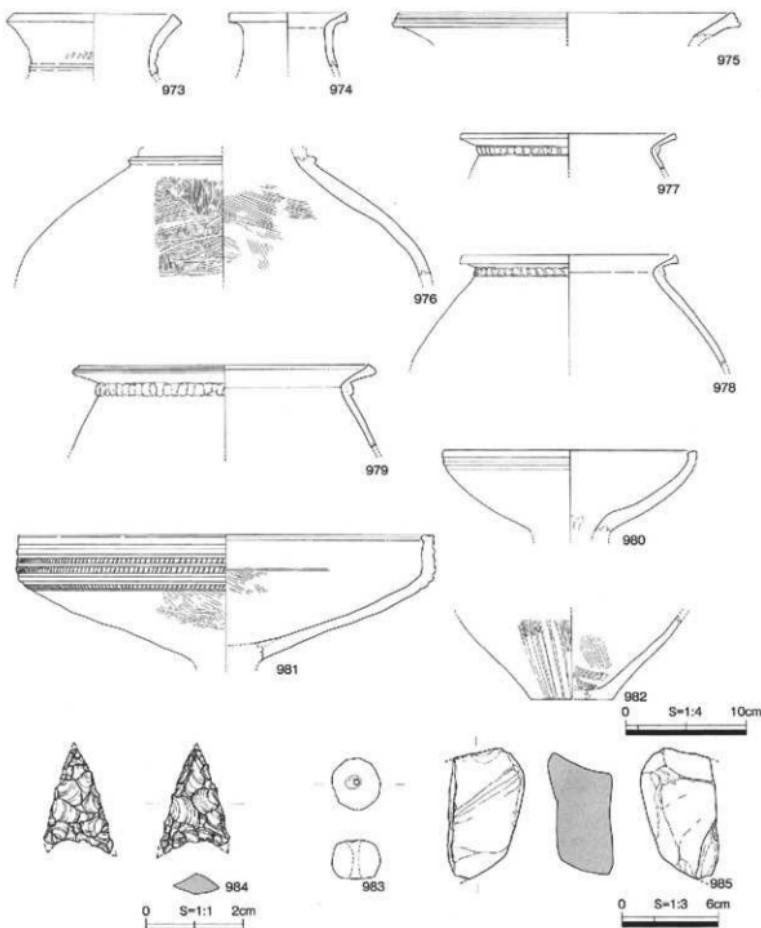
973は頭部に突帯文を施した壺の口縁部～頸部で、974は口縁部が強く外反し、頸部が直線状の壺の口縁部～頸部である。また、976は頭部に凹線文を施した壺の頸部～胸部付近である。以上、III-1～2様式のものと思われる。975は口縁端部に2条の凹線文を施した壺の口縁部で、IV-1様式のものと思われる。977～979は頭部に指頭圧痕文帯を施す壺の口縁部～肩部で、979は口縁端部に2条の凹線文も施されている。977はIII-2様式、978はIII-2～IV-1様式、979はIV-1様式のものと思われる。980は坏部が内湾し、口縁外面に2条の凹線文を施す高坏の坏部で、IV-1様



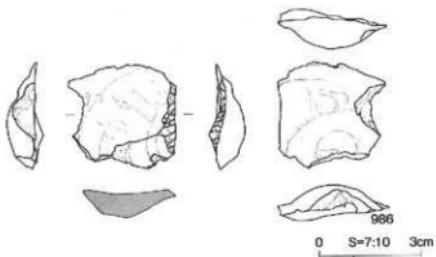
第177図 SB-14 平面図・断面図



第178図 SB-14 土層断面図



第179図 SB-14 出土土器・土製品（土玉）・石器



第180図 SB-14 出土旧石器

る。985は砥石である。片面に三角状に砥がれた痕が残っている。986は旧石器時代の珪質岩製の台形様石器と思われるものである。<sup>33</sup>

#### SB-15 (第181~183図)

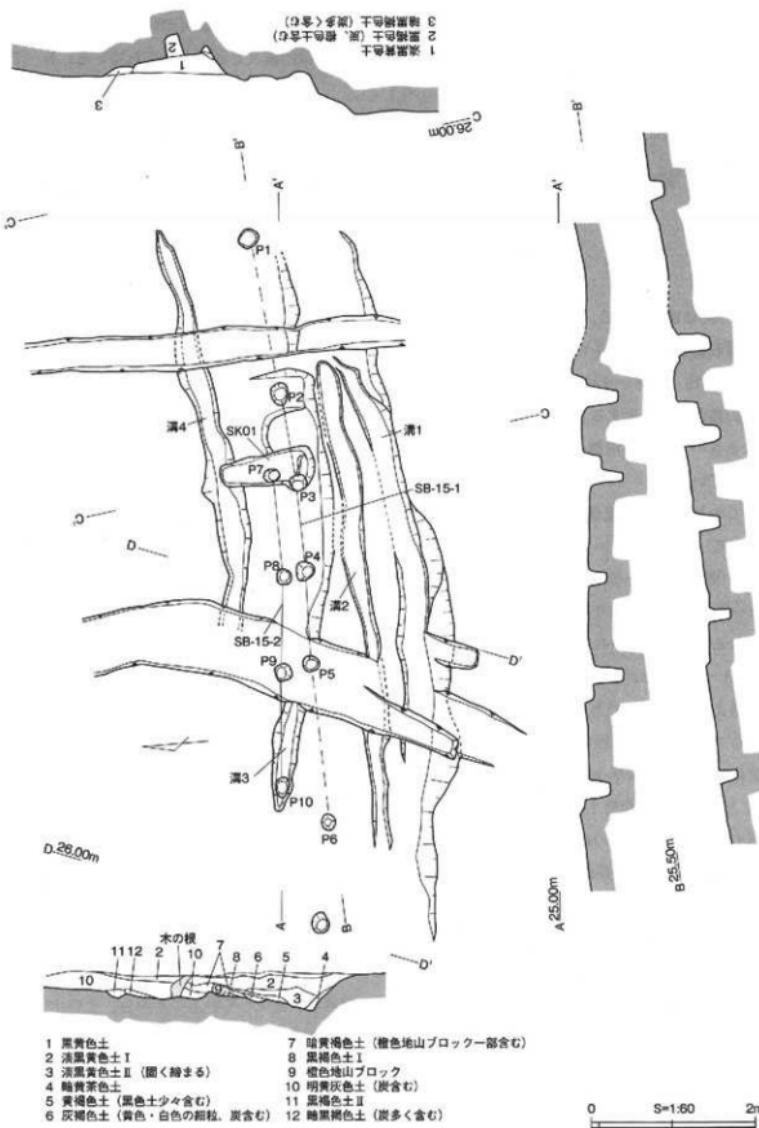
山頂部から派生する北側尾根の環壕外側の緩斜面を段状に切って作られた、掘立柱建物跡と思われるものである。南側の斜面上方においては小ピット群2が、同一斜面の西側ではSB-14が検出されている。

この加工段状の遺構面からは、溝4条(溝1~4)・柱穴10穴(P1~P10)・長方形状の土坑(SK01)を検出している。溝1は幅20~35cm・深さ3~5cm、溝2は、幅20~30cm・深さ3~8cm、溝3は幅25~30cm・深さ5cm、溝4は幅25~33cm・深さ5~12cmを測るもので、溝4→溝3→溝2→溝1と作り直されたことが分かっている。また、検出した柱穴は掘立柱建物跡の柱穴にあたると推測され、2回程度の建て直しがおこなわれたものと思われる。

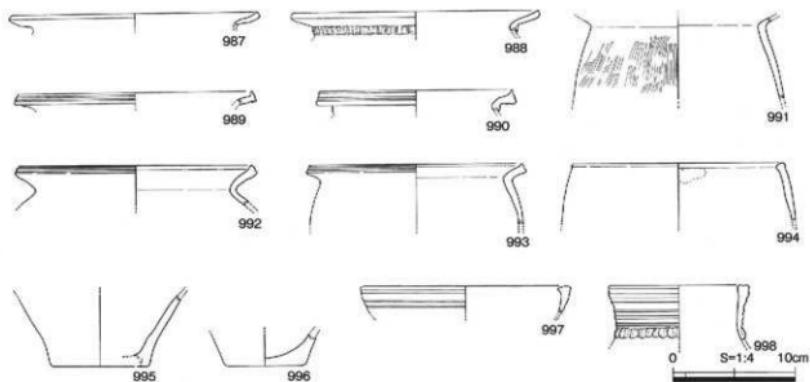
SB-15-1は、直線上に並ぶP2~P5を桁行とした、雨落ち溝の溝1を付随する掘立柱建物跡と考えられるものである。土層断面からは、この場所に最後に作られた建物遺構であることも分かっている。柱穴間距離はP2-P3間1.15m、P3-P4間1.1m、P4-P5間1.1mを測る。建物規模は、北側の遺構面が流失していることから、その全容は明らかなものではないが、桁行3間(3.35m)以上×梁間1間以上の建物を想定することができる。なお、P2の東側のP1とP5の西側のP6がP2~P5の桁行と直線上に並ぶことから、P1・P6を含めた桁行5間の建物も想定出来得るが、柱穴間距離が他の2倍の長さになることから可能性が考えられるものとだけに留めておく。

SB-15-2は、P7~P10を桁行とした掘立柱建物跡と考えられるものである。調査状況からSB-15-1の前段階の遺構であることが分かっている。柱穴間距離はP7-P8間1.25m、P8-P9間1.2m、P9-P10間1.4mを測る。建物規模は北側の遺構面が流失していることから、その全容は明らかでないが、桁行3間(3.85m)以上×梁間1間以上の建物が想定される。なお、同一遺構面との把握は出来ていないが、P7~P10の桁行との位置関係から溝2が当該建物の雨落ち溝になる可能性が高いものと思われる。また、溝3は、西側で長さ1.4mを測出しているが、当初は東側でL字状に屈曲する加工段跡まで続いていたものと推測される。溝3・4は、溝1・2と同様、建物に付随する雨落ち溝とも考えられるが、これに伴う柱穴が検出されていないことから詳細は不明なもの

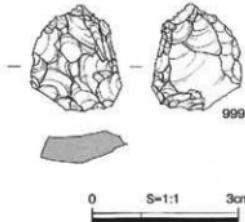
式のものと思われる。981は口縁部が屈曲し直立する高杯の坏部で、口縁外面には凹線文と刻目が施されている。IV-2様式のものと思われる。982は弥生上器の壺・甕・鉢の底部で、全体に煤の付着がみられるものである。984は四基式の黒曜石製の石鑿である。983は上下がやや平坦になっている土玉である。土玉は通常、祭祀用具と考えられるもので、当該土製品の本遺跡出土点数は14点を数える。



第181図 SB-15 平面図・土層断面図



第182図 SB-15 出土土器



第183図 SB-15 出土石器

のである。その他、隅丸長方形状の土坑（SK01）を本遺構の中央付近で検出している。長軸約110cm・短軸30～53cm・深さ8～30cmを測り、底面は平坦なものである。溝3・P3・P7の切れ合いで、この場所に作られた最後の遺構であることが分かっている。このSK01は、一見すると土壤墓にも見えるが、調査前の地形状況からこれに関わるマウント等はないことが、斜面に立地すること、また、本遺跡内での弥生土壤墓は見られないこと等から、これを土壤墓と想定するには至っていない。いずれにしても詳細は不明と言わざるを得ないものである。

遺物は、SB-15-1の遺構面上一層の第3層中から弥生土器の壺片992～994・底部995・996、SB-15-1の遺構面上二層の第2層中から弥生土器の壺片987～991が出土している。また、溝4埋土中の第10層からは、弥生土器の高坏片997・直口壺片998、表土から黒曜石の石器未製品が出土している。

遺構の存在時期は、SB-15-1が遺構面上埋土中の出土遺物より、Ⅲ-2～Ⅳ-1様式期（弥生中期中葉～中期後葉）頃もしくは、それ以前、溝4がⅣ-1様式期（弥生中期後葉）頃もしくは、それ以前と推定される。

#### SB-15 出土遺物（第182・183図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

987・988は壺の口縁部で、988には頸部に指頭圧痕文帯が施されている。これらはⅢ-2様式のものと思われる。989・990は口縁端部に凹線文を施す壺の口縁部で、Ⅳ-1様式のものと思われる。991は壺の頸部～胴部である。992・993は口縁端部に2条の凹線文を施す壺の口縁部～頸部付近で、Ⅳ-1様式のものと思われる。994は口縁端部がやや肥厚する無頸壺の口縁部～胴部で、Ⅲ-2様式のものと思われる。995・996は弥生土器の壺・壺・鉢の底部である。997は口縁端部が肥厚し、口縁外側に3条の凹線文を施す高坏の部で、998は口縁部外側に凹線文、頸部に指頭圧痕

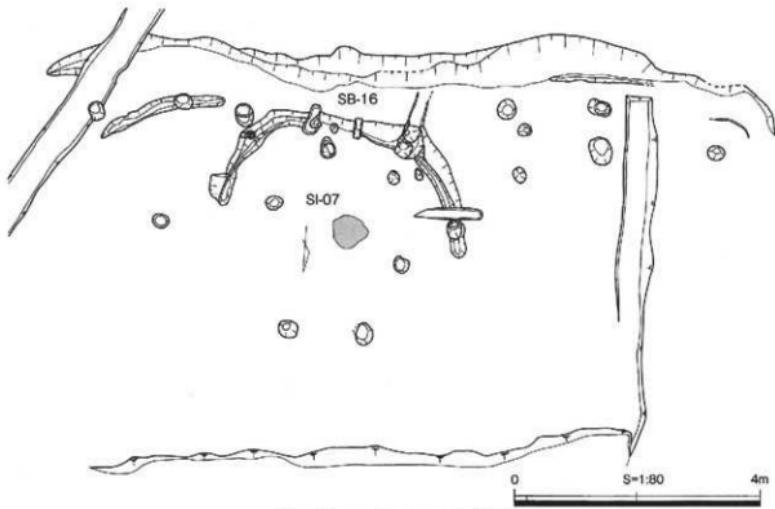
文帯を施す直口壺の口縁部～頸部である。これらはIV-1様式のものと思われる。999は黒曜石の石鏃未製品と思われるものである。

#### SI-07 (第184~186図)

山頂部から派生する北側尾根の環壕外側の斜面に作られた竪穴住居跡である。北側の斜面下方においてはSB-14が、南側の斜面上方には第3環壕が検出されている。

このSI-07は、掘立柱建物跡と思われるSB-16の遺構面を切って作られた、壁体溝を付随する主柱穴6穴(P1~P6)によって構成された竪穴住居跡である。遺構面は、北側(斜面下方)に向かって傾斜しており、流失等により当時の状態を残していない。これによって当時存在したであろう北側付近の周壁は消滅している。その他、住居跡の中央付近からは、焼土跡を検出している。平面プランは、残存する周壁より、方形気味の円形を呈したものと思われ、住居平面規模は、残存する周壁・柱穴を基に復元したもので約4mを測る。

遺物は、遺構面上一層である第1層から弥生土器の壺片1000~1007・高坏片1008・底部1010・1011、石包丁1012・1013、サスカイト製の石鏃1020、黒曜石の石鏃未製品1021、黒曜石の何かの未製品1022が出土している。その他、周辺から弥生土器の底部1009、黒曜石製の石鏃1023が出土している。これら出土遺物のうち、サスカイト製の石鏃1020は剥離がおこなわれていない面の表裏に研磨が施されている。このようなサスカイトを研磨する製品は当地山陰では他に例をみないものである。また、SI-07埋土中やこの周辺から黒曜石のチップを多く検出していることや、上記のとおり黒曜石の未製品が出土していることから、SI-07住居内もしくは、その周辺において石器製作がおこなわれていたものと考えられる。

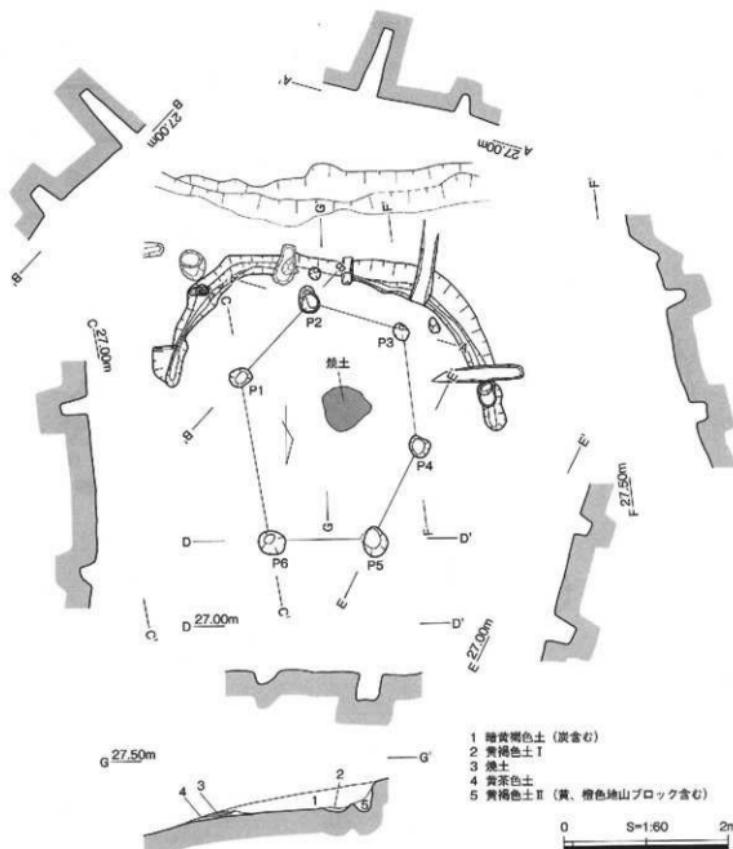


第184図 SI-07・SB-16 平面図

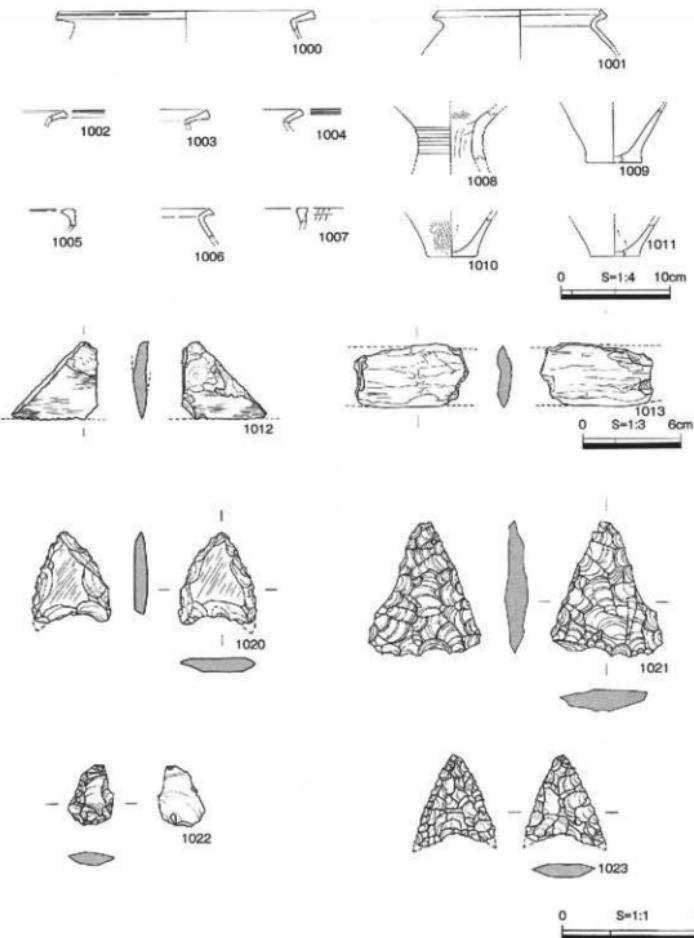
遺構存続時期は、遺構面上一層の埋土中からの出土土器及び、新旧関係にあるSB-16の推定遺構存続時期より、IV-1様式（弥生中期後葉）頃もしくは、それ以前と推定される。

#### SI-07 出土遺物（第186図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

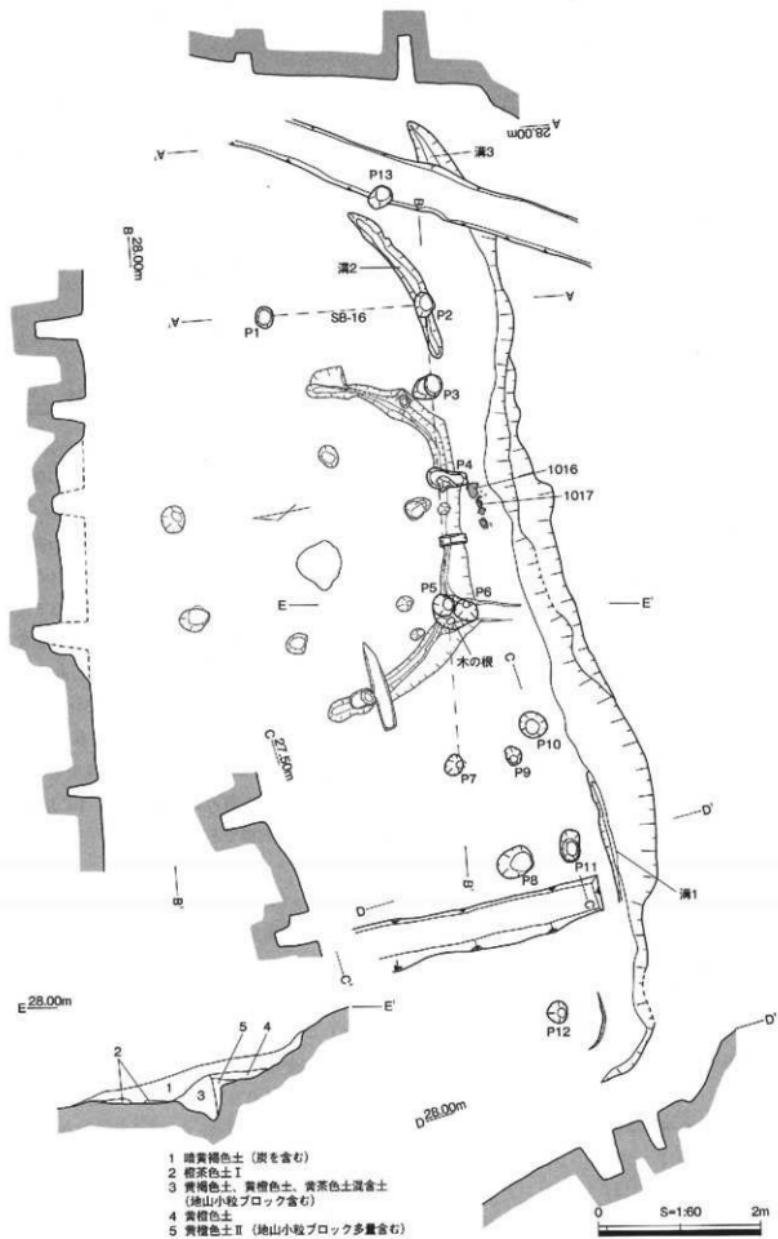
1000は口縁端部に1条または2条の凹線文が施された壺の口縁部～頸部で、III-2様式のものと思われる。1001は口縁端部が上方に拡張した壺の口縁部～肩部で、III-2～IV-1様式のものと思われる。1002～1004・1006は壺の口縁部・口縁部～頸部で、1002・1004には口縁端部に凹線文が施されている。1003はIII-2様式、1002・1004・1006はIV-1様式のものと思われる。1007は口縁端部が平坦面で外面に刻目が施される鉢の口縁部と思われるもので、1005は口縁端部が肥厚し、口縁端部外面に凹線文が施される高壺の口縁部である。これらはIV-1様式のものと思われる。1008は

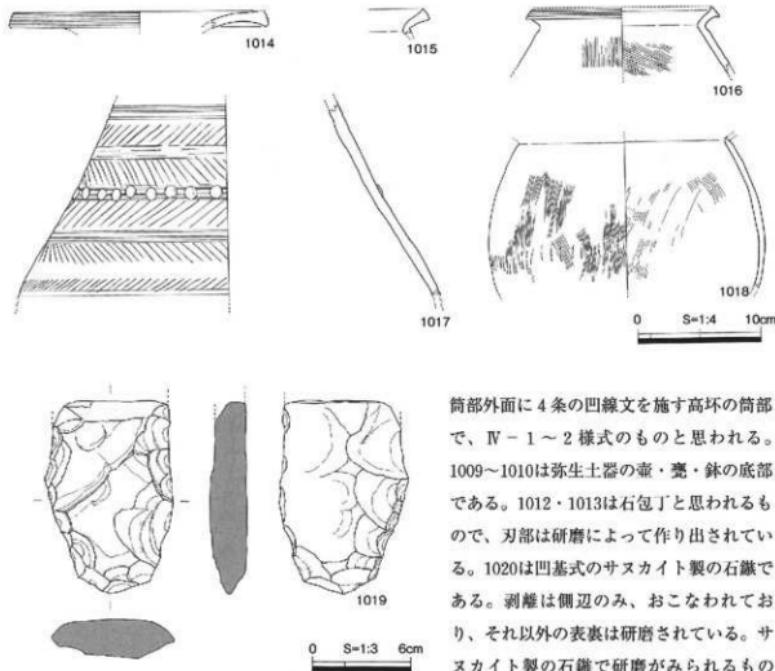


第185図 SI-07 平面図・土層断面図



第186図 SI-07 出土土器・石器





第188図 SB-16 出土土器・石器

筒部外面に4条の凹線を施す高坏の筒部で、IV-1~2様式のものと思われる。1009~1010は弥生土器の壺・甌・鉢の底部である。1012・1013は石包丁と思われるもので、刃部は研磨によって作り出されている。1020は凹基式のサスカイト製の石鏃である。剥離は側辺のみ、おこなわれており、それ以外の表裏は研磨がみられるものは、本遺跡出土品では2点のみである。1021は黒曜石製の石鏃未製品で、1022は黒

曜石製の何かの未製品である。また、1023は黒曜石製の凹基式の石鏃である。

#### SB-16 (第184・187・188図)

山頂部から派生する北側尾根の環壕外側の斜面を段状に切って作られた、掘立柱建物跡と思われるものである。北側の斜面下方においてはSB-14が、南側の斜面上方には第3環壕が検出されている。

この加工段状の北側の遺構面は、前述のとおりSI-07によって切られていることから、大半は消滅しているが、南側の遺構面から溝3条(溝1・2・3)と柱穴13穴(P1~P13)を検出している。柱穴は、P2-P3-P4-P5-P7が直線上に並ぶことから、これを桁行として掘立柱建物跡を考えてみたが、これら柱穴間距離は様々な距離で統一性がみられないことから、これを建物と想定していいものか疑問が残るものである。ただ、これら柱穴の東端では、これを90°北に曲がったところからP1が検出されており、P1-P2間を梁間と想定することは可能とも考えられる。よって、本報告ではP2-P3-P4-P5-P7を桁行、P1-P2間を梁間と考え、桁行4間(5.65m)以上×梁間1間以上の掘立柱建物跡を想定しておきたい。なお、これらの柱穴間距離はP1-P2間2m、P2-P3間1m、P3-P4間1.15m、P4-P5間1.55m、P5-P7間1.95mを

測る。その他、東側の端で検出した溝3（幅25～35cm）は、このSB-16に付随した溝であった可能性も考えられるが、溝1（幅8～12cm）、溝2（幅17～23cm）は、これと伴うであろう柱穴が確認できていないことから詳細不明なものである。

遺物は、P4付近の遺構面から弥生土器の壺1017・甕1016、P5埋土中から打製石斧1019が出土している。また、遺構面上埋土中からは、弥生土器の壺1014・甕1015・1018が出土している。

遺構の存在時期は、遺構面の出土遺物より、IV-1様式期（弥生中期後葉）頃と推定される。

#### SB-16 出土遺物（第188図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

1014は大きく聞く口縁部で、口縁端部に3条の凹線文を施した壺の口縁部である。IV-1～2様式のものと思われる。1017は肩部～胴部に直線文・羽状文・円形浮文を施した大型壺の肩部～胴部で、IV-1様式のものと思われる。1015・1016は口縁端部に凹線文を施す甕の口縁部・口縁部～肩部で、IV-1様式のものと思われる。1018は胴部に貝殻腹縁による刺突文が施された甕の胴部で、1019は打製石斧（打製石鎌）と思われるものである。

#### 小ピット群2（第189図）

山頂部から派生する北側尾根の環濠外側の斜面で検出した小柱穴群である。北側の斜面下方においてはSB-15が、南東側の斜面上方にはSI-08が検出されている。

ここからは、上端径10～30cm、深さ10～30cmの小柱穴10穴（P1～P10）と幅18～24cm・深さ3～8cmの溝を検出している。溝は、東西に幾つか延びていたものと考えられるが、検出時は1.1m残存するのみであったことから、どの様な性格をもつもののか詳細は不明である。柱穴はランダムに点在する状況で検出しているが、P3・P4・P9・P5をつなぐと、1間（2.2m）×1間（2.5m）の建物にもなり得る。ただ、柱穴がこのように並ぶだけで建物を想定するのは、あまりにも短絡的な解釈と思えることから、本報告では、このような建物も推測出来得るものとだけに留めておく。

遺物は、P2埋土第1層中から弥生土器の壺の細片が出土している他、遺構面（柱穴検出面）上の埋土中から弥生中期の土器細片が出土している。

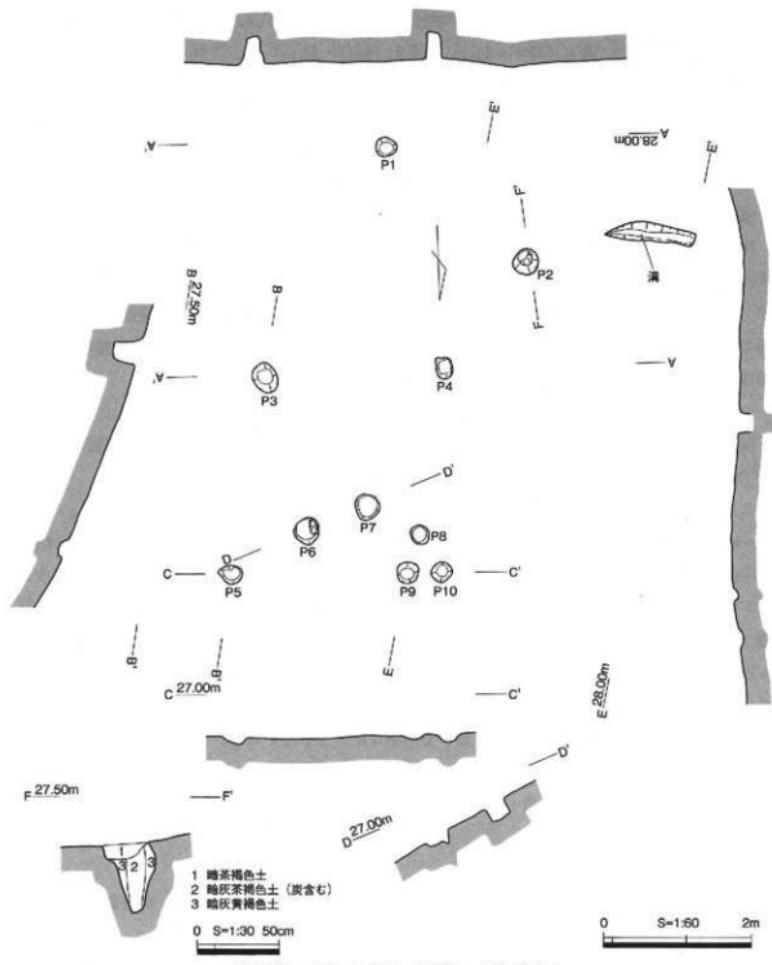
遺構の存在時期は、P2埋土第1層中及び遺構面上の埋土中の出土遺物より、弥生中期頃と推定される。

#### SI-08（第190・191図）

山頂部から派生する北側尾根の環濠外側の斜面に作られた竪穴住居跡である。南西側の斜面上方ではSI-09が検出されており、南東側は急斜面に変わり崖状地となっている。

このSI-08は、壁体溝を付随する主柱穴5穴（P1～P5）によって構成される竪穴住居跡である。住居跡中央では上端径50～60cm、深さ20cmの浅い中央ピットも検出している。遺構面の東半分は、後の削平等により当時の状態を残していないもので、当時存在したであろう東半分の周壁、壁体溝は遺構面と共に消滅しているものであった。平面プランは、残存する周壁・壁体溝から円形を呈するものと推測され、住居平面規模は、残存する周壁・柱穴を基に復元したもので約7mを測るものであったと思われる。

遺物は、遺構面上から砥石1026が、P5内埋土中から弥生土器の甕片1024が出土している。また、遺構面埋土中からは弥生土器の底部1025が出土している。

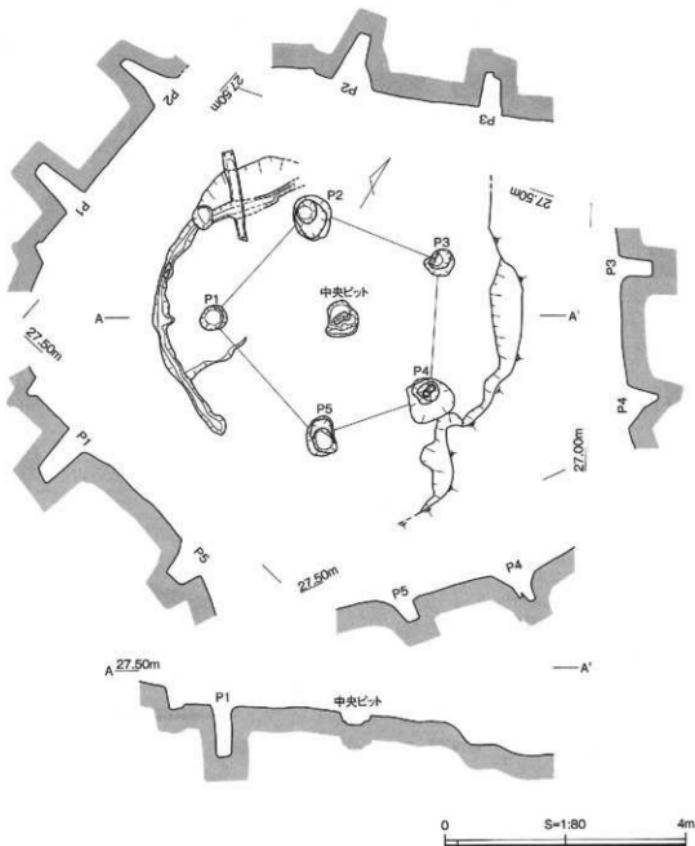


第189図 小ピット群2 平面図・土層断面図

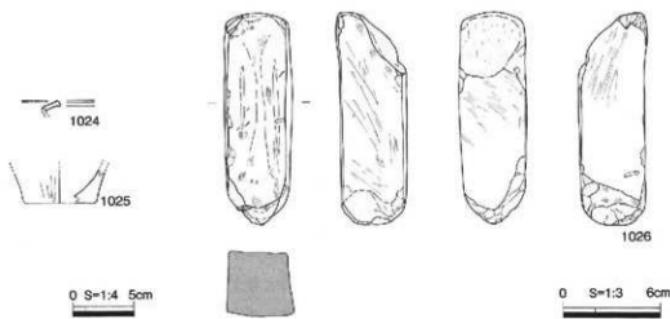
遺構存続時期は、P5内埋土中からの出土土器よりIV-1様式（弥生中期後葉）頃もしくは、それ以前と推定される。

SI-08 出土遺物（第191図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

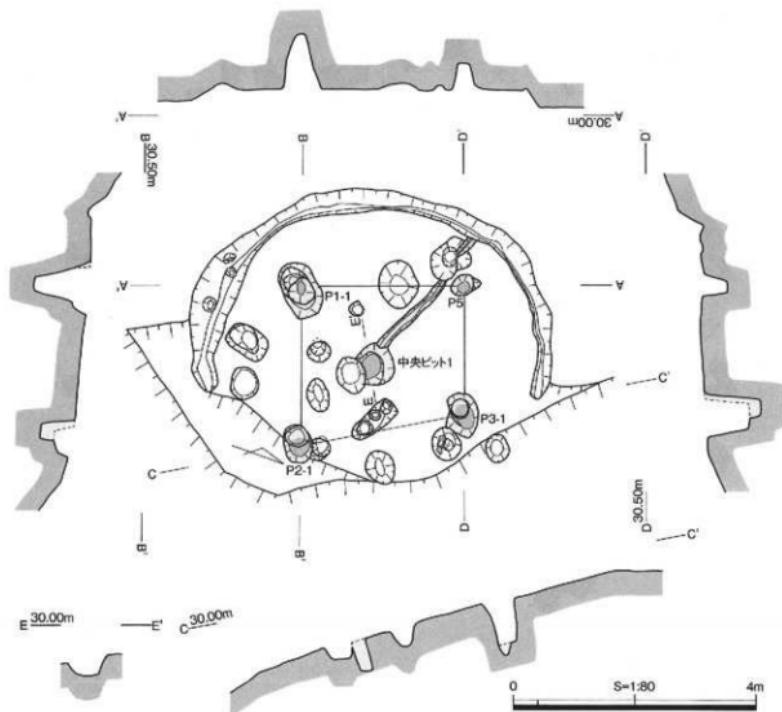
1024は口縁端部に2条の凹線文を施す壺の口縁部で、IV-1様式のものと思われる。1025は弥生土器の壺・甕・鉢の底部で、1026は4面に使用がみられる砥石である。



第190図 SI-08 平面図・断面図



第191図 SI-08 出土土器・石器



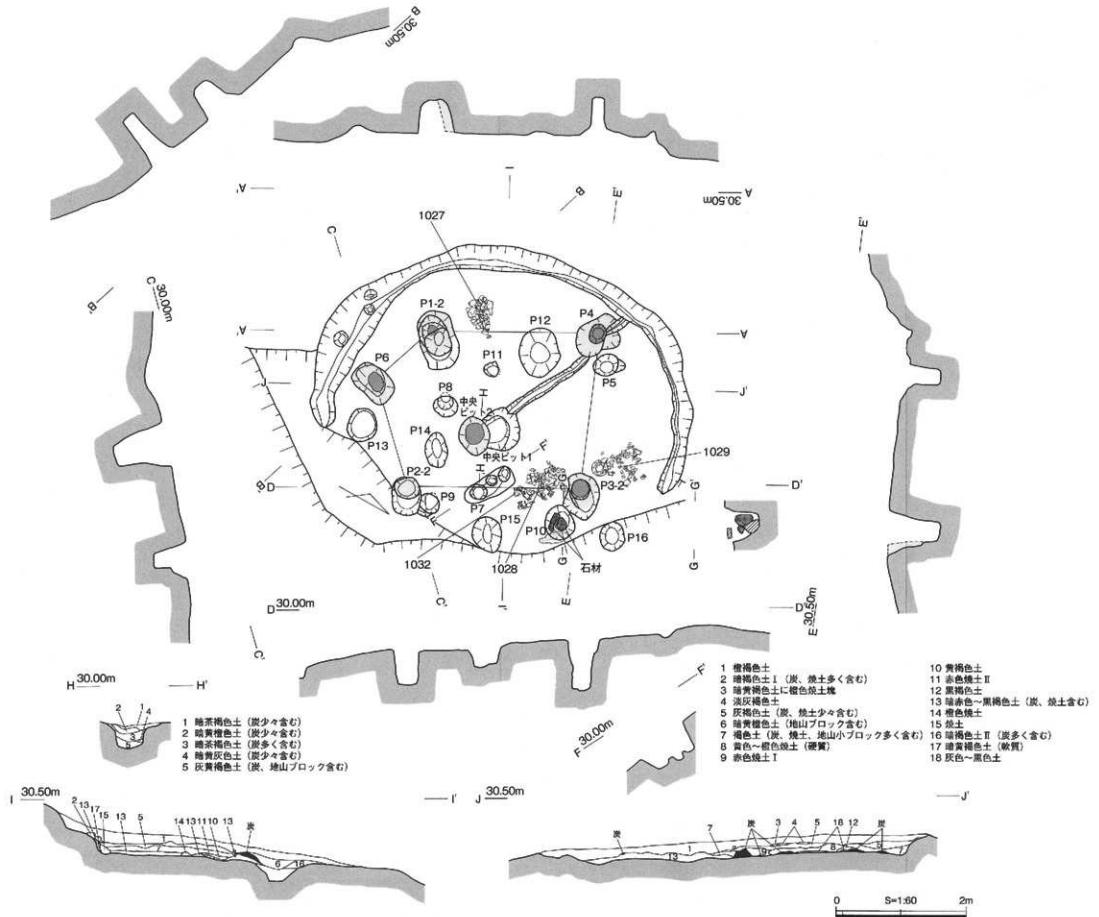
第192図 SI-09-1 平面図・断面図

#### SI-09 (第192~196図)

山頂部から派生する北側尾根の環境外側の斜面に作られた、弥生期の環境外側遺構としては最も東に位置する竪穴住居跡である。南西側の斜面上方では第3環境が、北東側の斜面下方においてはSI-08が検出されている。

SI-09は、焼土が遺構面に覆いかぶさる状態で検出された焼失住居跡である。遺構面においては、掘り直された柱穴の状態から2期の建替えが推測された。以下、建替えの古段階の竪穴住居跡をSI-09-1、新段階の竪穴住居跡をSI-09-2と呼称し、詳細を述べる。

SI-09-1は、4穴の主柱穴（P1-1・P5・P3-1・P2-1）と中央ピット1によって構成される竪穴住居跡である。中央ピット1は、上端径60~65cm、下端径（底径）30cm、深さ34cmを測り、円形を呈している。また、この中央ピット1は住居跡内中央から検出しており、これに連結する壁体溝から延びた溝も合わせて確認している。溝は中央ピット1に向かって傾斜していることから、雨水等を中央ピット1に引き込むためのものと考えられる。また、検出している周壁・壁体溝は、SI-09-2段階のものと思われるが、壁体溝と連結する雨水を引き込む溝がSI-09-1で



第193図 SI-09-2 平面図・土層断面図

存在していることから、SI-09-1段階においてもこの壁体溝が存在していたものと推察される。これにより、周壁もSI-09-2段階と同じものであったと考えられる。平面プラン及び、住居平面規模は、東側の周壁・壁体溝が遺構面と共に流失している状況で、全容を残すものではなかったが、残存する周壁・壁体溝から、壁体溝を含め南北5.5m、東西5mのやや楕円形を呈するものであったと推測される。

SI-09-2は、5穴の主柱穴（P1-2・P4・P3-2・P2-2・P6）と中央ピット2によつて構成される竪穴住居跡である。検出された焼失竪穴住居跡は、このSI-09-2の段階のものである。主柱穴のP1-2・P3-2・P2-2は、SI-09-2の柱穴を掘り直す形で、そのほぼ元位置に位置し、P4はP5のやや東に掘り直され、南東側に新たにP6が作られている。中央ピット2は、上端径50~60cm、下端径（底径）30~33cm、深さ35cmを測り、楕円形を呈するものである。この中央ピット2は、中央ピット1の南東側に掘り直されたもので、SI-09-1のような溝はなく、埋土からは炭が多く検出されている。平面プラン及び、住居平面規模は、SI-09-1と同様である。その他、遺構面から布掘り状のP7、石材が入ったP10を検出している。P7は、上端35~85cm、深さ25cmの楕円もしくは、長方形状に掘られた中に上端径20~25cm、深さ30~45cmの3穴の小形ピットをもつものである。布掘り状で小形のピットが3穴なるその形態から、特異な性格を有するものと考えられるが、建物の構造・施設に関わるものであったのか等、詳細は不明なものである。P10は、残存する遺構面の北側端付近で検出した、角ばった石が入り込んだピットである。形状・深さは他の柱穴と同等なものである。このような石が入るピットは、同じ弥生竪穴住居跡であるSI-01においても同様に住居内北側付近にて検出されている。このピットの用途・性格は不明と言わざるを得ないものであるが、建物に関するものと考えるよりも、衣住・生活に関わる何かの施設であったと考えるほうが妥当なものなのかも知れない。この他、SI-09-2からは、焼失住居跡であったことから炭化木材等、豊富な資料を得ることができる。この竪穴住居跡の検出時は、ほぼ一面に赤色・橙色に焼けた焼土がみられ、その下から炭化木材が検出されている。焼土は、硬質で非常に良く焼けた状況を示しており、消火するための上ではなく建物の屋根を覆っていた上であったものと考えられる。また、この焼土の下から検出された炭化木材は、竪穴住居の建築材であり、垂木等、当時の建築材の詳細が分かるものであった。炭化建築材はスダジイ等のシイ属が大半を占め、中にはヤブニッケイ等もみられる。<sup>(8)</sup> これら検出した炭化建築材のうち、特筆するものとして、No.3（第194図）のスダジイ材で作られた垂木があげられる。この垂木は、丸木を半裁しているもので、その半裁した平らな面に茅が垂木と直交する形で置かれて、さらにその上に茅を垂木と併行する形で置き、茅の上には焼土が付着している状況が覗えた。このことにより、SI-09-2は、垂木等の建築構造材を組む→垂木に茅を横方向に葺く→横方向の茅の上に再度茅を縱方向に葺く→茅の上に土を被せる、といった工程で作られたことが分かっている。<sup>(9)</sup> この他の特筆する炭化物としては、No.8（第194図）がある。この炭化物は、垂木材と思われるNo.7の下から検出したことや、検出時において、茅のような植物繊維質とみられたことから、茅のようなものと推測されるものである。なお、この炭化物No.8は、より正確な材の同定をするため、植物珪酸体分析をおこなったが、植物組織片が認められない結果がでている。<sup>(10)</sup>

遺物は、遺構面（床面）から弥生土器の壺1027・1028・1029がそれぞれ一個体ずつ潰れた形で出